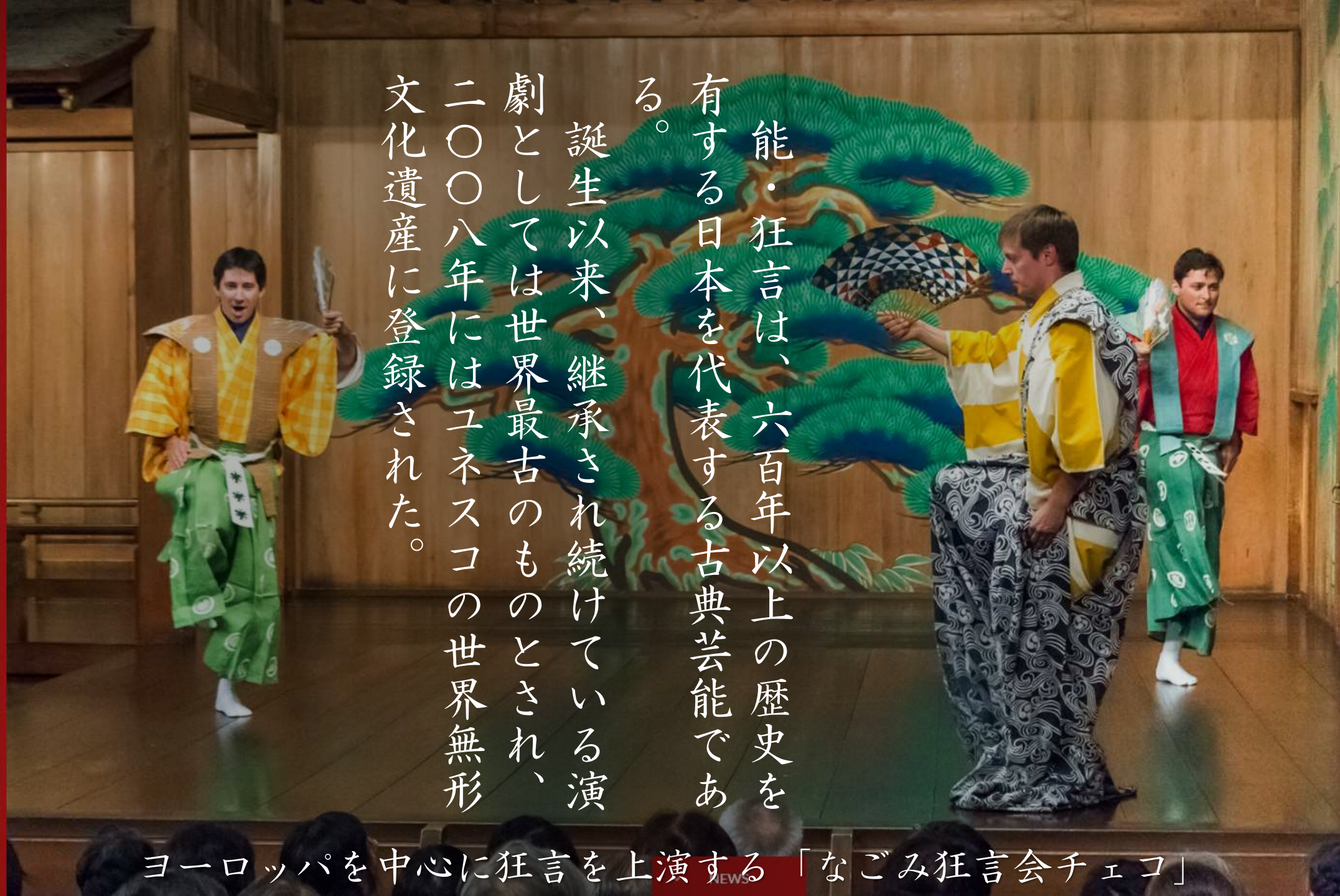
中国の文化IX 第10回

敦煌文書と狂言

› Top
› News & Topics
› About us
› Research Activities
› Seminar Report
› Digital Archives
› Publication
› Research Diary (Facebook)
› Access
› Related Links
› 日本語



能・狂言は、六百年以上の歴史を有する日本を代表する古典芸能である。

誕生以来、継承され続けている演劇としては世界最古のものとされ、二〇〇八年にはユネスコの世界無形文化遺産に登録された。

ヨーロッパを中心に狂言を上演する「なごみ狂言会チェコ」

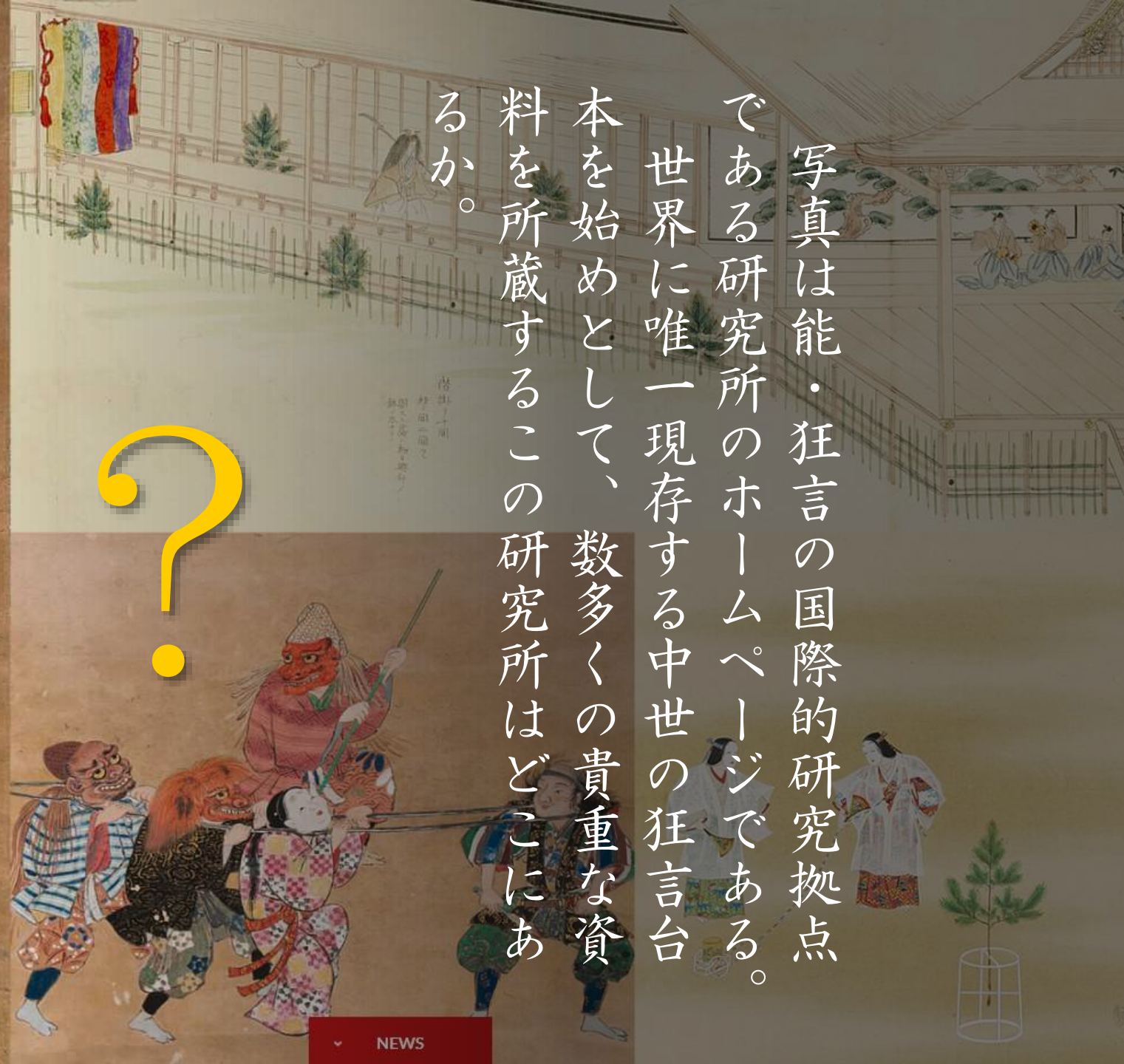
© The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University. All Rights Reserved.
2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo JAPAN,
102-8160
TEL 03 (3264) 9815 FAX 03 (3264) 9607

The Nogami Memorial
Noh Theatre Research
Institute of Hosei University

Center for International and Interdisciplinary Research on Noh Theatre

- Top
- News & Topics
- About us
- Research Activities
- Seminar Report
- Digital Archives
- Publication
- Research Diary (Facebook)
- Access
- Related Links
- 日本語

© The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University. All Rights Reserved.
2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo JAPAN, 102-8160
TEL 03 (3264) 9815　FAX 03 (3264) 9607



写真は能・狂言の国際的研究拠点である研究所のホームページである。世界に唯一現存する中世の狂言台本を始めとして、数多くの貴重な資料を所蔵するこの研究所はどこにあるか。

NEWS

敦煌文書と狂言

前回の講義で紹介した敦煌文書の中には、その後散逸した書籍も数多く含まれていた。その一つに敦煌写本『啓顔録』がある。

敦煌写本『啓顔録』の発見によって、狂言の中に唐代、中国から伝わった笑話にルーツをもつものがあることが明らかになった。

今回は、敦煌文書の発見によって明らかになった狂言と中国との関係について紹介するとともに、なぜこれらの文書が莫高窟第十七窟(蔵経洞)に封蔵されたのかについて考えてみたい。

敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞

目次

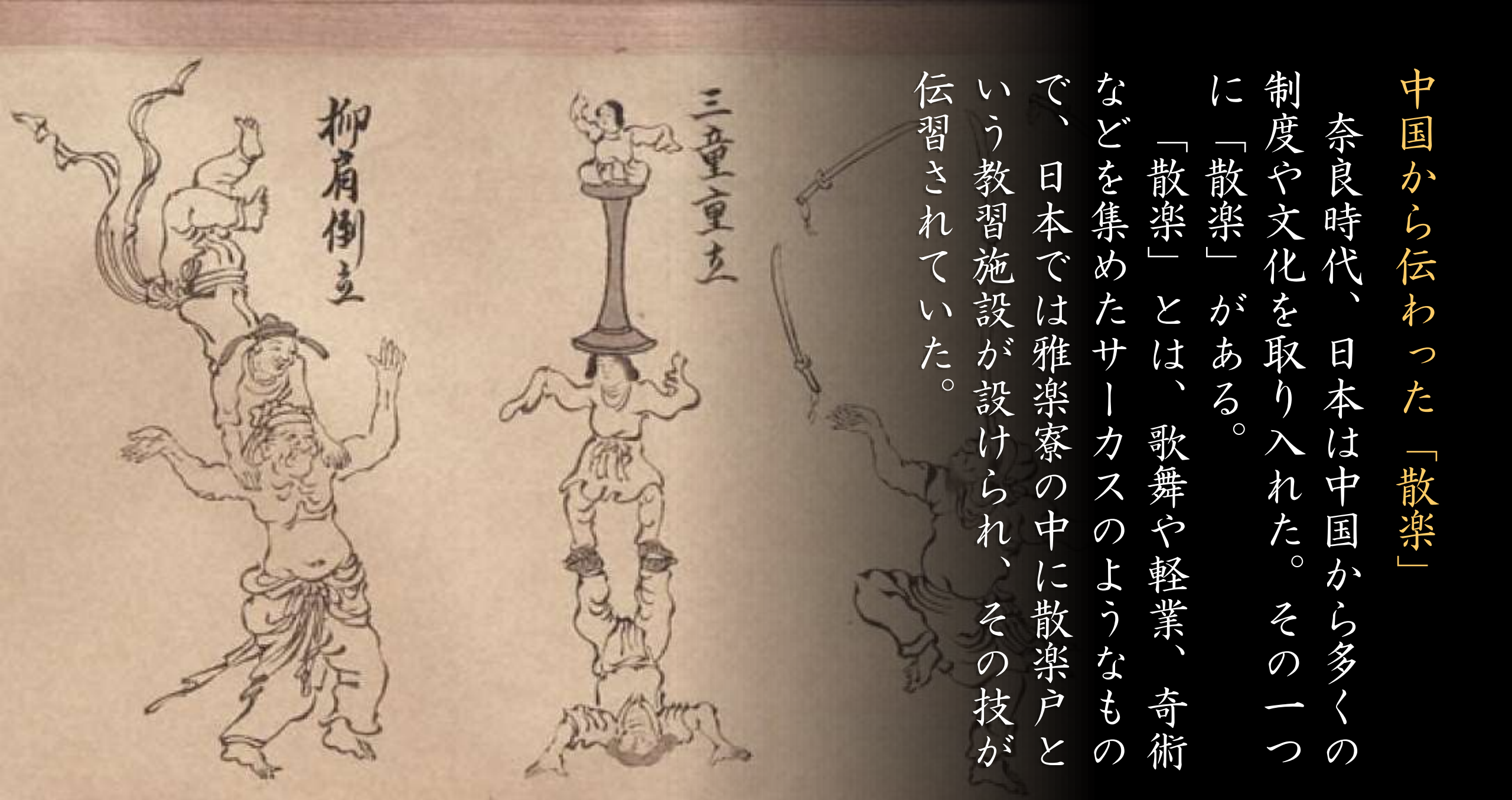
第一節　狂言はどのように誕生したか
第二節　狂言「附子」と敦煌写本『啓顔録』
第三節　狂言「鏡男」と敦煌写本『啓顔録』
第四節　敦煌写本『啓顔録』の伝来
第五節　敦煌写本『啓顔録』の発見
第六節　敦煌文書はなぜ封蔵されたのか
まとめ

第一節 狂言はどのように誕生したか

中国から伝わった「散楽」

奈良時代、日本は中国から多くの制度や文化を取り入れた。その一つに「散楽」がある。

「散楽」とは、歌舞や軽業、奇術などを集めたサーカスのようなもので、日本では雅楽寮の中に散楽戸という教習施設が設けられ、その技が伝習されていた。



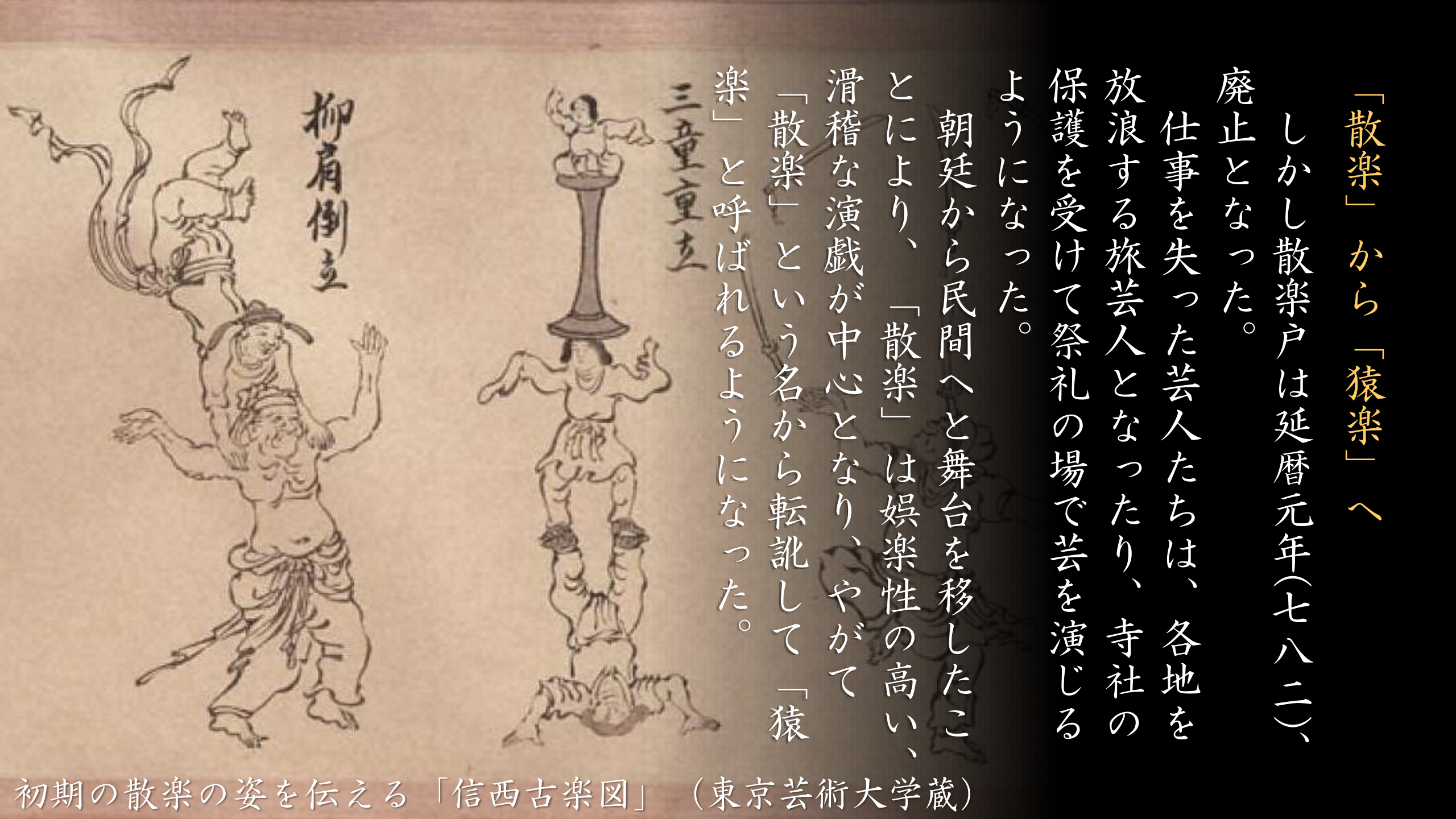
初期の散楽の姿を伝える「信西古楽図」（東京芸術大学蔵）

「散楽」から「猿楽」へ

しかし散楽戸は延暦元年(七八二)、廃止となった。

仕事を失った芸人たちは、各地を放浪する旅芸人となったり、寺社の保護を受けて祭礼の場で芸を演じるようになった。

朝廷から民間へと舞台を移したことにより、「散楽」は娯楽性の高い、滑稽な演戯が中心となり、やがて「散楽」という名から転訛して「猿楽」と呼ばれるようになった。

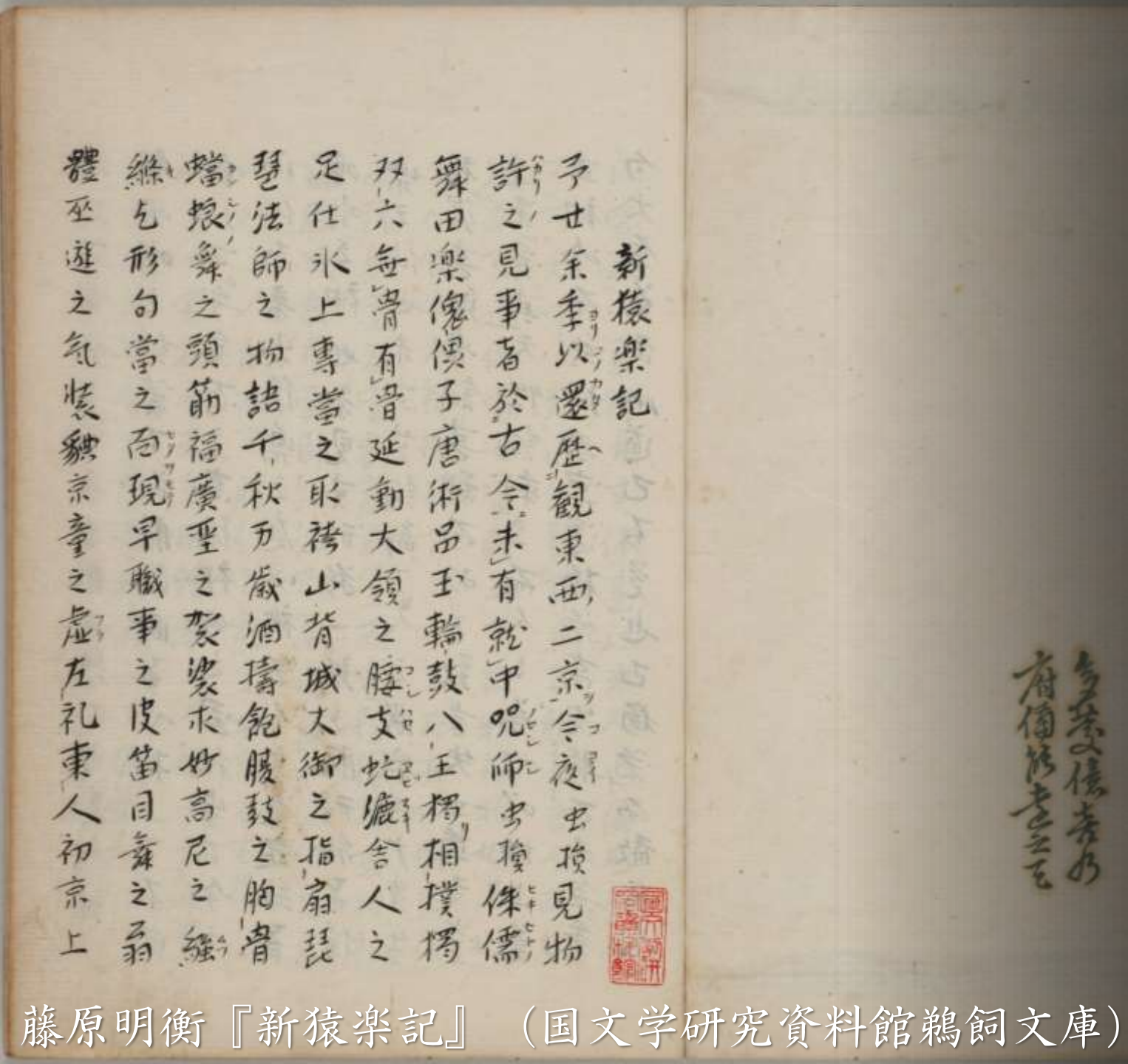


初期の散楽の姿を伝える「信西古楽図」（東京芸術大学蔵）

散楽と猿楽・申楽

平安時代中期の十一世紀半ば、『新猿楽記』を著した藤原明衡は、同書の冒頭で、人々が猿楽の滑稽な演戯に興じる姿をこう描いている。

「猿楽のしぐさとばかばかしい言葉に、腸はよじれ、顎が外れるほど大笑いしない者はいなかった。」


新猿楽記
予世余季以還歴観東西二京今夜出現見物
許之見事者於古今未有就中呪師出獲侏儒
舞田楽像俣子唐術品玉輪鼓八王楯相撲楯
双六毎骨有骨延動大領之腰支蛇婆舎人之
足仕氷上専當之耶袴山背城大御之指扇琵
琶法師之物語千秋万歳酒壽飽腹鼓之胸骨
蟷螂舞之頭筋福廣聖之袈裟求妙高尼之繊
絲乞形白當之面現早職事之皮笛目舞之扇
體巫遊之気裝束京童之壺左礼東人初京上

藤原明衡『新猿楽記』（国文学研究資料館鵜飼文庫）

散楽と猿楽・申楽

〔解説〕

「猿楽」はやがて謡と舞と囃子によって物語を演じる能へと発展していった。

一方、人間の愚かさをコミカルに描く「猿楽」の伝統は、狂言へと受け継がれていった。

狂言「附子」（『狂言絵』国文学研究資料館蔵）

狂言「附子」（『狂言絵』国文学研究資料館蔵）

では、中国では「散楽」はその後どうなったのか？

宋雑劇「眼薬酸」絹画（北京故宮博物院蔵）

中国の「散楽」

日本で「散楽」が「猿楽」へと変化した平安時代の末から室町時代にかけて、中国でも「散楽」の中心は、雑劇、院本などと呼ばれる滑稽な寸劇へと変化していた。

左の図は、宋雑劇の上演風景を描いたものである。

狂言「仁王」（月岡耕漁画『能楽図絵』1898年）

日本の狂言と中国の院本

〔解説〕

宋雑劇や院本は、日本の狂言によく似た笑劇であったことが知られている。

たとえば、日本の狂言に「なりすまし」をモチーフとした一連の曲がある。金儲けをたくらむ男が、仁王像や仏像になりすまし、人から財物を騙し取ろうとするが、最後は正体がばれ、追込まれるという話である。

これと同じようなモチーフをもつ院本が、明代の小説『金瓶梅詞話』第三十一回に描かれている。

中国の笑劇「院本」

傅末（末＝シテ 使用人）
節級（外＝アド 主）
秀才（淨＝アド 書生風のたらし）

〔あらすじ〕

主が謡とともに登場。名乗りの後、使用人を呼び出す。

主は屏風に書かれた詩が気に入ったので、作者の王勃を探すよう使用人に言いつける。

しかし王勃は千年も前の唐代の人。困った使用人は街へ行き、偶然出会った書生に「あなたは王勃さまではありませんか」と声をかける。

（『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七年刊）

新刻金瓶梅詞話卷之一

第一回

景陽岡武松打虎　潘金蓮鄆哥賞月

詞曰丈夫隻手把吳鈎欲斬蒲人頭如何鉄石打成心性却爲花柔請看項籍并劉季一似使人愁只因撞着虞姬虞氏

豪傑都休

此一隻詞兒單說着情色二字乃一體一用故色約于目情感于心情色相生心目相視且古及今仁人君子弗合忘之晉人云情之所鍾正在我輩如磁石吸鐵膠漆潛通無情之物尚爾何況爲人終日在情色中做活計一節道而丈夫隻手把吳鈎吳鈎乃古劍也古有干將莫邪太阿吳鈎魚腸獨孤之名言丈

『金瓶梅詞話』（1617年刊、台湾故宮博物院蔵）

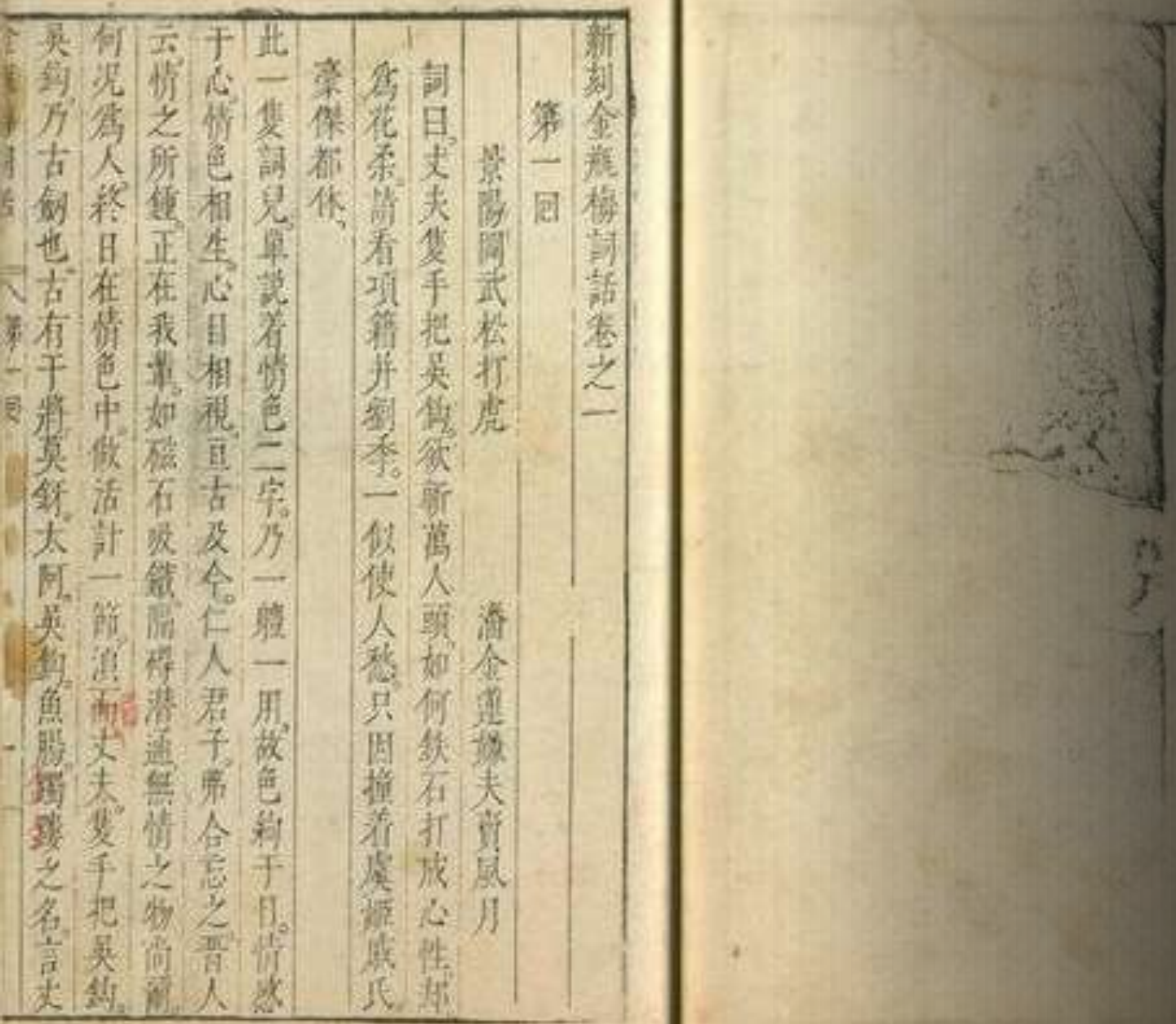
中国の笑劇「院本」

「あらすじ」

すると書生は意外にも「そうだ」と答える。

使用人が「しかし王勃さまは身の丈三尺のはず。あなた様では背丈が合いません」というと、書生は瞬く間に身の丈三尺の王勃に変身する。

（『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七年刊）



『金瓶梅詞話』（1617年刊、台湾故宮博物院蔵）

中国の笑劇「院本」

「あらすじ」

とはいえ、いつまでもその姿勢でいるのは苦しいので、書生は使用人に小さな腰かけを用意しておくよう頼む。

ところが使用人は書生を困らせようと、わざと腰かけを用意しない。我慢できなくなった書生はとうとう正体を現してしまう。

（『金瓶梅詞話』第三十一回、一六一七年刊）

新刻金瓶梅詞話卷之一

第一回

景陽岡武松打虎　潘金蓮鬬夫賣風月

詞曰丈夫隻手把吳鈎欲斬蕩人頭如何鉄石打成心性却爲花柔請看項籍并劉季一似使人愁只因撞着虞姬虞氏豪傑都休

此一隻詞兒單說着情色二字乃一體一用故色約于目情感于心情色相生心目相視且古及今仁人君子弗合忘之晉人云情之所鍾正在我輩如磁石吸鐵膠漆潛通無情之物尚爾何況爲人終日在情色中做活計一節道而丈夫隻手把吳鈎吳鈎乃古劍也古有干將莫邪太阿吳鈎魚腸獨鍵之名言丈

『金瓶梅詞話』（1617年刊、台湾故宮博物院蔵）

書生役の役者は、どうやって瞬く間に身の丈三尺(約一メートル)の王勃に変身したのか？

新刻金瓶梅詞話卷之一

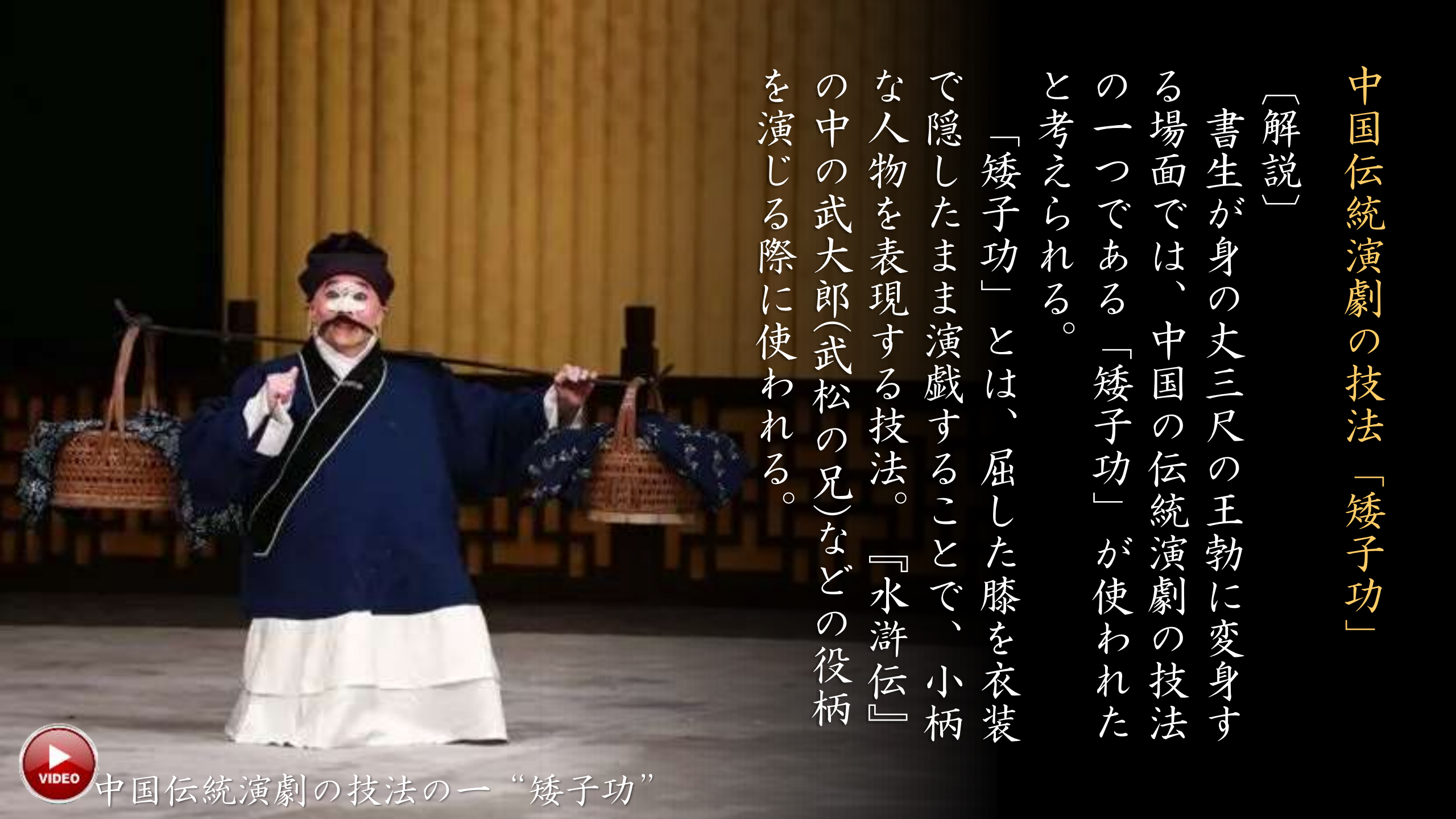
第一回

景陽岡武松打虎　潘金蓮鬧夫賣風月

詞曰。丈夫隻手把吳鈎。欲斬蕩人頭。如何鉄石打成心性却。爲花柔。請看項籍并劉季。一似使人愁。只因撞着虞姬戚氏。豪傑都休。

此一隻詞兒。單說着情色二字。乃一體一用。故色約于目。情感于心。情色相生。心目相視。且古及今。仁人君子。弗合忘之。晉人云。情之所鍾。正在我輩。如磁石吸鐵。隔碍潛通。無情之物尚爾。何況爲人。終日在情色中做活計一節。須而丈夫。隻手把吳鈎。吳鈎。乃古劍也。古有干將吳鈎。太阿。吳鈎。魚腸。蠭之名。言丈

『金瓶梅詞話』(1617年刊、台湾故宮博物院蔵)



中国伝統演劇の技法「矮子功」

〔解説〕

書生が身の丈三尺の王勃に変身する場面では、中国の伝統演劇の技法の一つである「矮子功」が使われたと考えられる。

「矮子功」とは、屈した膝を衣装で隠したまま演戯することで、小柄な人物を表現する技法。『水滸伝』の中の武大郎(武松の兄)などの役柄を演じる際に使われる。

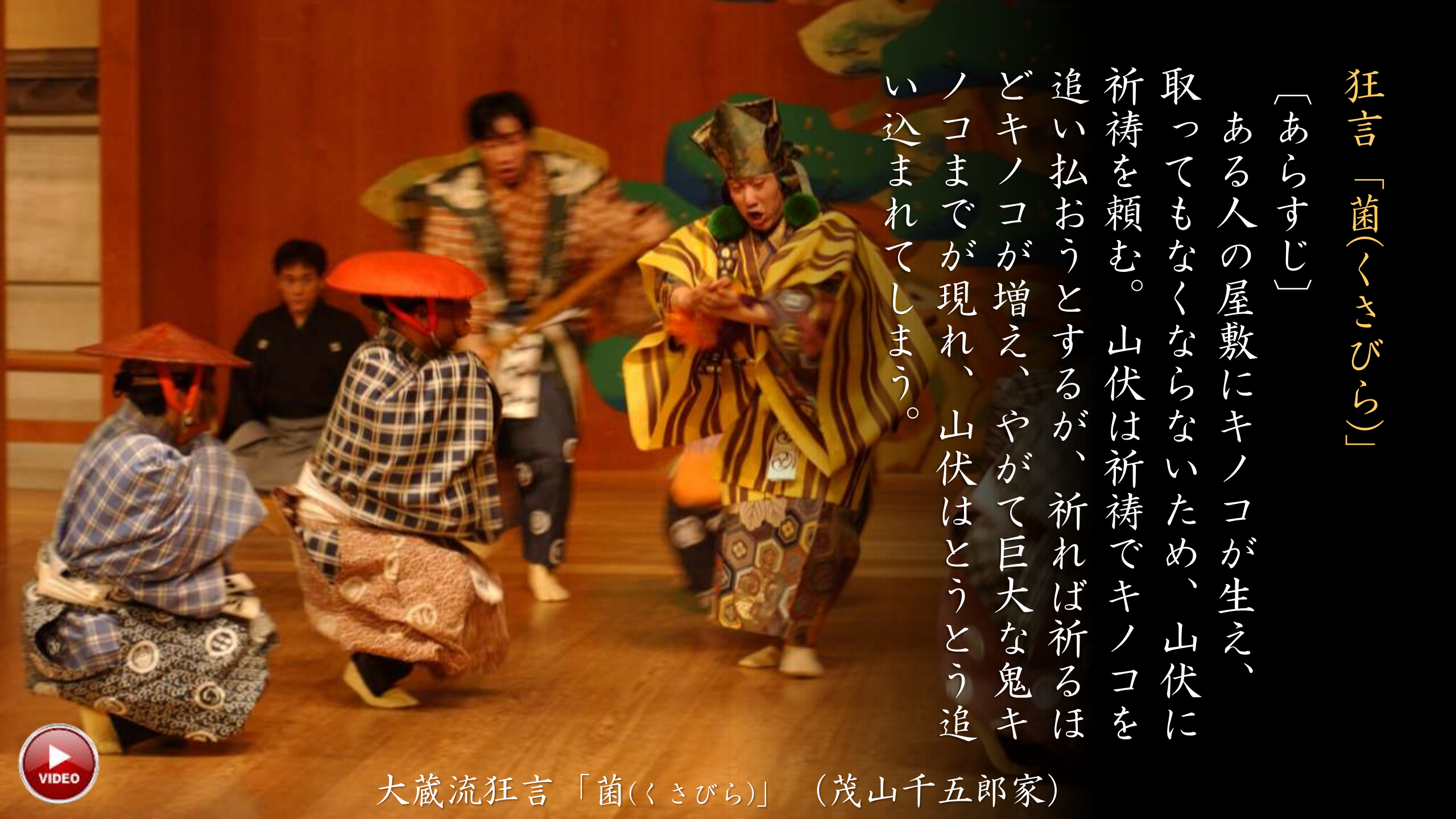
VIDEO 中国伝統演劇の技法の一“矮子功”

京劇「武松」第二幕「紫石街遇兄」（朱何吉飾武大郎）

狂言「菌（くさびら）」

〔解説〕

これと似た技法は、狂言「菌」の中でも使われている。



狂言「菌(くさびら)」

〔あらすじ〕

ある人の屋敷にキノコが生え、取ってもなくならないため、山伏に祈祷を頼む。山伏は祈祷でキノコを追い払おうとするが、祈れば祈るほどキノコが増え、やがて巨大な鬼キノコまでが現れ、山伏はとうとう追い込まれてしまう。

大蔵流狂言「菌(くさびら)」（茂山千五郎家）

大蔵流狂言「菌」（茂山千五郎家）

山西省洪洞県広勝寺明応王殿元雑劇壁画

中国の「散楽」と日本の「猿楽」

では、中国ではこうした演劇は一般にどのように呼ばれていたのか。

中国山西省にある広勝寺には、元の泰定元年(一三二四)にここで奉納芝居を演じた一座の壁画がある。

この壁画には、中国で本格的な楽劇が誕生した元代に、それが何と呼ばれていたかを知る手がかりが残されている。

NHKスペシャル「故宮」第10回より

中国の「散楽」と日本の「猿楽」

この壁画の上には、次のような画題が記されている。

大行散楽忠都秀在此作場
泰定元年四月
（大行の散楽忠都秀ここに上演す
泰定元年四月）

中国では、本格的な楽劇が誕生した元代になっても、演劇は「散楽」と呼ばれていたのである。

山西省洪洞県広勝寺明応王殿元雑劇壁画

中国の「散楽」と日本の「猿楽」

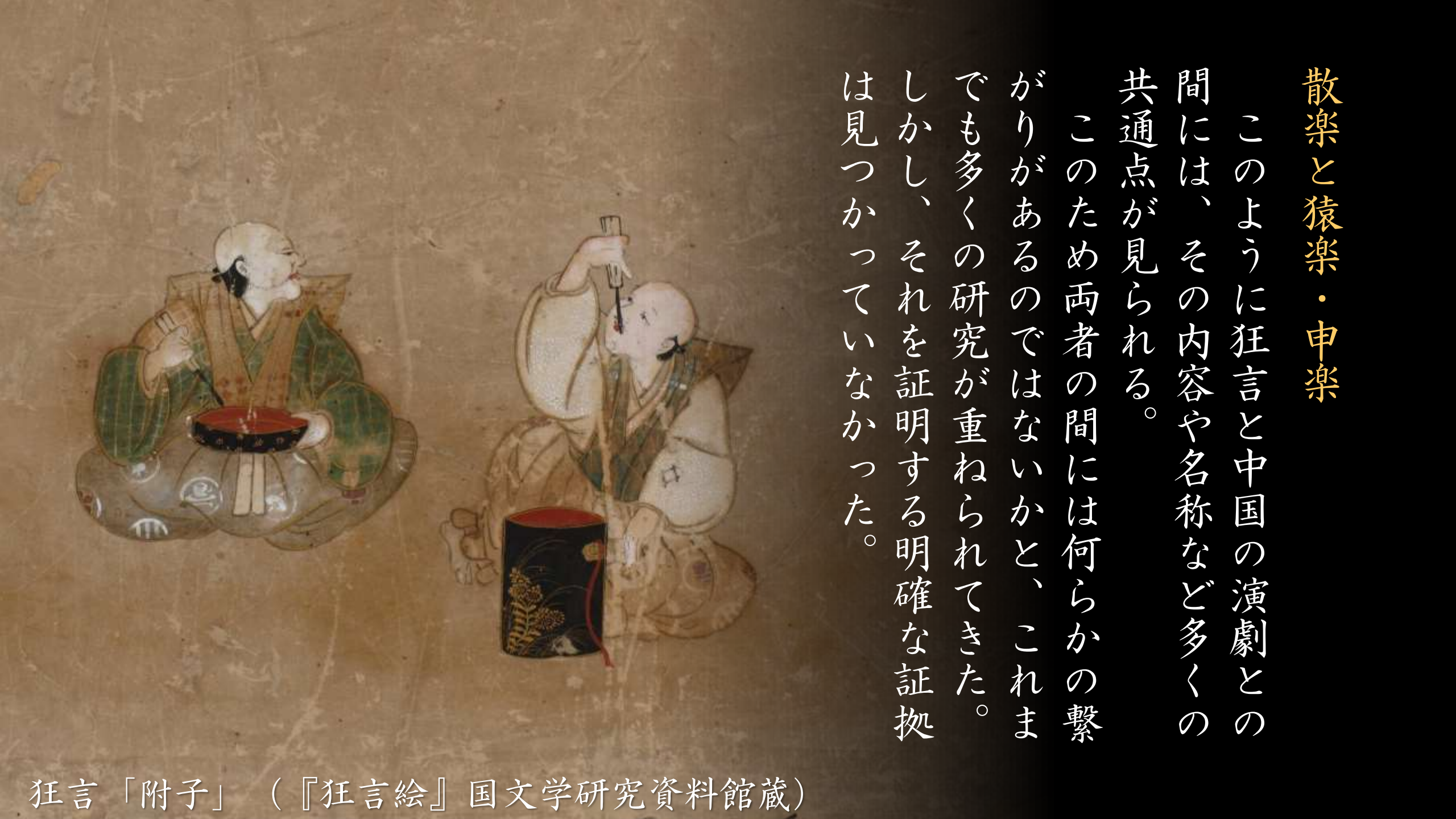
この壁画が描かれた元の時代といえば、「渡来僧の世紀」とも呼ばれるように、禅僧を中心とする日中間の民間交流がもっとも盛んであった時代であった。

また大蔵流狂言の流祖とされる玄恵法印(一二六九～一三五〇)が活躍したのもこの時代でもある。

散楽と猿楽・申楽

このように狂言と中国の演劇との間には、その内容や名称など多くの共通点が見られる。

このため両者の間には何らかの繋がりがあるのではないかと、これまでも多くの研究が重ねられてきた。しかし、それを証明する明確な証拠は見つかっていなかった。



狂言「附子」（『狂言絵』国文学研究資料館蔵）

敦煌写本『啓顔録』の発見

ところがシルクロードの仏教石窟（莫高窟第十七窟）で発見された古文書の中から、その繋がりを示す資料が見つかった。

それが敦煌写本『啓顔録』である。

敦煌莫高窟第17窟(画面右端)と発見された古文書

第二節　狂言「附子」と敦煌写本『啓顔録』

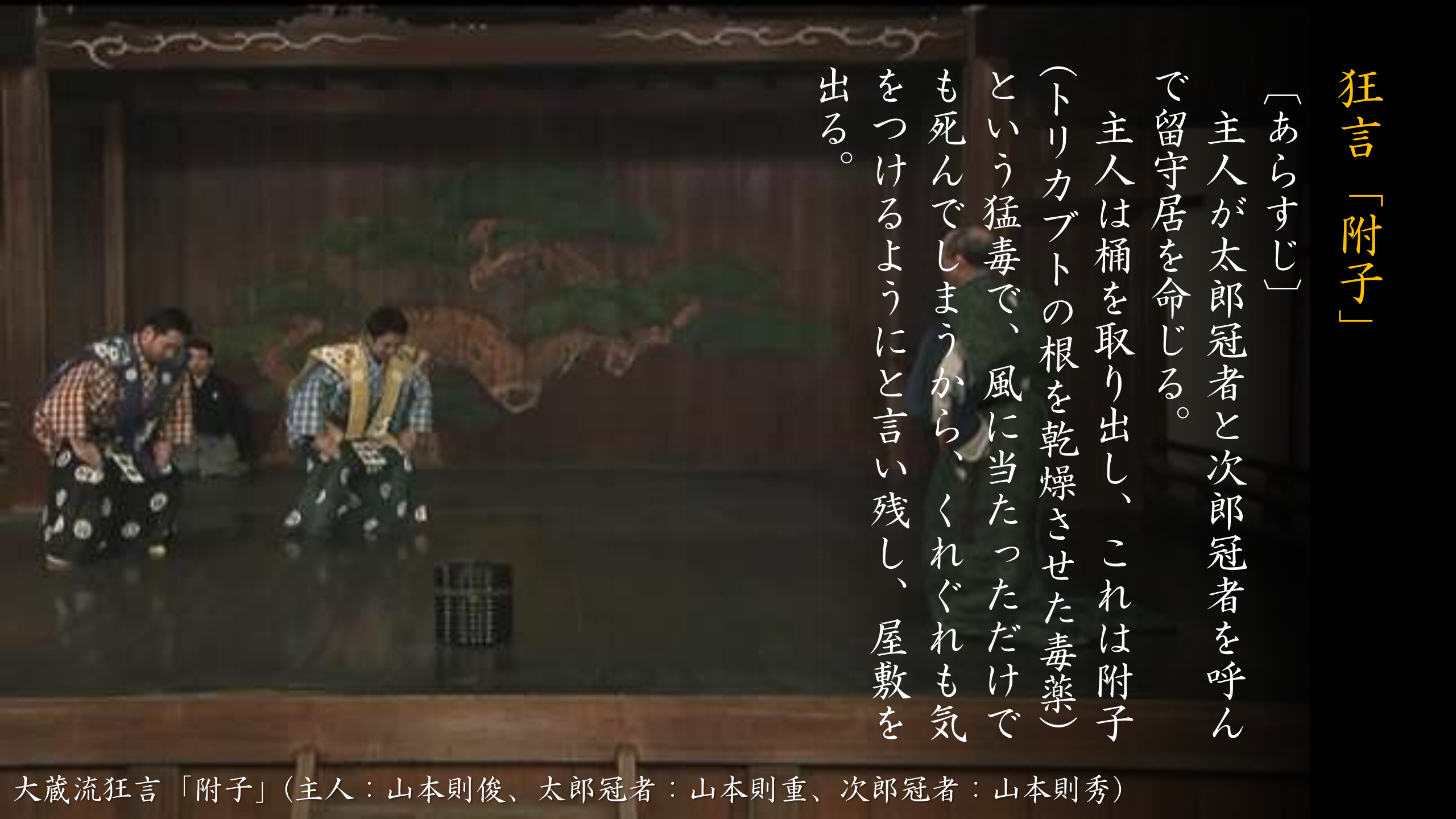
狂言「附子」

〔解説〕

狂言の現行曲(現在も上演されている演目)には、和泉流が二五六曲、大蔵流が二〇〇曲、両者の重複を除き、計二六三曲がある。

その中でもっともよく知られているのが「附子」である。

大蔵流狂言「附子」(主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)



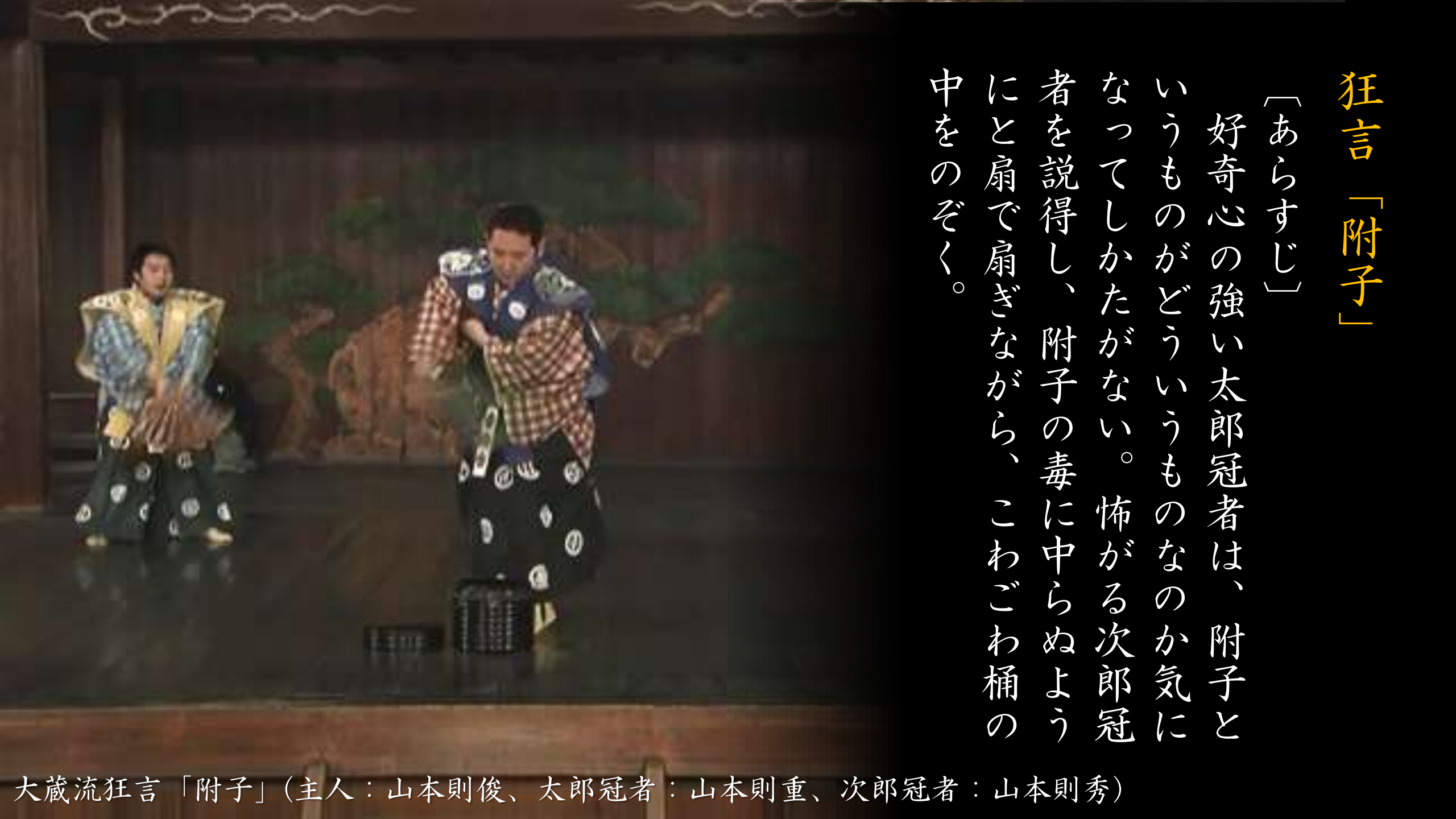
狂言「附子」

〔あらすじ〕

主人が太郎冠者と次郎冠者を呼んで留守居を命じる。

主人は桶を取り出し、これは附子（トリカブトの根を乾燥させた毒薬）という猛毒で、風に当たっただけでも死んでしまうから、くれぐれも気をつけるようにと言い残し、屋敷を出る。

大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）



狂言「附子」

「あらすじ」

好奇心の強い太郎冠者は、附子というものがどういうものなのか気になってしかたがない。怖がる次郎冠者を説得し、附子の毒に中らぬようにと扇で扇ぎながら、こわごわ桶の中をのぞく。

大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

砂糖を食べる太郎冠者と次郎冠者

狂言「附子」

〔あらすじ〕

ところが桶の中に入っていたのは、意外にも砂糖だった。ケチな主人は、二人に砂糖をつまみ食いされないようにと、嘘をついたのだ。

太郎冠者と次郎冠者は「こんなうまいもの食べたことがない」と砂糖を頬張る。

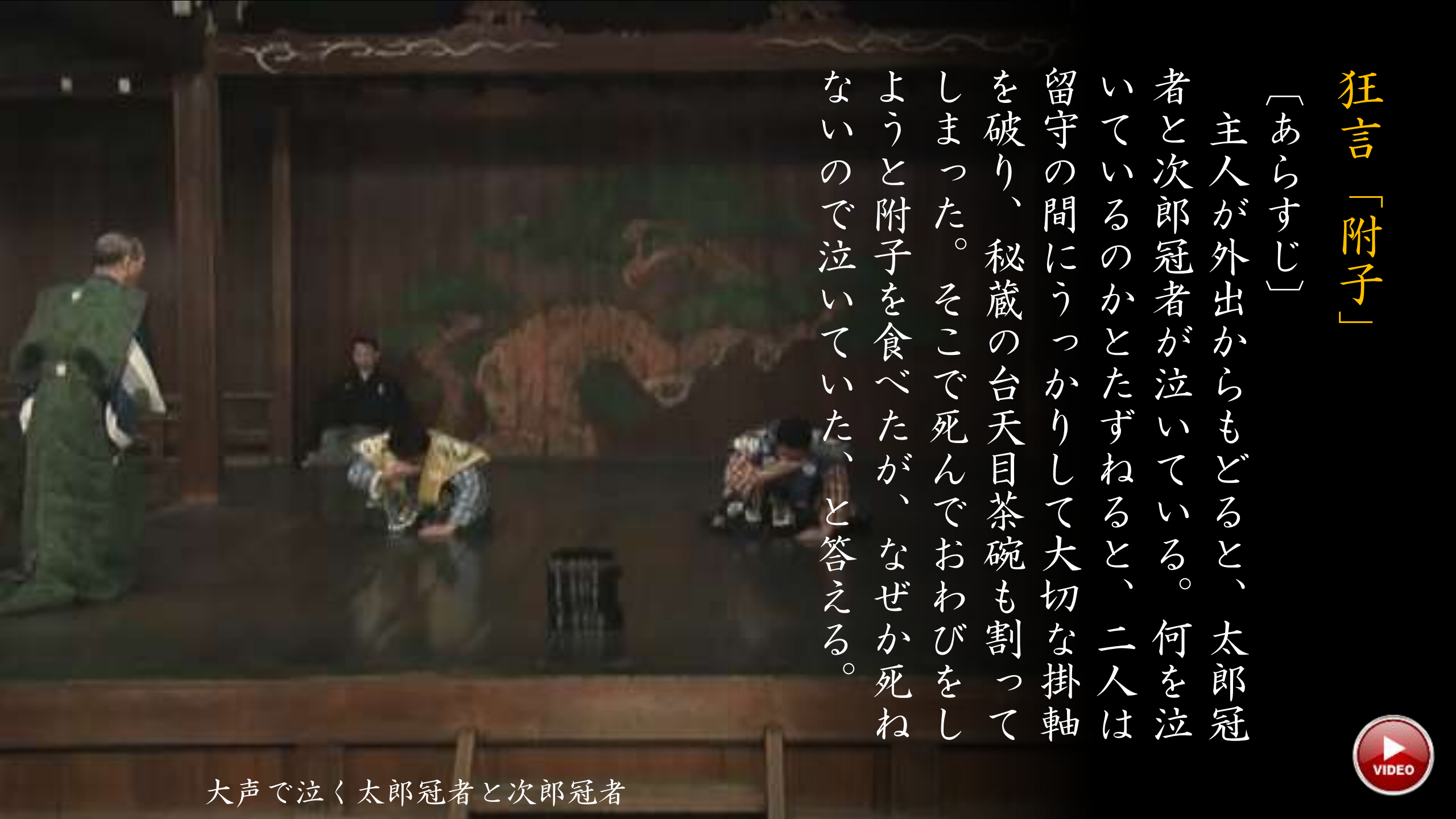
天目茶碗を割る太郎冠者と次郎冠者

狂言「附子」

〔あらすじ〕

二人が奪い合うように食べていると、桶の中は空っぽになってしまう。

太郎冠者は、主人が帰ってきたときの言い訳にと、次郎冠者に主人が大切にしている掛軸を破らせ、さらに二人で秘蔵の台天目茶碗も割ってしまう。



狂言「附子」

〔あらすじ〕

主人が外出からもどると、太郎冠者と次郎冠者が泣いている。何を泣いているのかとたずねると、二人は留守の間にうっかりして大切な掛軸を破り、秘蔵の台天目茶碗も割ってしまった。そこで死んでおわびをしようと附子を食べたが、なぜか死ねないので泣いていた、と答える。

大声で泣く太郎冠者と次郎冠者

大蔵流狂言「附子」（主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

現行の狂言「附子」

〔解説〕

現行の狂言「附子」は、主人と太郎冠者、次郎冠者による小名狂言として演じられている。

では、この曲が誕生した中世には、どのような内容だったのだろうか。

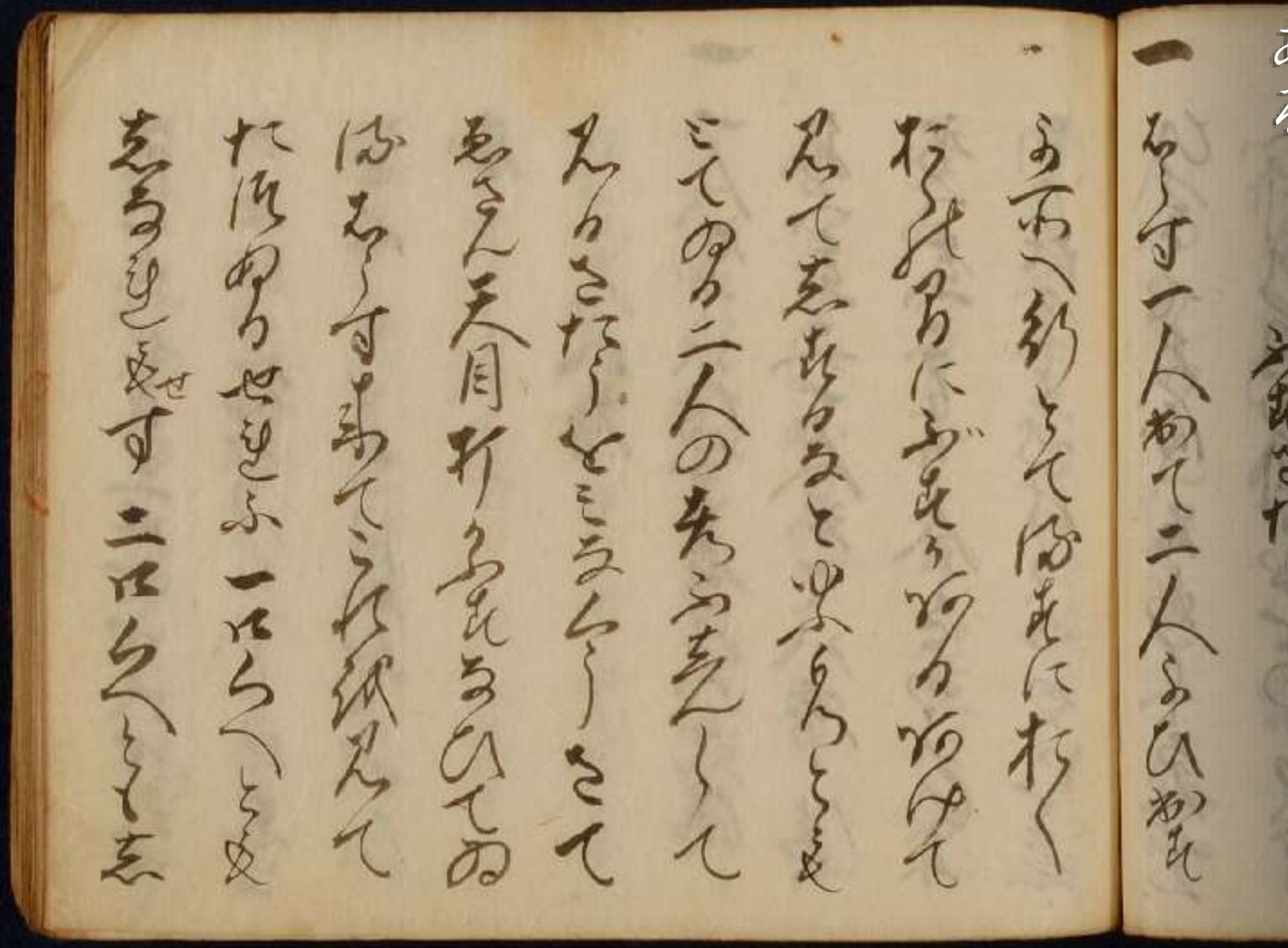
大蔵流狂言「附子」（茂山千五郎家）

現存最古の狂言台本『天正狂言本』

法政大学能楽研究所には、中世末期の一〇三曲の上演方法が記録された狂言の台本が所蔵されている。

巻末に天正六年(一五七八)の日付があるところから『天正狂言本』と呼ばれている。

現存する最古の狂言台本であり、中世の狂言台本としては唯一のものである。

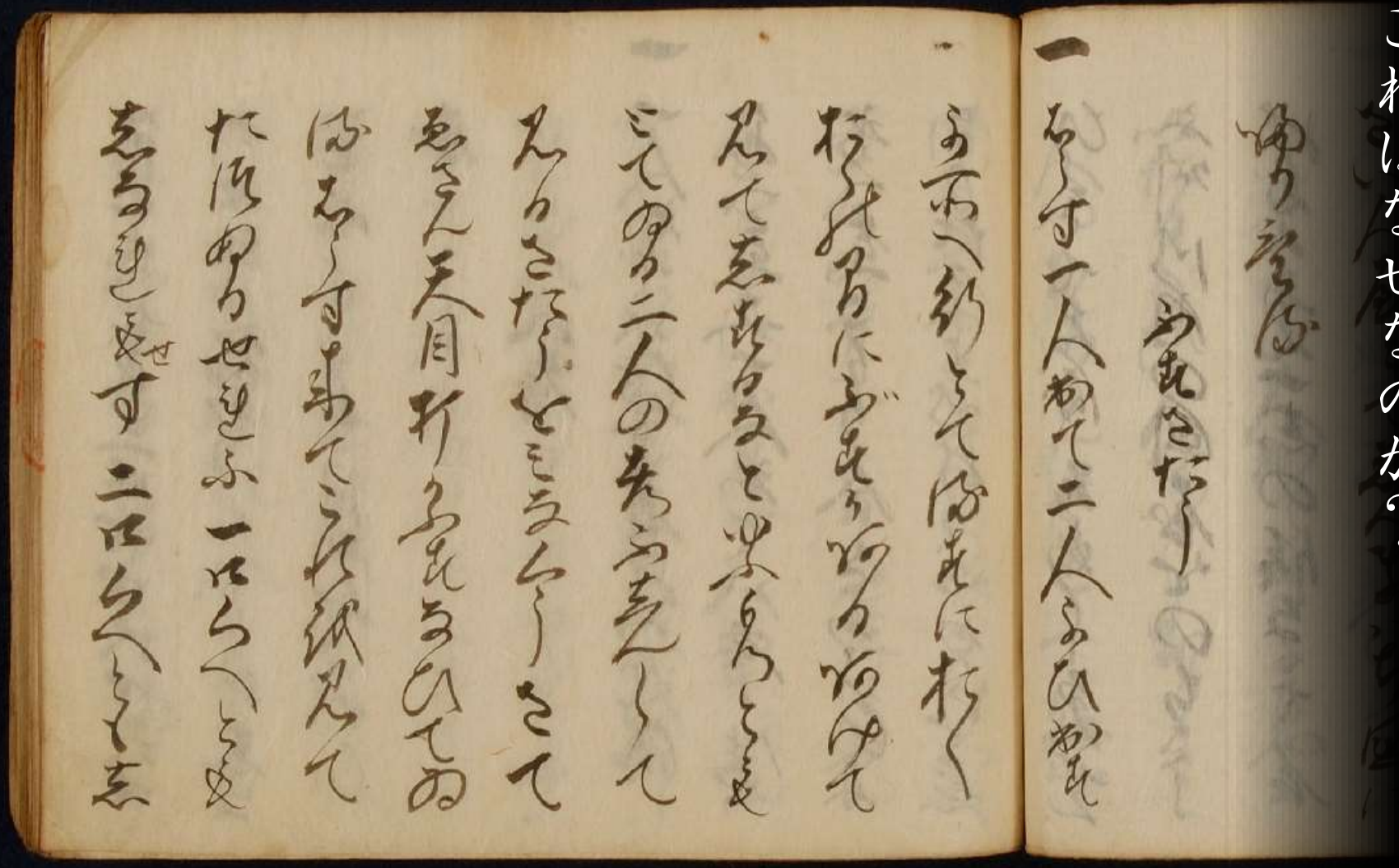


天正狂言本「附子砂糖」（野上記念法政大学能楽研究所蔵）

中世の狂言「附子」

天正狂言本には「ぶすさたう」の名で、中世の「附子」の台本が記録されている。ところが登場人物は近世以降のものとは異なり坊主と二人の人物（小僧？）による出家狂言になっている。

これはなぜなのか？



天正狂言本「ふすさたう」（法政大学能楽研究所蔵）

『法師物語絵巻』

〔解説〕

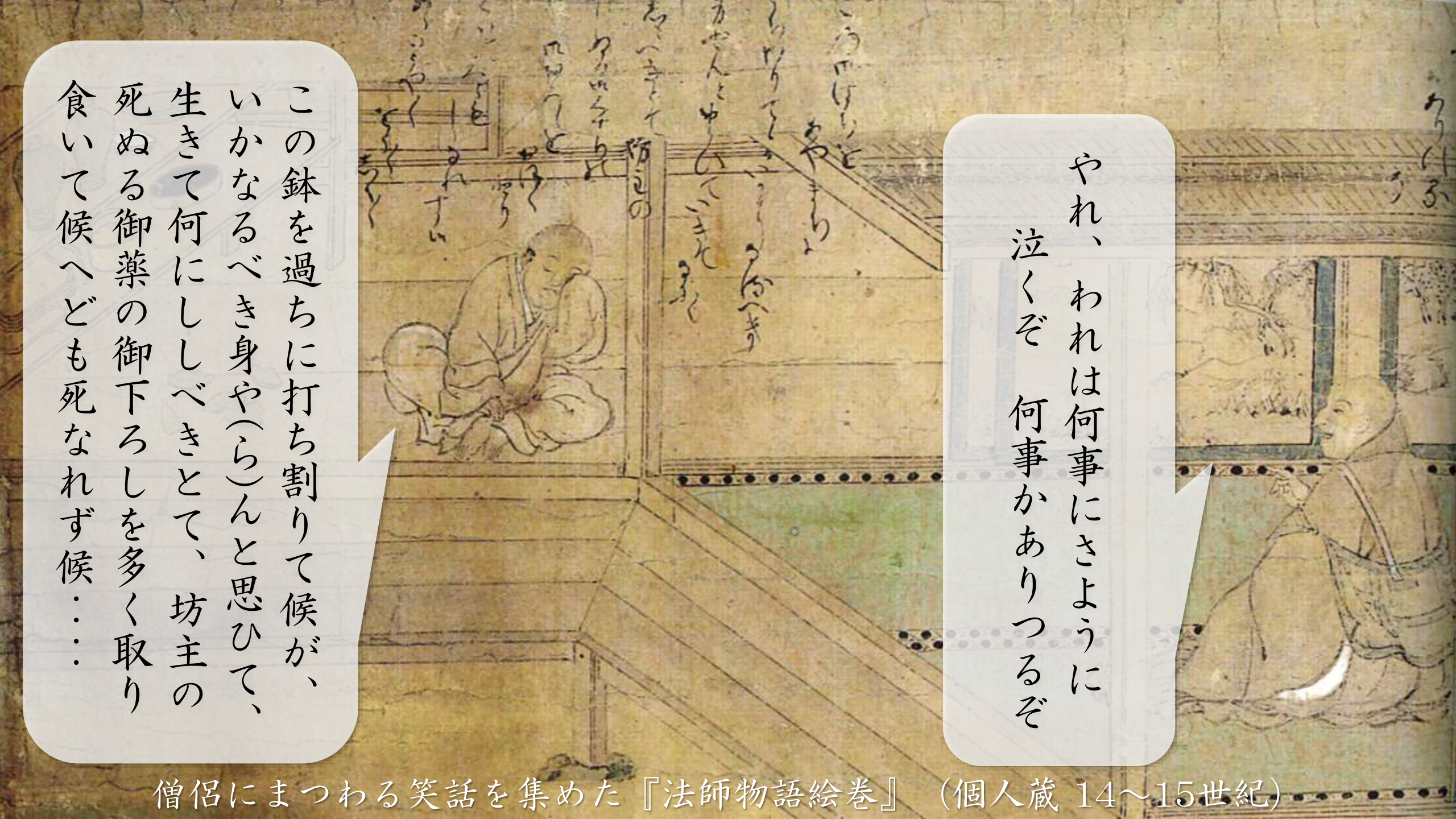
実はこのモチーフは、中世には僧の貪欲や妄語を風刺する笑話として広く知られていた。

近年公開された『法師物語絵巻』には、僧と小僧の対話を通じて、この笑話が生き生きと描かれている。

僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）

僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14〜15世紀）

僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）



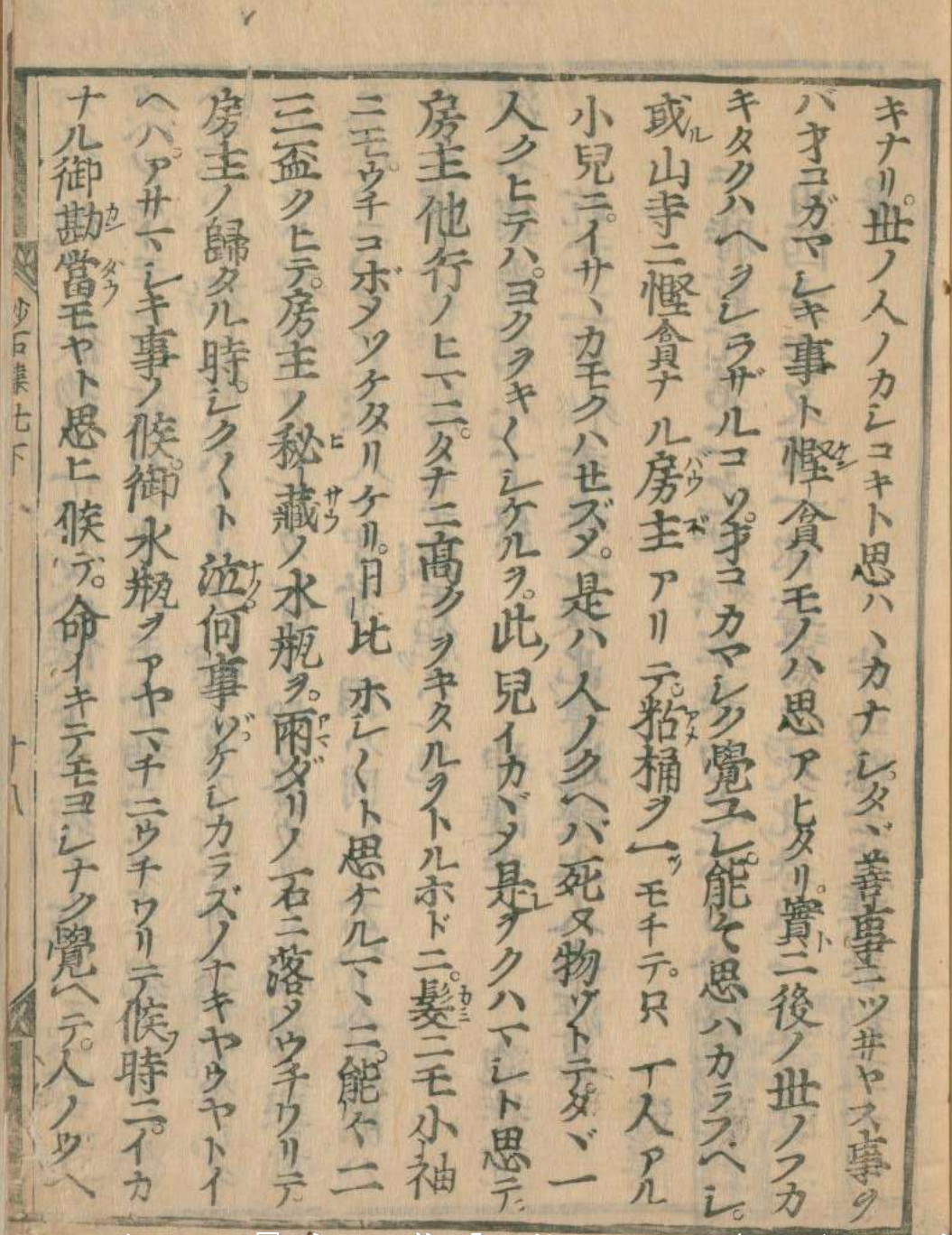
僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）

『沙石集』は「附子」のルーツか？

〔解説〕

このモチーフが日本で初めて登場するのは、鎌倉時代の僧・無住が著した『沙石集』である。

登場人物は、僧と稚児（寺院に仕える有髪の少年）だが、従来はこれが狂言「附子」の原話と考えられていた。



無住『沙石集』巻七下（国立国会図書館蔵）

新たな資料の発見

〔解説〕

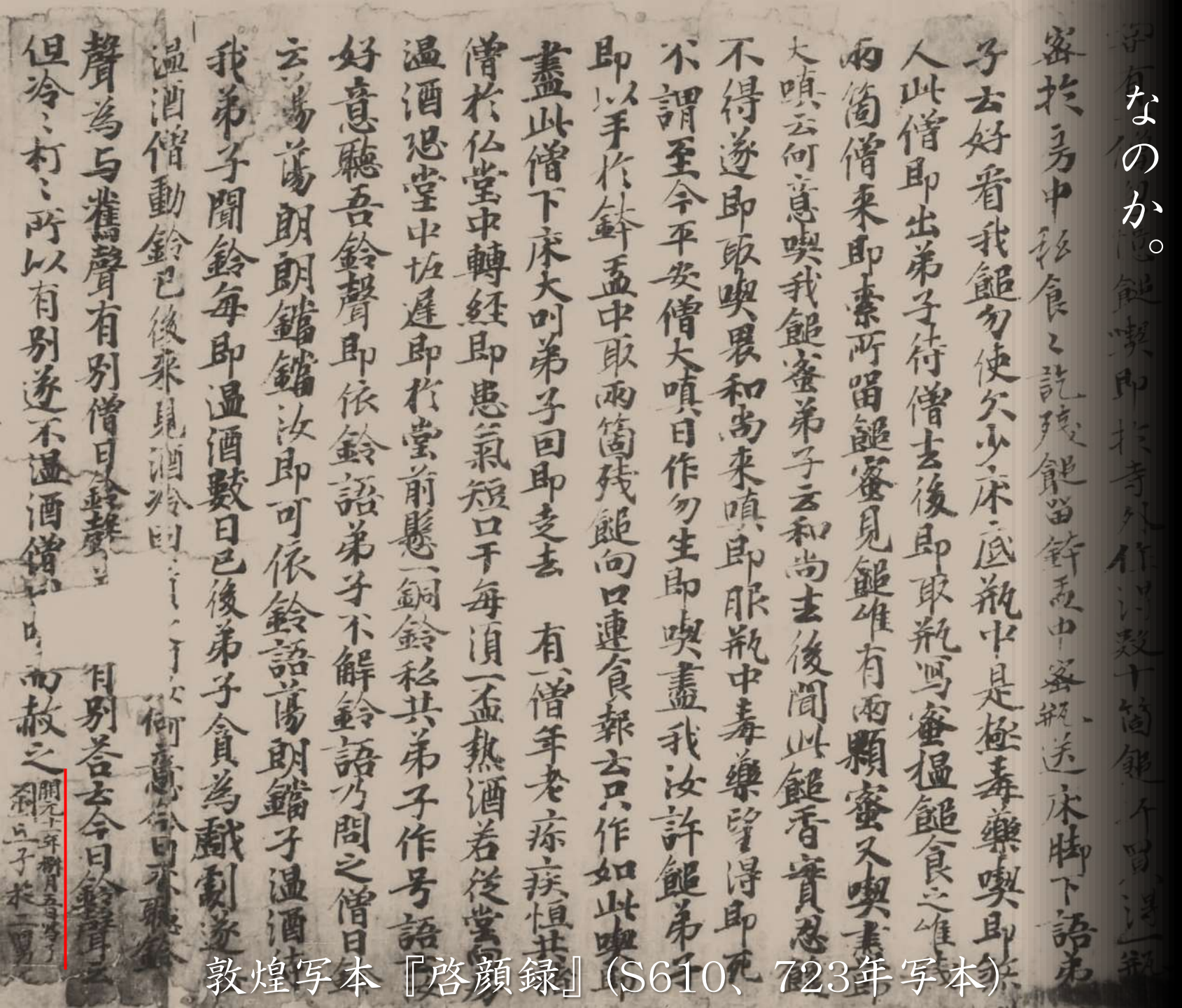
ところが敦煌文書の中から、これとよく似た話を載せた古文書が発見された。

敦煌莫高窟第17窟(画面右端)と発見された古文書群

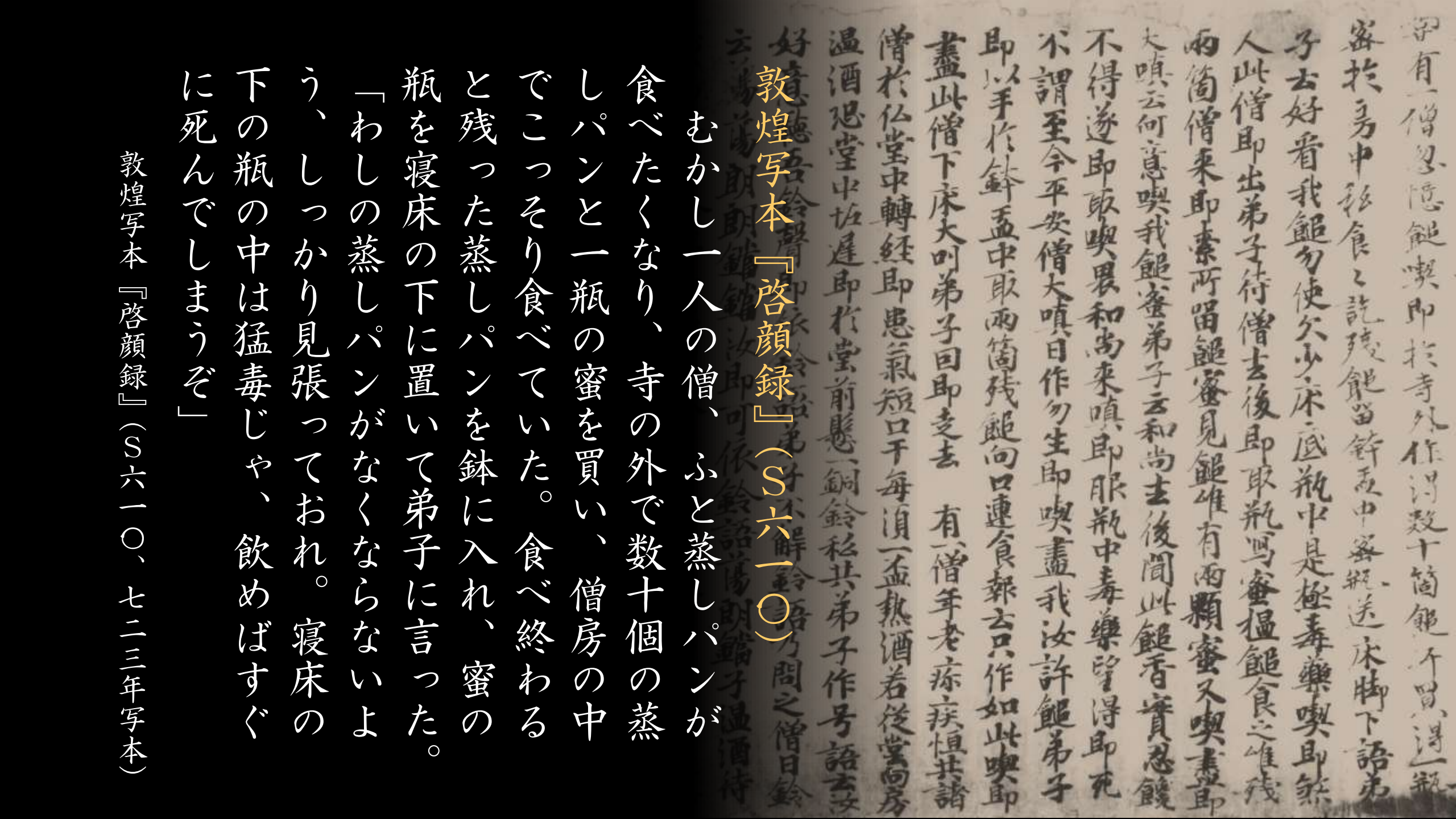
敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

古文書の名は『啓顔録』。巻末の奥書からは、唐の開元十一年、西暦七二三年に書き写されたものであることがわかっている。『沙石集』よりも五百年以上も前のことである。

では、その内容はどのようなものなのか。



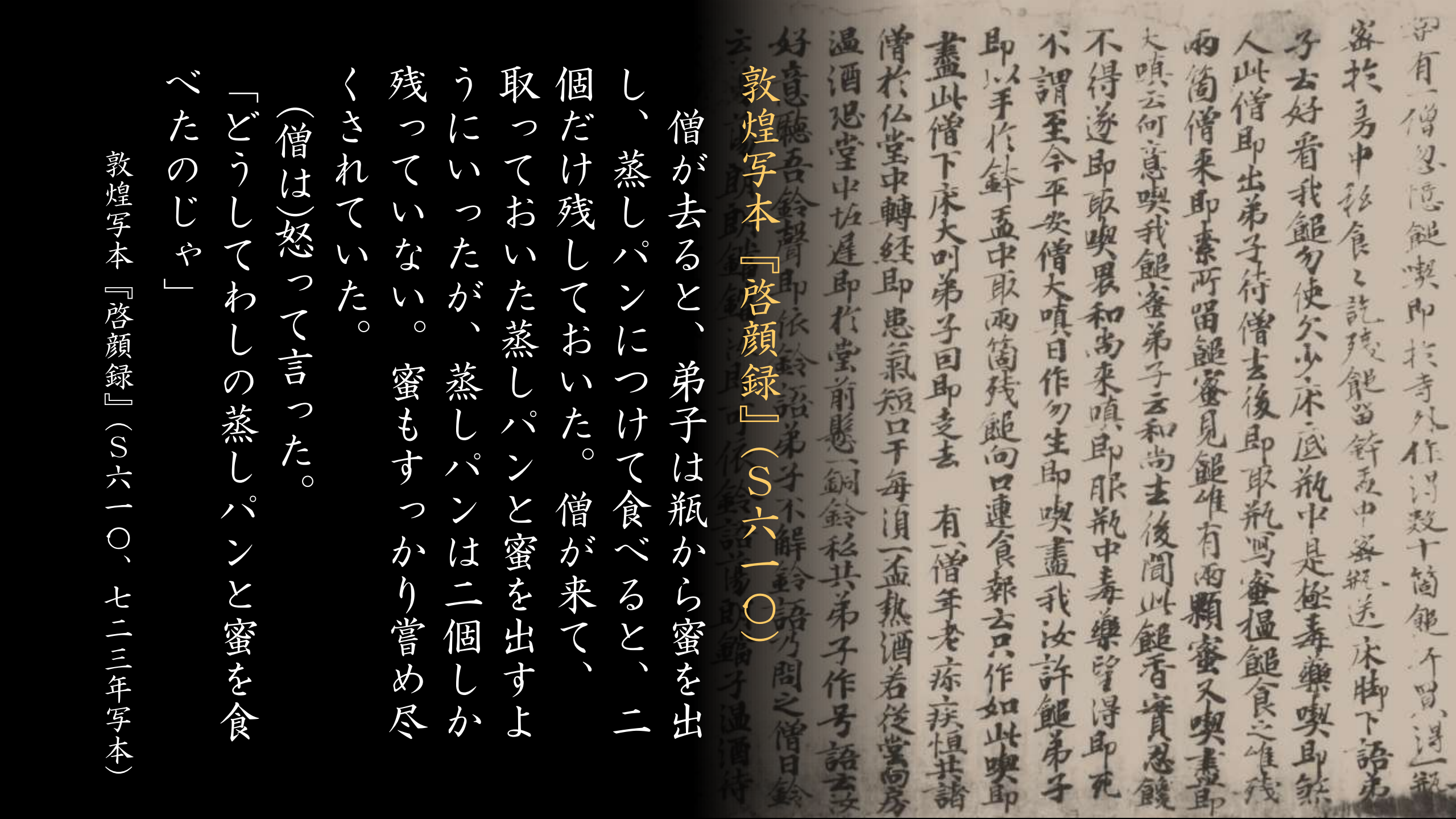
敦煌写本『啓顔録』(S610、723年写本)



敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

むかし一人の僧、ふと蒸しパンが食べたくなり、寺の外で数十個の蒸しパンと一瓶の蜜を買い、僧房の中でこっそり食べていた。食べ終わると残った蒸しパンを鉢に入れ、蜜の瓶を寝床の下に置いて弟子に言った。「わしの蒸しパンがなくならないよう、しっかり見張っておれ。寝床の下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐに死んでしまうぞ」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



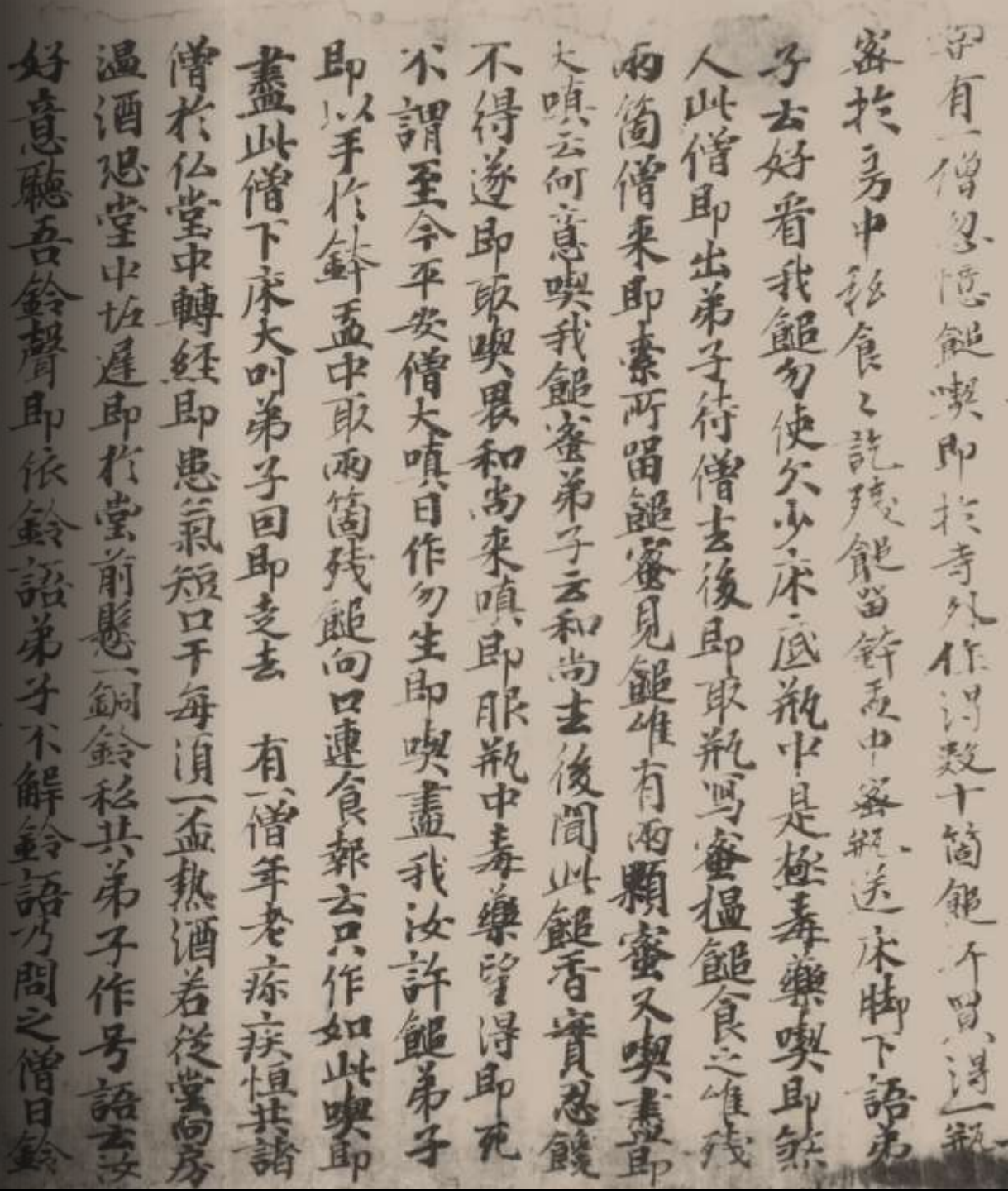
敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出し、蒸しパンにつけて食べると、二個だけ残しておいた。僧が来て、取っておいた蒸しパンと蜜を出すようにいったが、蒸しパンは二個しか残っていない。蜜もすっかり嘗め尽くされていた。

（僧は）怒って言った。

「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食べたのじゃ」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）

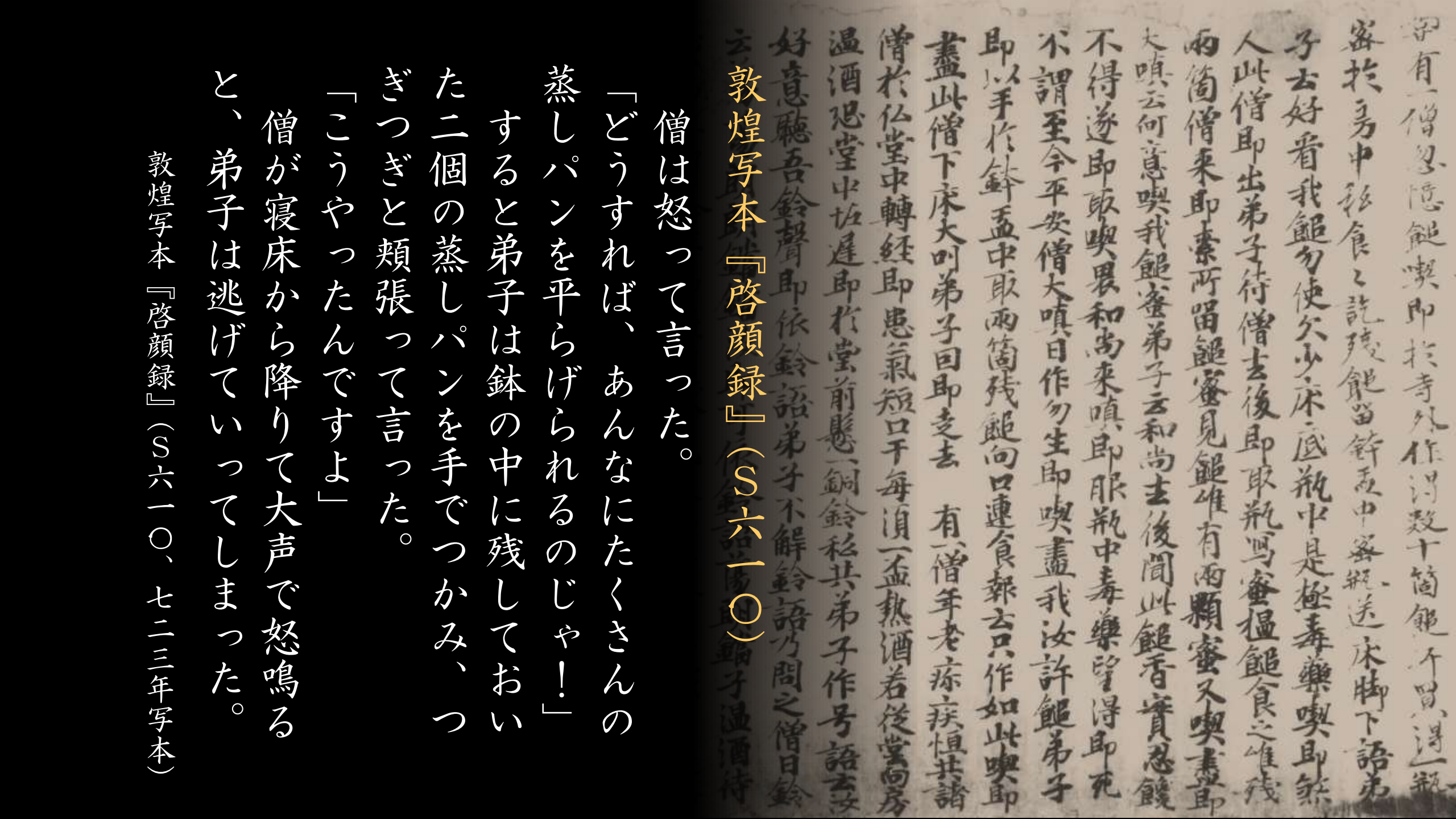


敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

弟子は言った。

「和尚様が去った後、蒸しパンの良い香りがしたので、がまんできずに取って食べてしまいました。しかし和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の中の毒薬を飲んで死のうと思ったのですが、不思議なことにいまだに何ともありません。」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

僧は怒って言った。

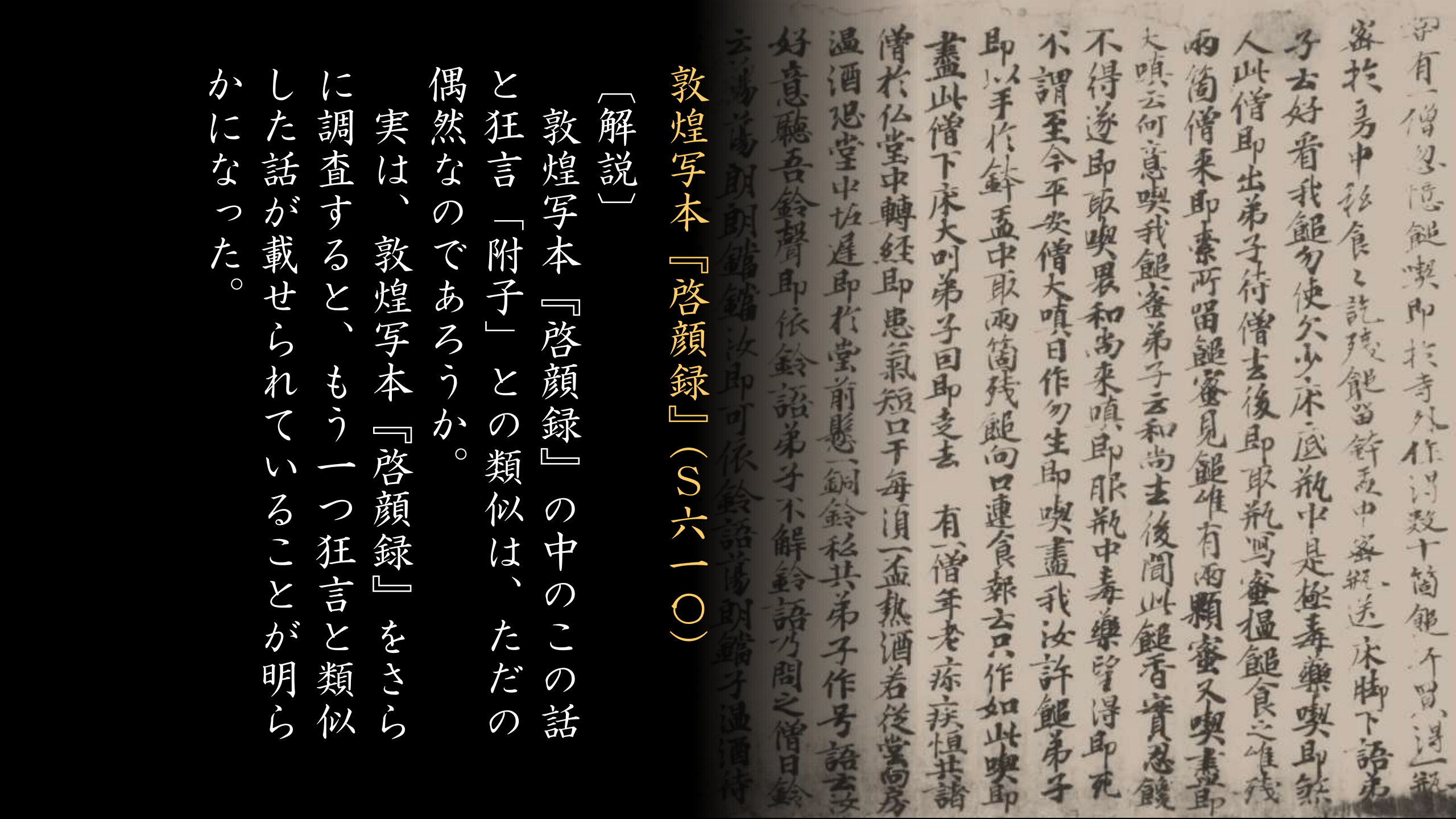
「どうすれば、あんなにたくさんの蒸しパンを平らげられるのじゃ！」

すると弟子は鉢の中に残しておいた二個の蒸しパンを手でつかみ、つぎつぎと頬張って言った。

「こうやったんですよ」

僧が寝床から降りて大声で怒鳴ると、弟子は逃げていってしまった。

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



敦煌写本『啓顔録』（S六一〇）

〔解説〕

敦煌写本『啓顔録』の中のこの話と狂言「附子」との類似は、ただの偶然なのであろうか。

実は、敦煌写本『啓顔録』をさらに調査すると、もう一つ狂言と類似した話が載せられていることが明らかになった。

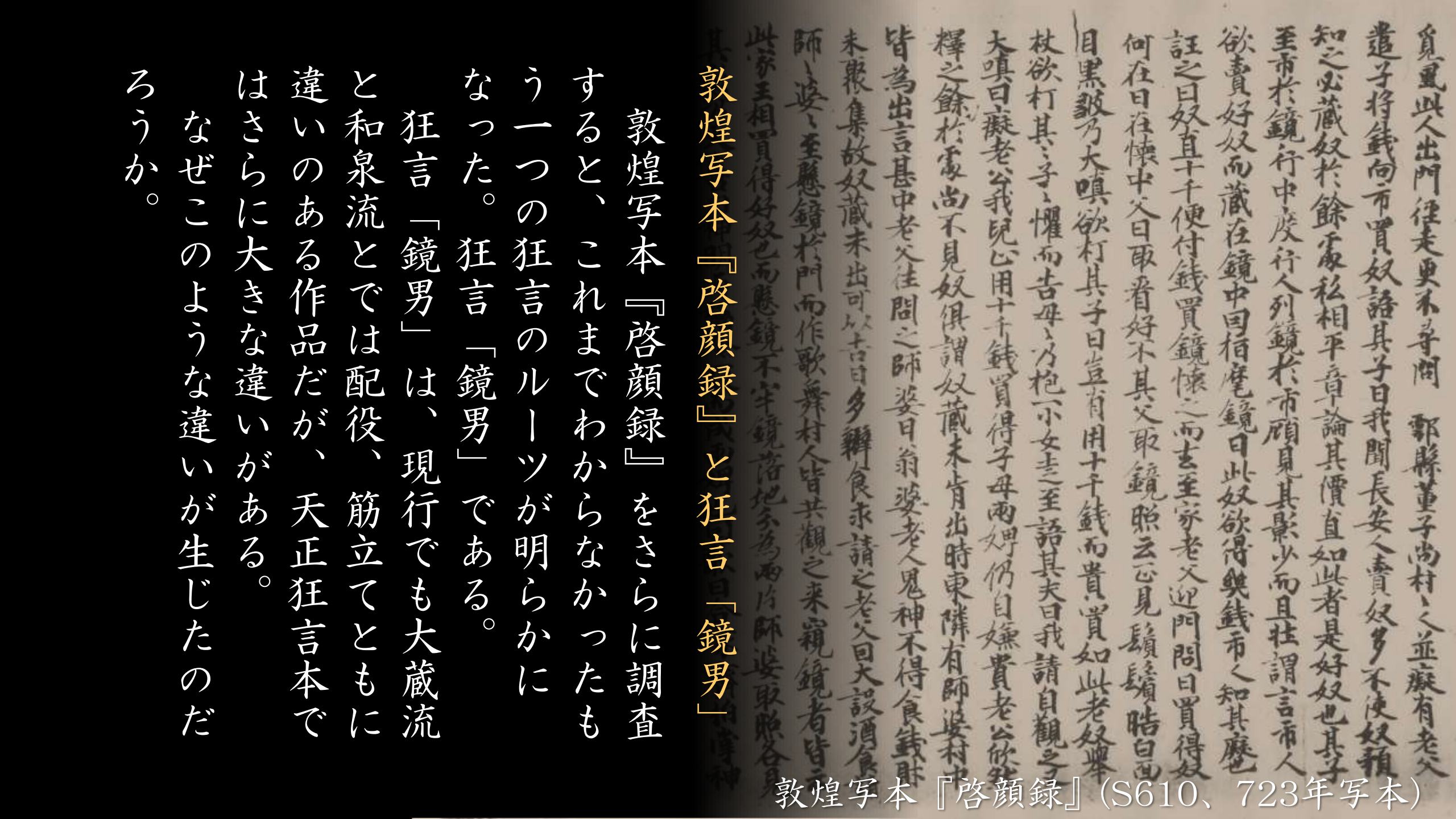
第三節　狂言「鏡男」と敦煌写本『啓顔録』

敦煌写本『啓顔録』と狂言「鏡男」

敦煌写本『啓顔録』をさらに調査すると、これまでわからなかったもう一つの狂言のルーツが明らかになった。狂言「鏡男」である。

狂言「鏡男」は、現行でも大蔵流と和泉流とでは配役、筋立てともに違いのある作品だが、天正狂言本ではさらに大きな違いがある。

なぜこのような違いが生じたのだろうか。



敦煌写本『啓顔録』（S610、723年写本）

現行の狂言「鏡男」

〔解説〕

まずは現行の狂言から見てみよう。写真は和泉流の「鏡男」。和泉流では、男が鏡売りから鏡を買うところから始まる。

大蔵流ではこの場面はなく、鏡売りも登場しない。

和泉流狂言「鏡男」（狂言共同社）

和泉流狂言「鏡男」（狂言共同社）

現行の狂言「鏡男」

〔あらすじ〕

男（シテ）

妻（アド）

鏡売（アド・和泉流のみ）

訴訟のため都を訪れていた松の山家の男、無事訴訟にも勝ち、妻への土産にと都の鏡売りから鏡を買って故郷に帰る。

和泉流狂言「鏡男」（狂言共同社）

現行の狂言「鏡男」

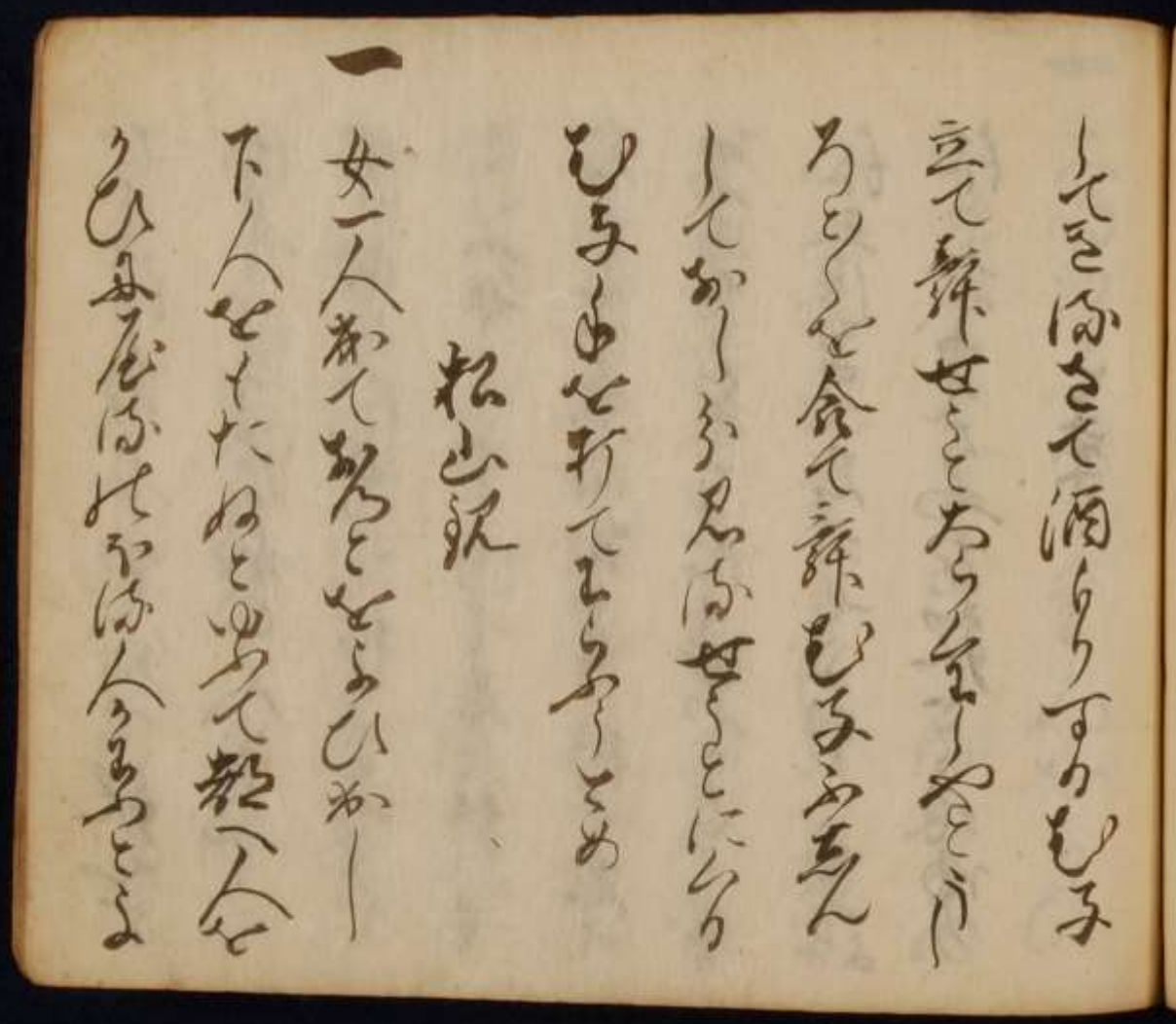
〔あらすじ〕

帰郷した男が妻に土産の鏡を渡すと、鏡を知らない妻は都から女を連れてきたといって怒り出す。困った男がそれなら他の人にやろうと取り上げると、妻は女をどこかへ連れていくつもりかといって、ますます怒り、男を追い込む。

現行の狂言と中世の狂言の違い

では、この曲が誕生した中世には、どのような内容だったのだろうか。

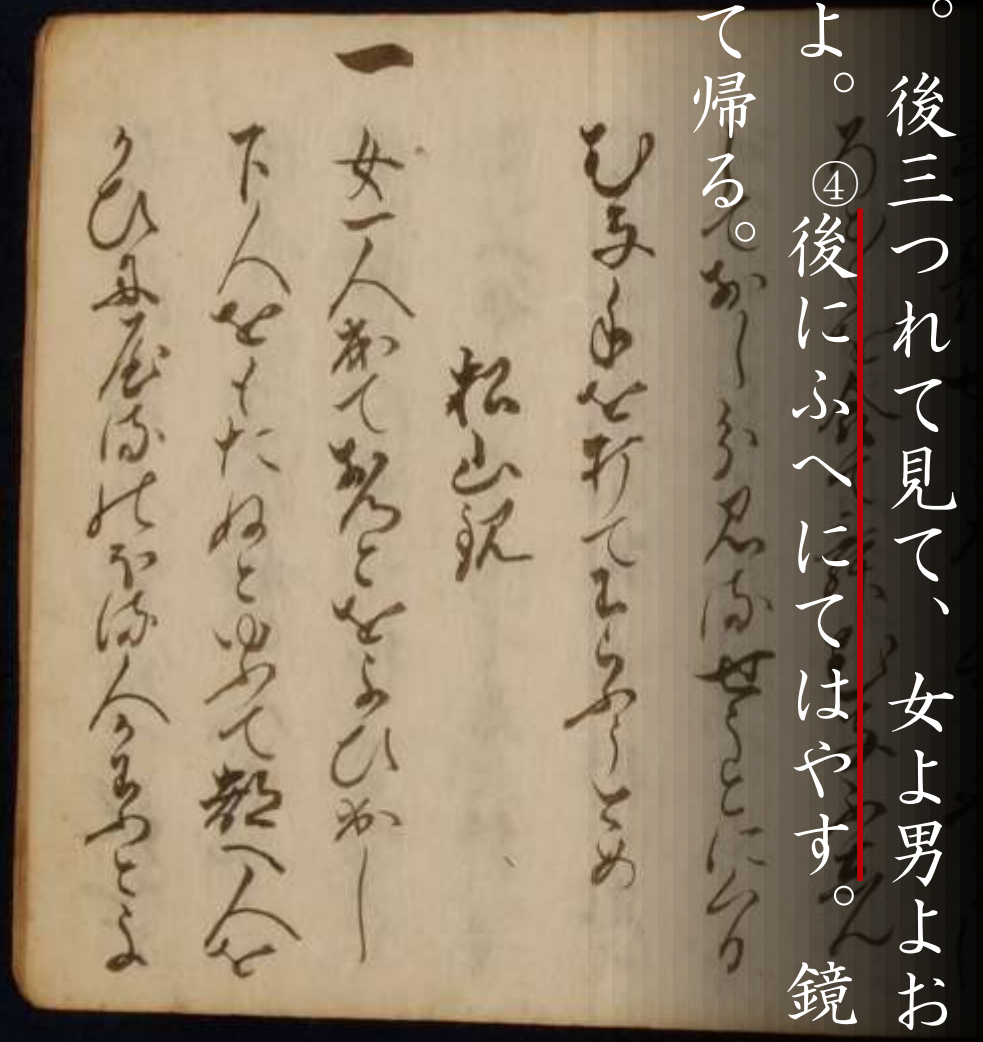
天正狂言本には「松山鏡」という中世の「鏡男」が記されているが、登場人物や筋立て、終曲の演出などがかなり異なっている。



中世の狂言「松山鏡」

男（シテ）
妻（アド）
①父（アド）
たらし（アド）

女一人出ておつとをよひ出し、②下人をもたぬとゆふて、都へ人をかひにやる。のほる。人かわふとよはわる。③たらし一人出て、鏡をうる。かうてくたる。都の人はきやく心とて、まつ門に立ておく。さてかくといふ。女よろこひて見に行。女見てはら立る。①おうち行て見て、おふちをかつてきたとゆふてはら立る。後三つれて見て、女よ男よおふちよ。④後にふへにてはやす。鏡とりて帰る。



天正狂言本「松山鏡」（法政大学能楽研究所蔵）

現行の狂言と中世の狂言の違い

〔解説〕

①登場人物

〔現行本〕男、妻、鏡売（和泉流）

〔天正本〕男、妻、父、鏡売

②男が都へ行った目的

〔現行本〕訴訟のため

〔天正本〕下人を買うため

③男が鏡を買った理由

〔現行本〕妻への土産

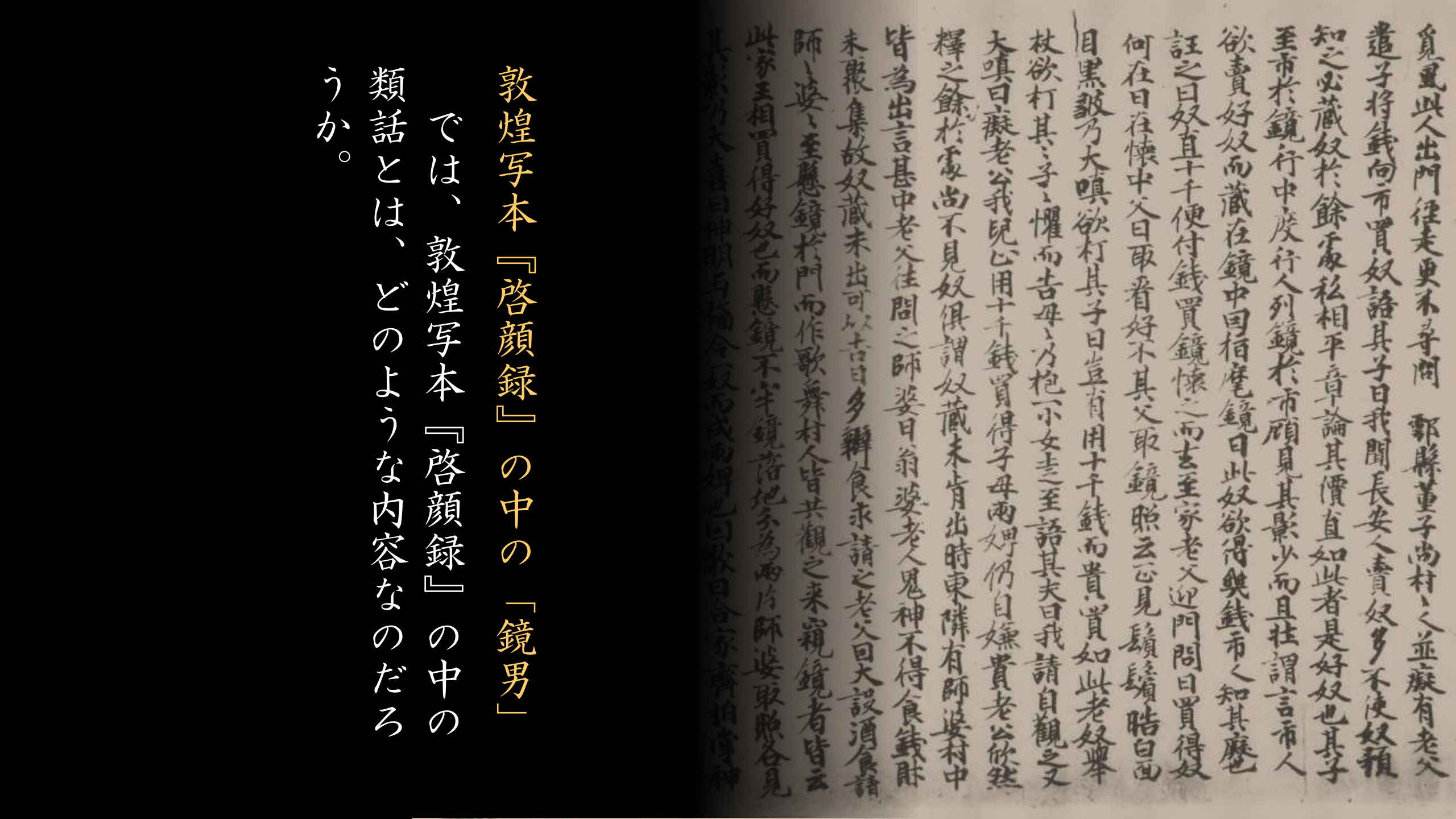
〔天正本〕鏡を知らずに騙されて

④終曲の演出

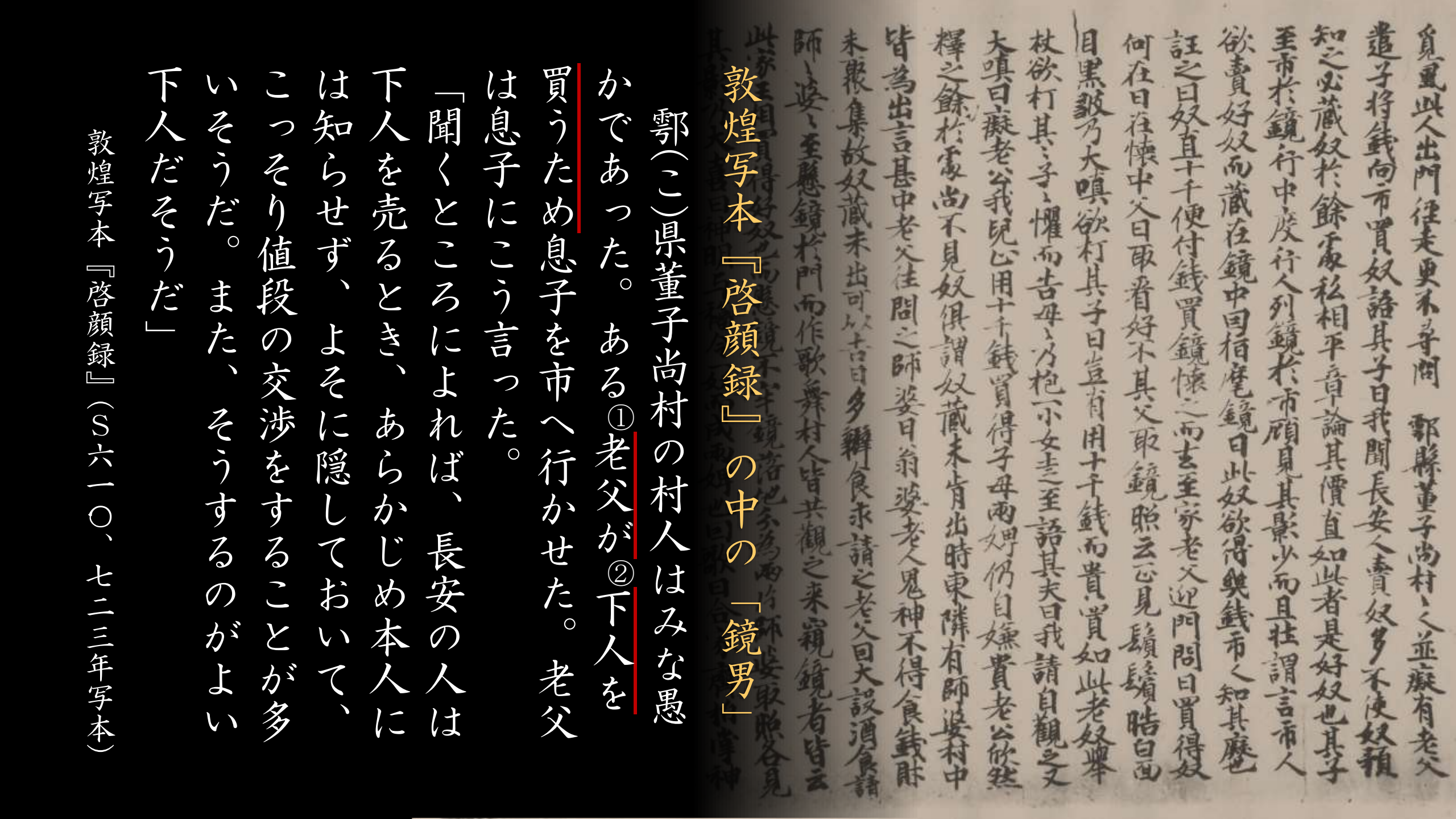
〔現行本〕怒った妻が男を追い込む

〔天正本〕笛の音でめでたく留める

（シャギリ留め）



敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」では、敦煌写本『啓顔録』の中の類話とは、どのような内容なのだろうか。

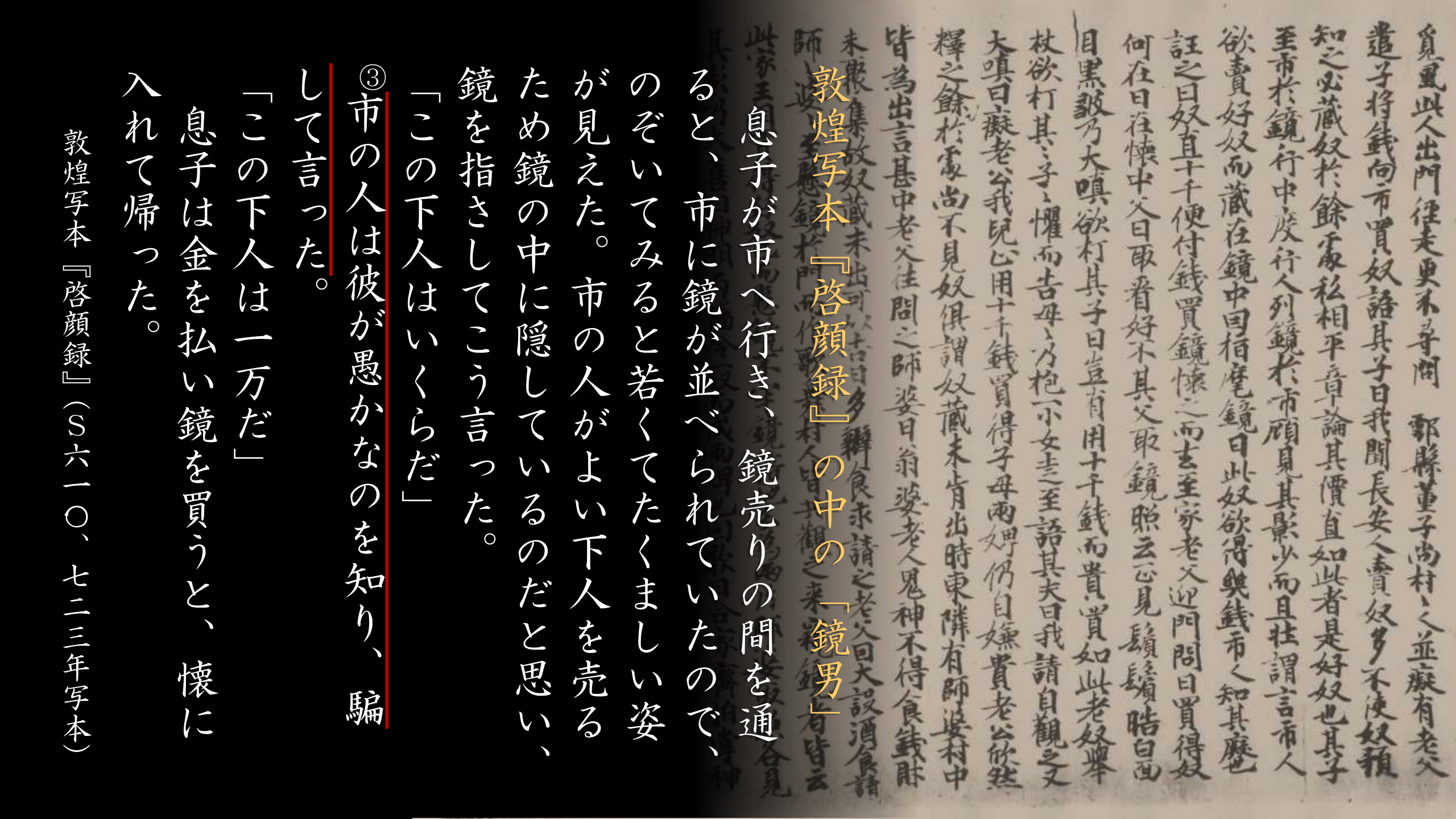


敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

鄠(こ)県董子尚村の村人はみな愚かであった。ある①老父が②下人を買うため息子を市へ行かせた。老父は息子にこう言った。

「聞くところによれば、長安の人は下人を売るとき、あらかじめ本人には知らせず、よそに隠しておいて、こっそり値段の交渉をすることが多いそうだ。また、そうするのがよい下人だそうだ」

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇、七二三年写本)



敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

息子が市へ行き、鏡売りの間を通ると、市に鏡が並べられていたので、のぞいてみると若くてたくましい姿が見えた。市の人がよい下人を売るため鏡の中に隠しているのだと思い、鏡を指さしてこう言った。

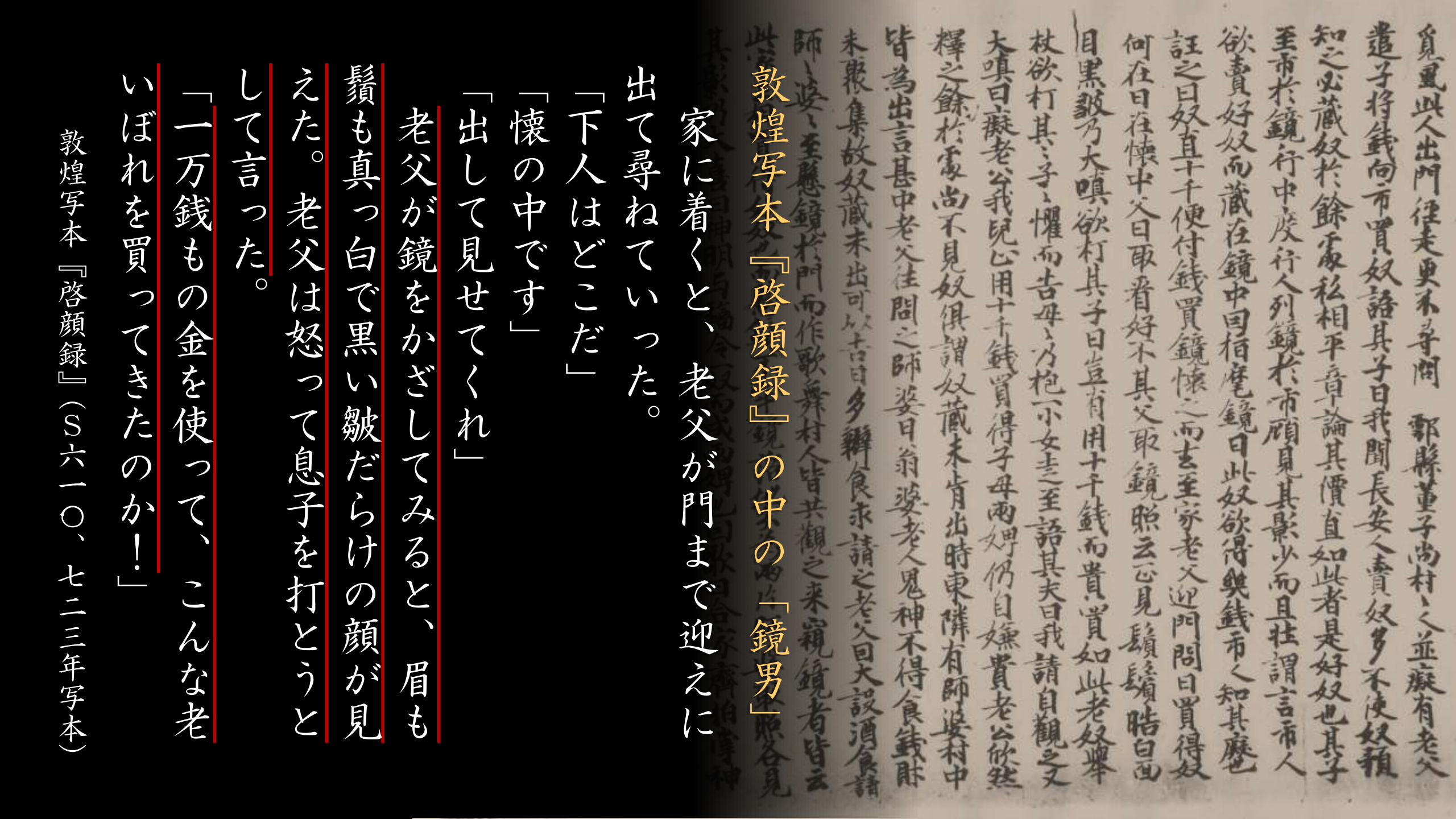
「この下人はいくらだ」

③市の人は彼が愚かなのを知り、騙して言った。

「この下人は一万だ」

息子は金を払い鏡を買うと、懐に入れて帰った。

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



家に着くと、老父が門まで迎えに出て尋ねていった。

「下人はどこだ」

「懐の中です」

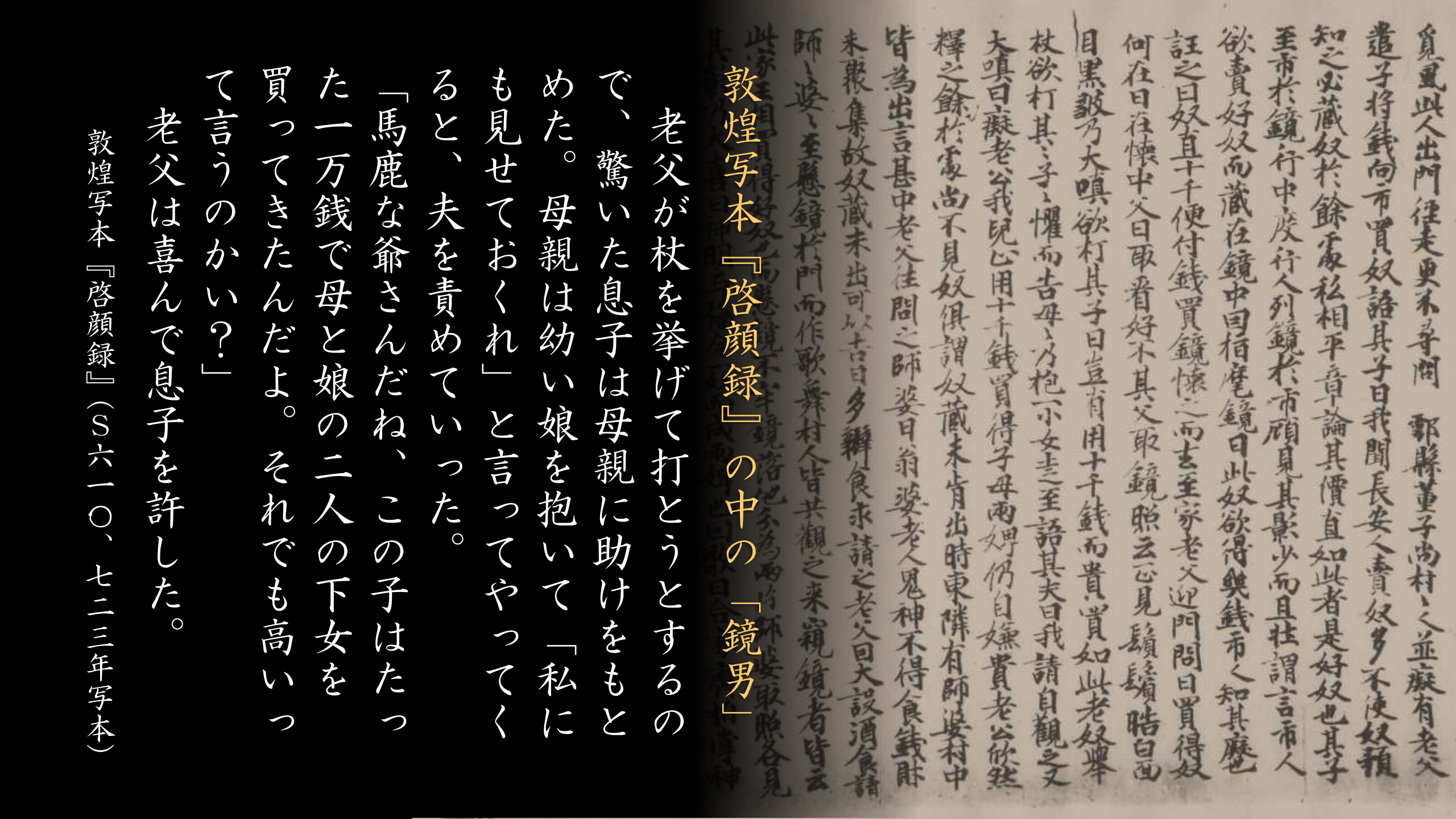
「出して見せてくれ」

老父が鏡をかざしてみると、眉も鬚も真っ白で黒い皺だらけの顔が見えた。老父は怒って息子を打とうとして言った。

「一万銭もの金を使って、こんな老いぼれを買ってきたのか！」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）

敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」



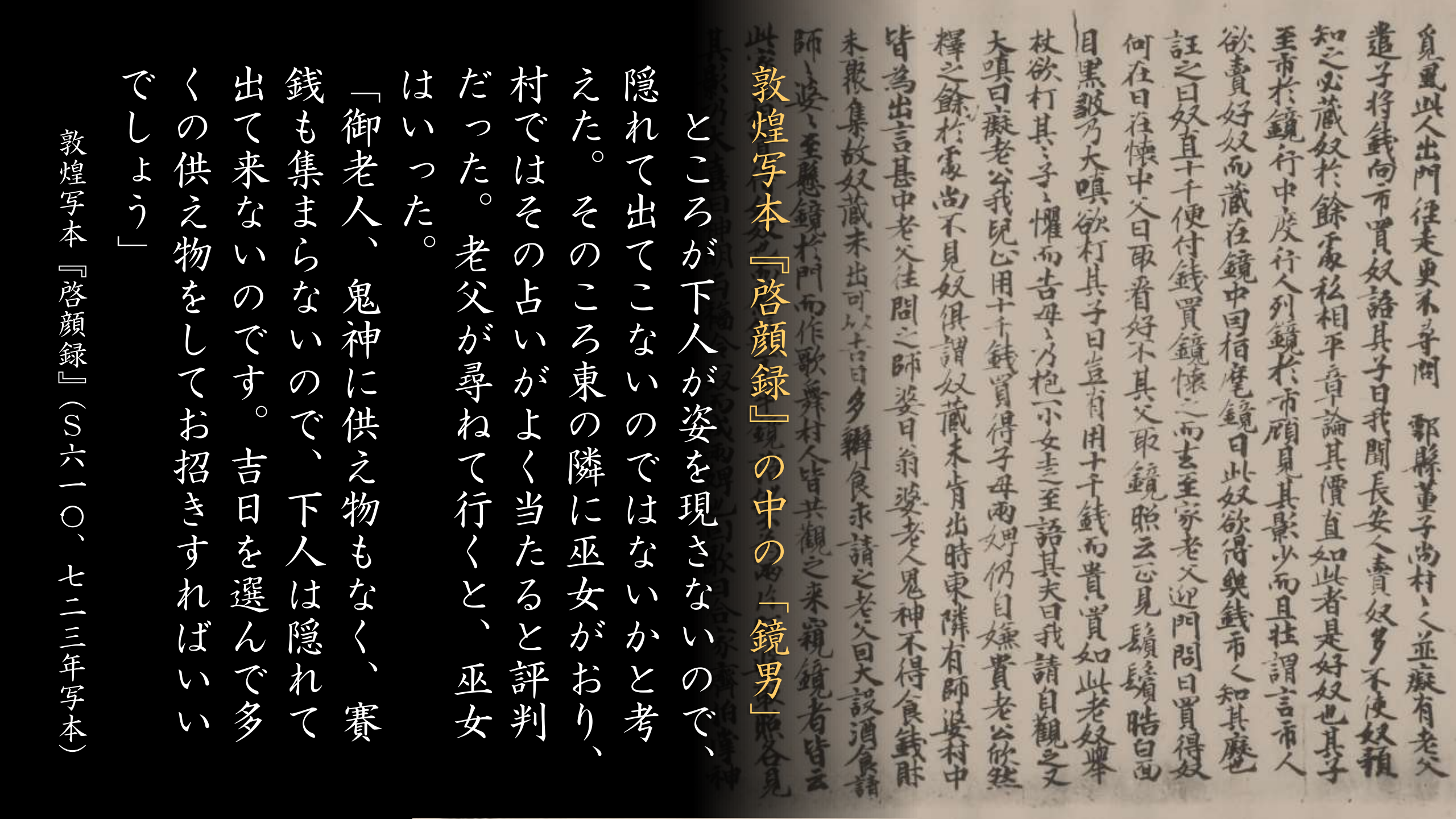
敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

老父が杖を挙げて打とうとするので、驚いた息子は母親に助けをもとめた。母親は幼い娘を抱いて「私にも見せておくれ」と言ってやってくると、夫を責めていった。

「馬鹿な爺さんだね、この子はたった一万銭で母と娘の二人の下女を買ってきたんだよ。それでも高いって言うのかい？」

老父は喜んで息子を許した。

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

ところが下人が姿を現さないので、隠れて出てこないのではないかと考えた。そのころ東の隣に巫女がおり、村ではその占いがよく当たると評判だった。老父が尋ねて行くと、巫女はいった。

「御老人、鬼神に供え物もなく、賽銭も集まらないので、下人は隠れて出て来ないのです。吉日を選んで多くの供え物をしてお招きすればいいでしょう」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）

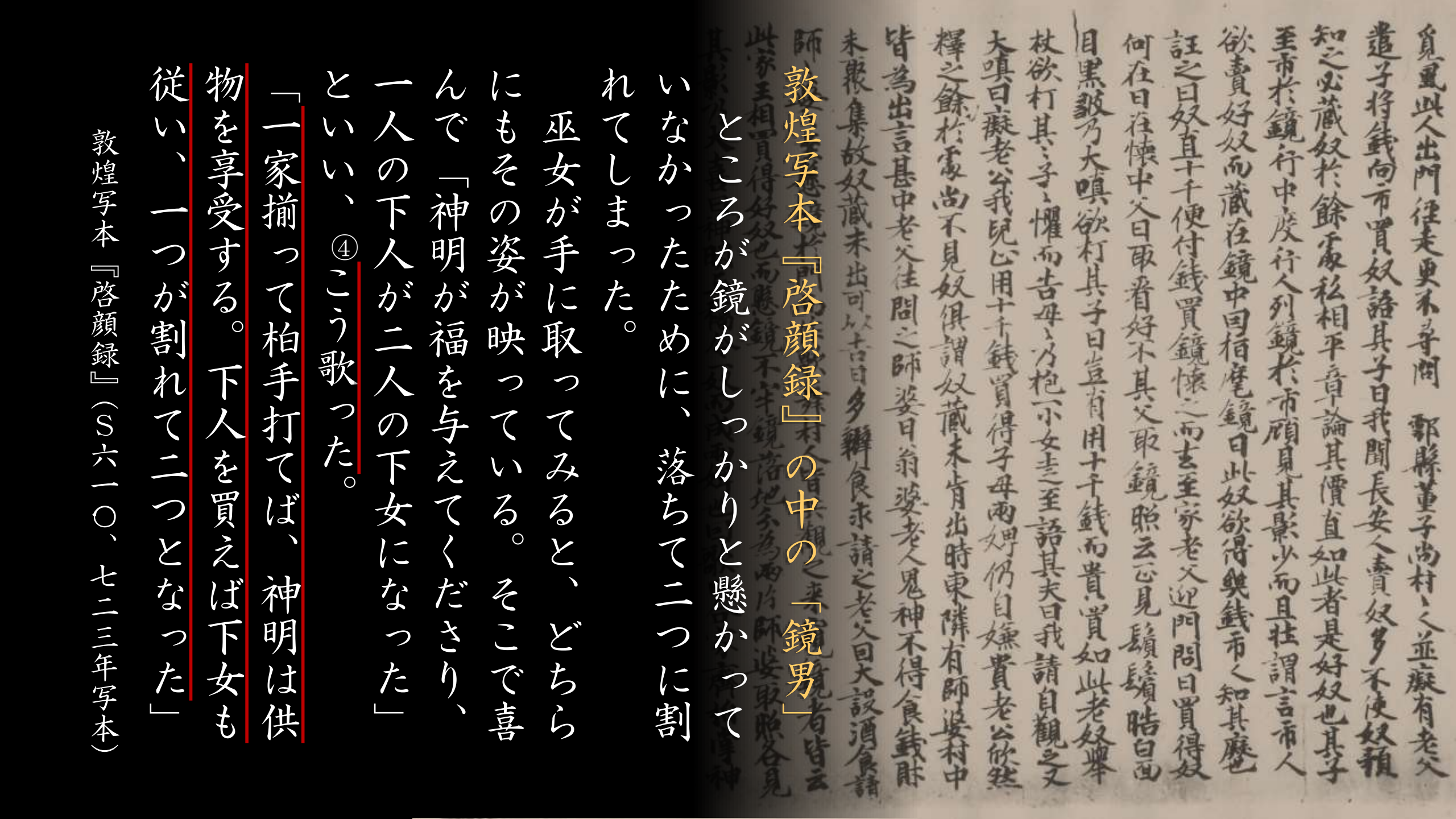
敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

そこで、老父は盛大に酒食の用意をして巫女を招いた。

巫女は来ると、鏡を門に懸け、歌舞を行った。村人たちはそろって見物していたが、鏡を覗いてはみなこういった。

「この家は運がいい。こんなによい下人を買うとは」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）



敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

ところが鏡がしっかりと懸かっていなかったために、落ちて二つに割れてしまった。

巫女が手に取ってみると、どちらにもその姿が映っている。そこで喜んで「神明が福を与えてくださり、一人の下人が二人の下女になった」といい、④こう歌った。

「一家揃って柏手打てば、神明は供物を享受する。下人を買えば下女も従い、一つが割れて二つとなった」

敦煌写本『啓顔録』（S六一〇、七二三年写本）

天正狂言本と『啓顔録』の類似点

〔解説〕

①登場人物

〔現行本〕男、妻、鏡売（和泉流）

〔天正本〕男、妻、父、鏡売

〔啓顔録〕男、父、鏡売、母、妹、村人たち、巫女

②男が都へ行った目的

〔現行本〕訴訟のため

〔天正本〕下人を買うため

〔啓顔録〕下人を買うため

③男が鏡を買った理由

〔現行本〕妻への土産

〔天正本〕鏡を知らずに騙されて

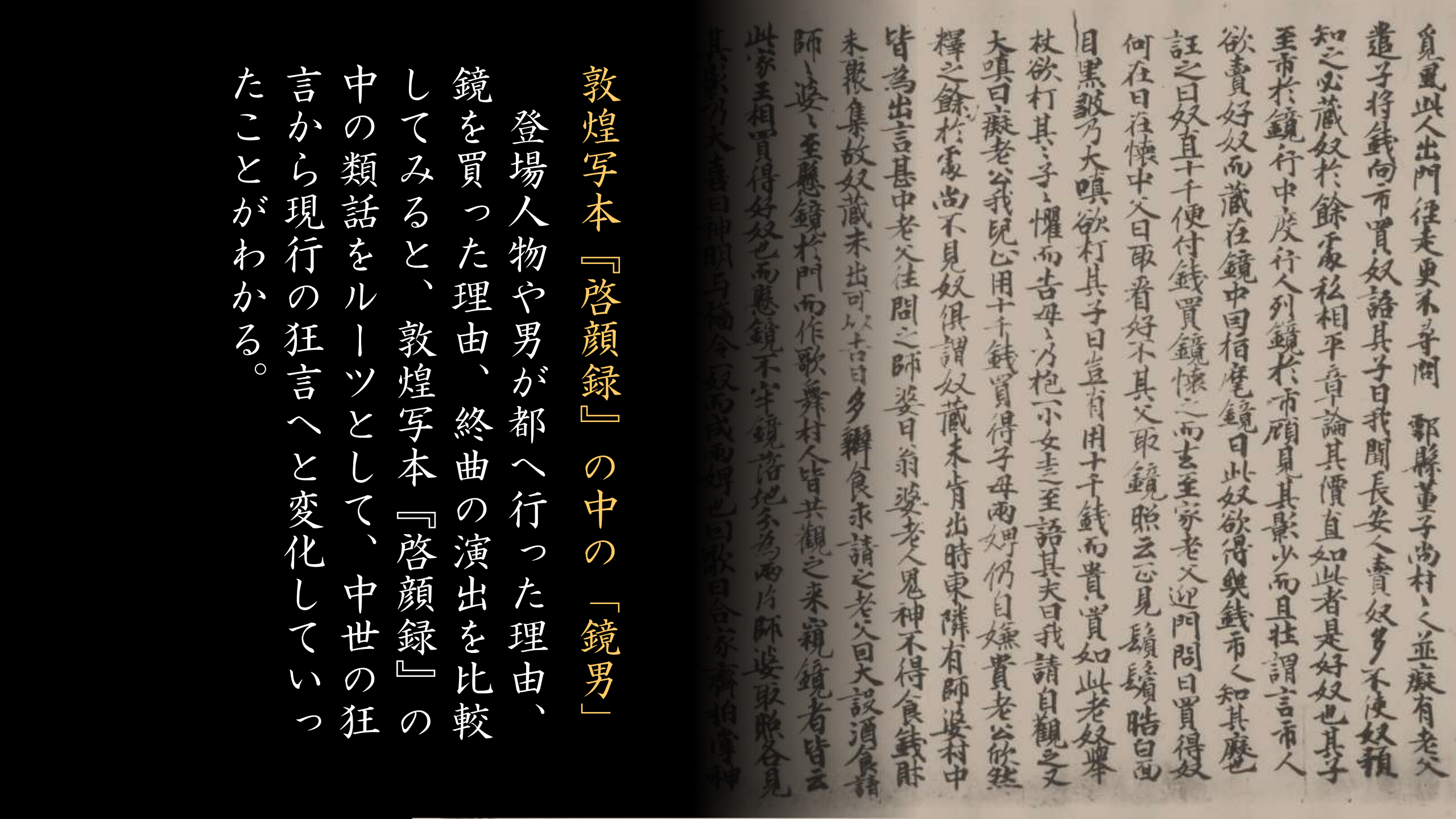
〔啓顔録〕鏡を知らずに騙されて

④終曲の演出

〔現行本〕怒った妻が男を追い込む

〔天正本〕笛の音でめでたく留める（シャギリ留め）

〔啓顔録〕謡でめでたく留める（謡留め）



敦煌写本『啓顔録』の中の「鏡男」

登場人物や男が都へ行った理由、鏡を買った理由、終曲の演出を比較してみると、敦煌写本『啓顔録』の中の類話をルーツとして、中世の狂言から現行の狂言へと変化していったことがわかる。

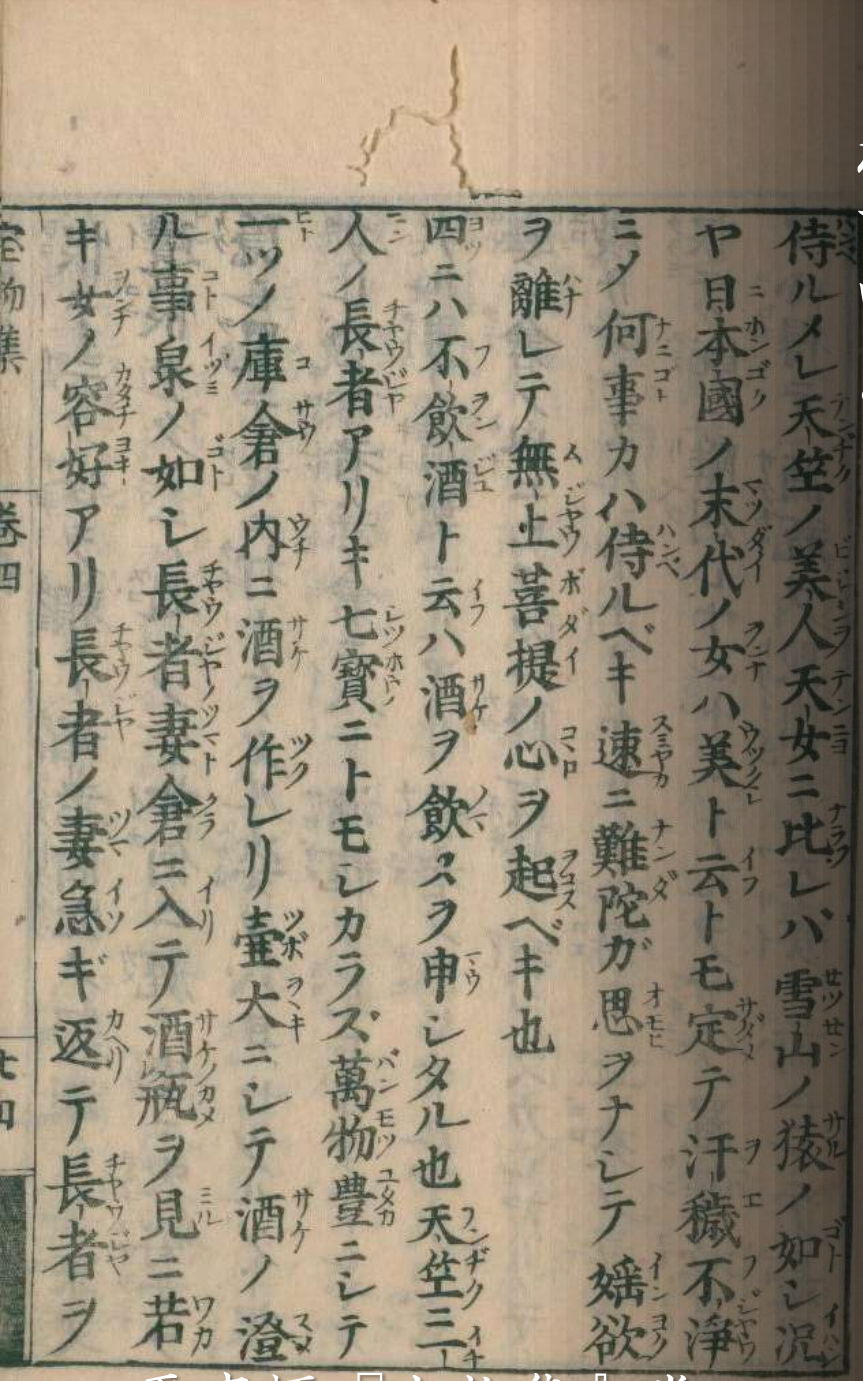
『雑譬喩経』と狂言「鏡男」

〔解説〕

これまで狂言「鏡男」のルーツは古代インドの仏教説話にあると考えられてきた。後漢のころ漢訳された『雑譬喩経』という経典にある次の説話である。

ある夫婦が葡萄酒の甕に映った自身の姿を見て、それぞれ相手が甕の中に愛人を匿っているといって喧嘩を始める。そこに一人の出家者が現れ、甕を叩き割って二人に悟りを開かせる。

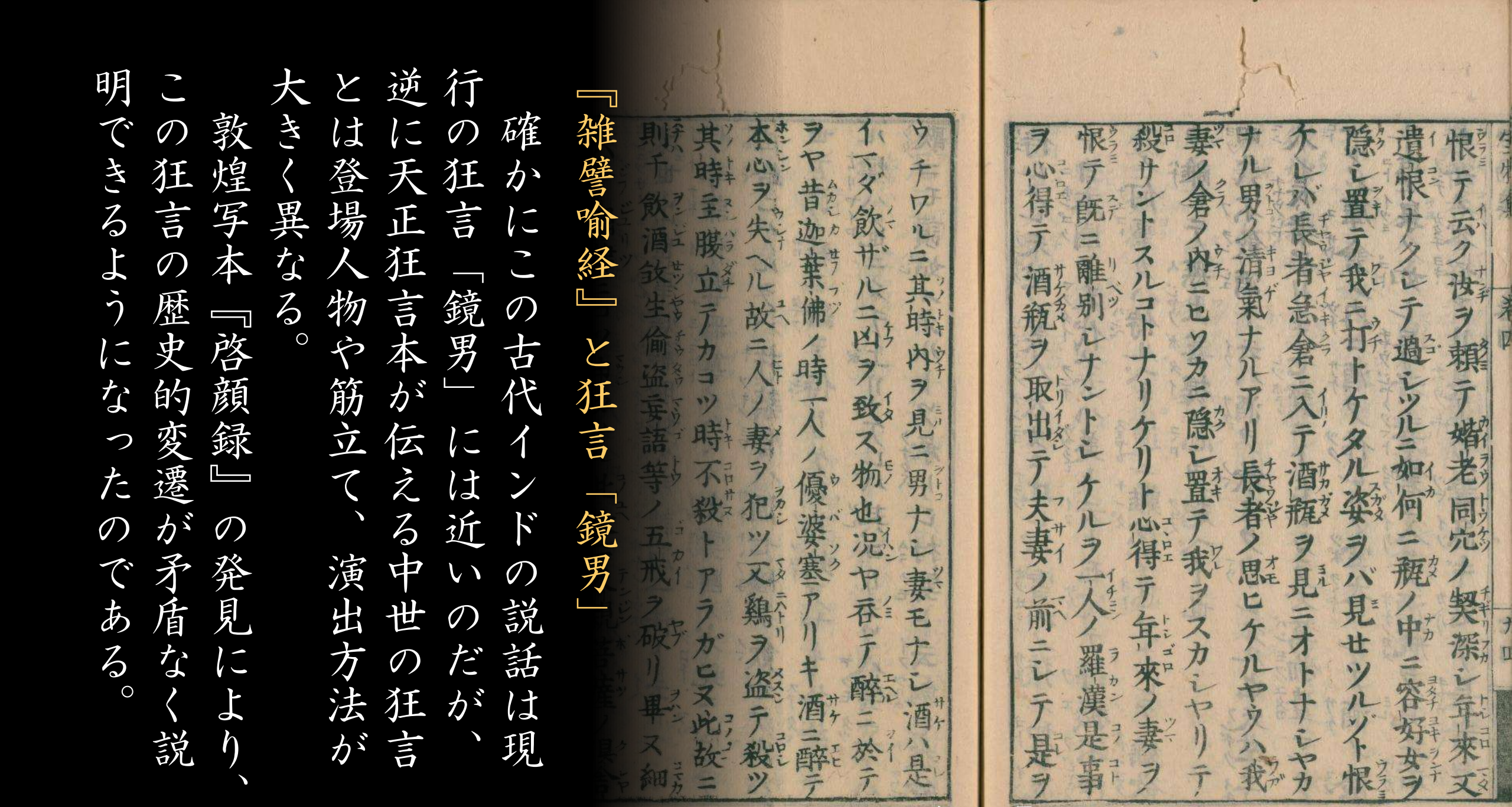
この説話は、日本でも平康頼の『宝物集』などに引かれ、広く知られていた。



侍ルメレ天竺ノ美人天女ニ比レハ雪山ノ猿ノ如シ況ヤ日本國ノ末代ノ女ハ美ト云トモ定テ汗穢不淨ニノ何事カハ侍ルベキ速ニ難陀ガ思ヲナシテ嬈欲ヲ離レテ無上菩提ノ心ヲ起ベキ也

四ニハ不飲酒ト云ハ酒ヲ飲メヲ申シタル也天竺ニ一人ノ長者アリキ七寶ニトモシカラズ萬物豊ニシテ一ツノ庫倉ノ内ニ酒ヲ作レリ壷大ニシテ酒ノ澄ル事泉ノ如シ長者妻倉ニ入テ酒瓶ヲ見ニ若キ女ノ容好アリ長者ノ妻急ギ返テ長者ヲ

平康頼『宝物集』巻四



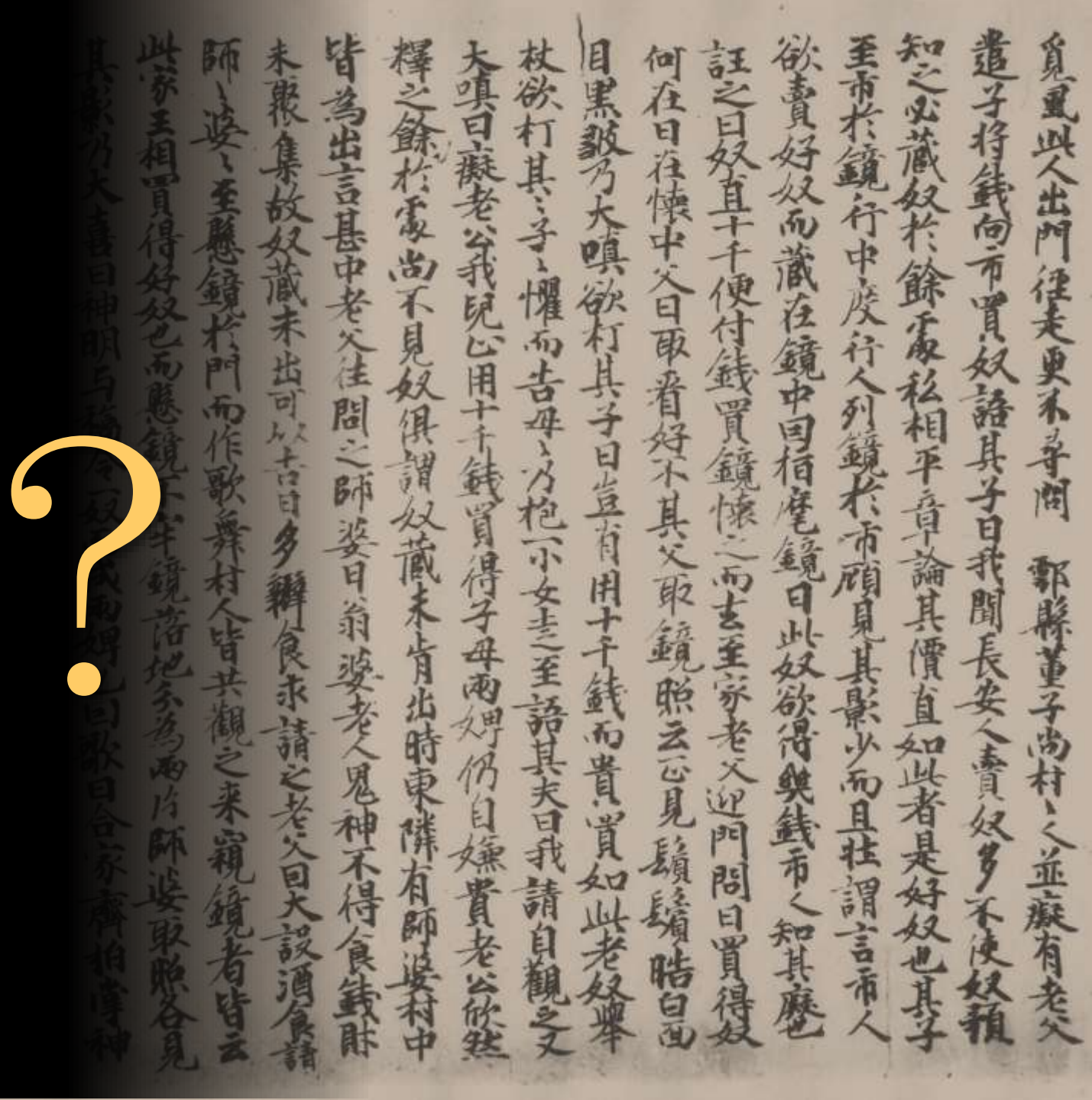
平康頼『宝物集』巻四

『雑譬喩経』と狂言「鏡男」

確かにこの古代インドの説話は現行の狂言「鏡男」には近いのだが、逆に天正狂言本が伝える中世の狂言とは登場人物や筋立て、演出方法が大きく異なる。

敦煌写本『啓顔録』の発見により、この狂言の歴史的変遷が矛盾なく説明できるようになったのである。

第四節　『啓顔録』の伝来

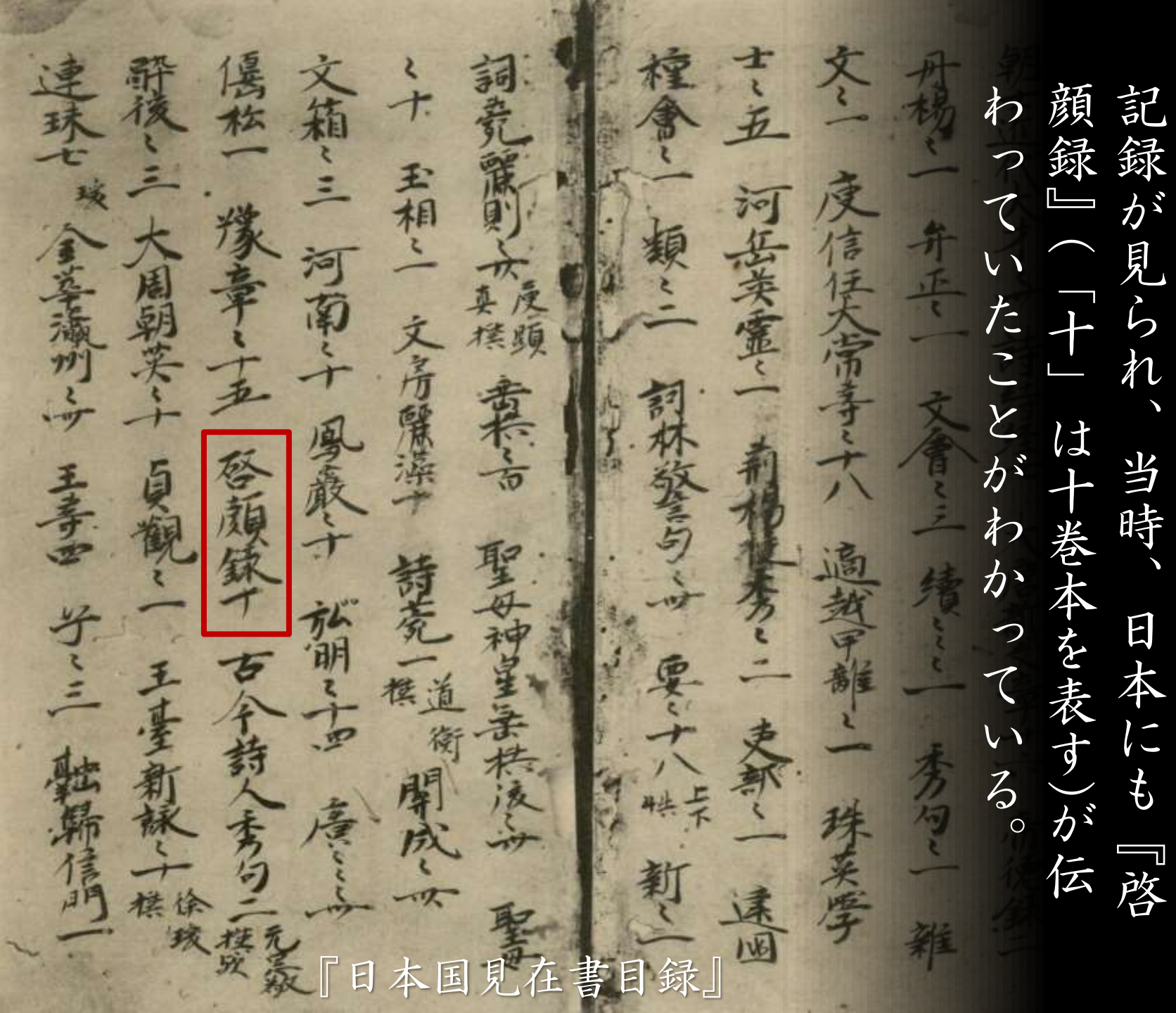


では、この『啓顔録』は日本にも
伝わっていたのだろうか。

『啓顔録』の伝来

九世紀末（平安時代前期）、藤原佐世は勅命を受け、当時日本に現存していた漢籍の総目録を編纂した。『日本国見在書目録』である。

この目録には「啓顔録十」という記録が見られ、当時、日本にも『啓顔録』（「十」は十巻本を表す）が伝わっていたことがわかっている。



『日本国見在書目録』

『啓顔録』の伝来

〔解説〕

『啓顔録』はその後、中国でも日本でも失われてしまった。このため、そこに「附子」や「鏡男」のルーツと思われる話が載っていたことは、シルクロードでこの古写本が発見されるまでわからなかったのである。

第五節　敦煌写本『啓顔録』の発見

敦煌文書の発見

一九〇〇年、ここで修業をしていた王円籙という道士が、ふとしたことからここに隠し部屋があることに気づき、部屋の入り口を開いた。

するとその中から四世紀末から十一世紀初めまでに書かれた数万点の古文書や絵画などが見つかった。

敦煌写本『啓顔録』もこの中から発見された。

王円籙(1850-1931)

敦煌写本『啓顔録』の発見の地

敦煌写本『啓顔録』が発見された敦煌莫高窟とはどのようなところなのか。

VIDEO

ＮＨＫスペシャル「敦煌」(後編)より

Sir Aurel Stein (1862-1943)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

王円籙がこの隠し部屋を発見してから七年後の一九〇七年五月、一人の英国人がこの地を訪れた。ハンガリー生まれの英国人探検家スタイン（Sir Mark Aurel Stein）である。

スタインは、王円籙と交渉し、大量の古文書や美術品を購入すると、これを英国に送った。

このときのようすを、スタインは報告書の中で次のように記している。

Sir Aurel Stein (1862-1943)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

「道士の持つ小さなカンテラのかすかな光に照らし出された光景に、私は思わず目を見張った。雑然とではあるが、束ねられた文書の山が床から三メートルの高さまで積み重ねられ、後で測ったところでは、その体積は十四立方メートル近くあった。四畳半ほどしかないこの小部屋では、二人の人間が立つ余地もないほどだった。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks 二〇三～四頁)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

「道士は、西欧の学問のために古代の仏教経典や美術品などの文物を救い出すことは、神意にかなっている。さもないと、これらの文物は地元民の無関心のために早晩散逸してしまうと覚悟したようだった。

こうして道士とは石窟寺院への寄進という形で補償金についての話し合いを進めることができた。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks 二〇九頁)

王円籙(1850-1931)

Sir Aurel Stein (1862-1943)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

「それからおよそ十六か月後、古文書をぎっしり詰めた二十四箱と、絵画、刺繍、その他同様の美術品を慎重に梱包した五箱が、無事、ロンドンの大英博物館に納められたとき、私もようやく安堵の胸をなで下ろすことができた。」

(Sir A. Stein: On Ancient Central-Asian Tracks 二〇九頁)

英国に送られた敦煌写本『啓顔録』

〔解説〕

敦煌写本『啓顔録』もこのとき英国に送られ、大英博物館に収められた。現在はロンドンにある大英図書館本館に所蔵されている。

第六節　敦煌文書はなぜ封蔵されたのか

敦煌文書が発見された莫高窟(1900年)
清朝

敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞

高僧の御影堂だった第十七窟

敦煌莫高窟第十七窟（蔵経洞）は、もともと洪べんという高僧の御影堂だったが、一九〇〇年に発見される前、入り口は塞がれ、壁には壁画が描かれていた。

蔵経洞内で調査するペリオ(1908年)

左の写真は蔵経洞(敦煌莫高窟第十七窟)の発見から八年後の一九〇八年に石窟内で撮影されたものである。

なぜこれらの古文書は封蔵されていたのだろうか？

ペリオの「西夏侵攻」説

一九〇八年に第十七窟(蔵経洞)を調査したフランスのペリオは、この石窟が封蔵された年代と理由について、次のように報告している。

①古文書に記された年号で最も新しいのは十世紀末である。

②古文書の中に西夏文字で書かれたものはない。

これらの理由から、この石窟は一〇三五年に西夏が敦煌に侵攻する前に、貴重な文書を守るために封蔵されたと推定される。

Paul Pelliot (1878-1945)

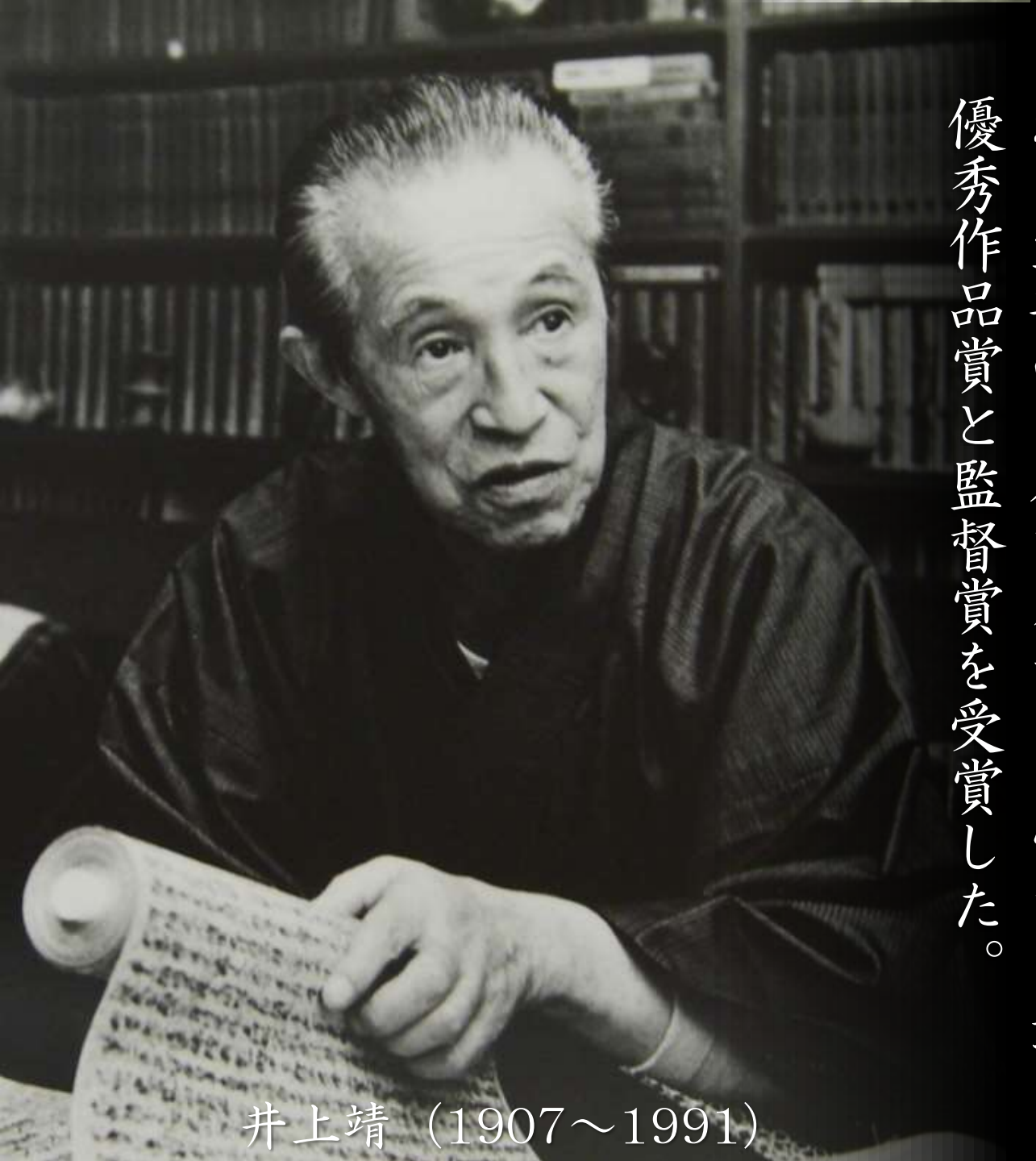
井上靖の小説『敦煌』

〔解説〕

ペリオが唱えた「西夏侵攻説」をヒントに、敦煌文書の謎を描いたのが、井上靖の小説『敦煌』である。

小説『敦煌』では、西夏との戦いの中、貴重な古文書を守るため、蔵経洞(敦煌莫高窟第十七窟)内に封蔵するようすが描かれている。

同小説は、一九八八年に映画化され、翌年の日本アカデミー賞では最優秀作品賞と監督賞を受賞した。



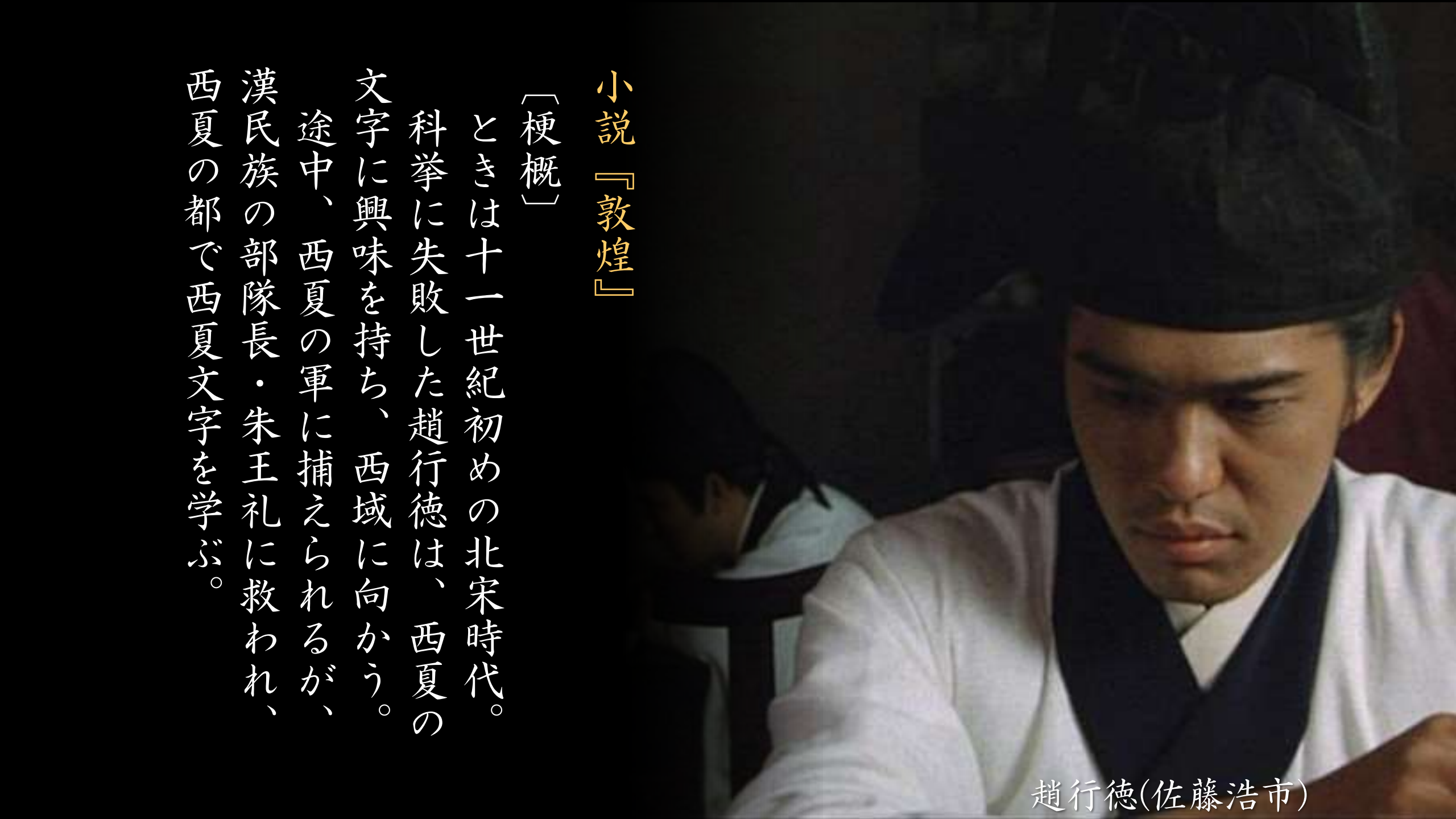
井上靖（1907～1991）

小説『敦煌』

〔梗概〕

ときは十一世紀初めの北宋時代。科挙に失敗した趙行徳は、西夏の文字に興味を持ち、西域に向かう。

途中、西夏の軍に捕えられるが、漢民族の部隊長・朱王礼に救われ、西夏の都で西夏文字を学ぶ。



趙行徳(佐藤浩市)

小説『敦煌』

〔梗概〕

数年後、西夏軍の漢民族部隊の指揮官となっていた朱王礼は、愛する女性を奪われた恨みから、西夏の皇帝・李元昊の暗殺を企てる。

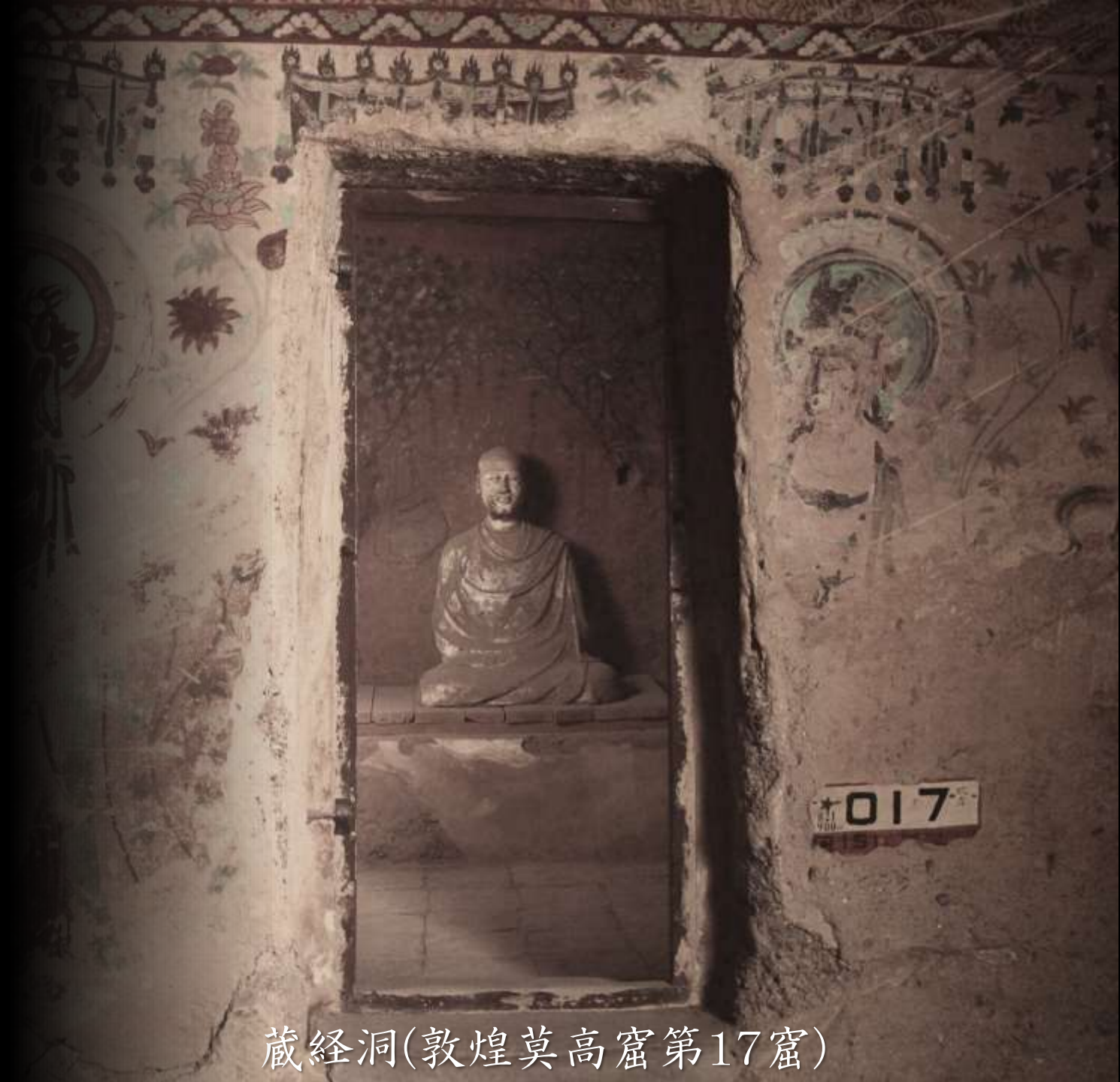
しかし、暗殺は失敗し、朱王礼が居城とした敦煌は、西夏軍の猛攻を浴びる。

朱王礼(西田敏行)

小説『敦煌』

〔梗概〕

西夏の都から朱王礼のもとに戻った趙行徳は、西夏軍の侵攻から仏教経典などの貴重な文物を守るため、敦煌郊外の石窟に古文書を運び、封蔵する。



蔵経洞(敦煌莫高窟第17窟)

VIDEO

映画「敦煌」（佐藤純弥監督、1988年）

ペリオの「西夏侵攻」説の問題点

〔解説〕

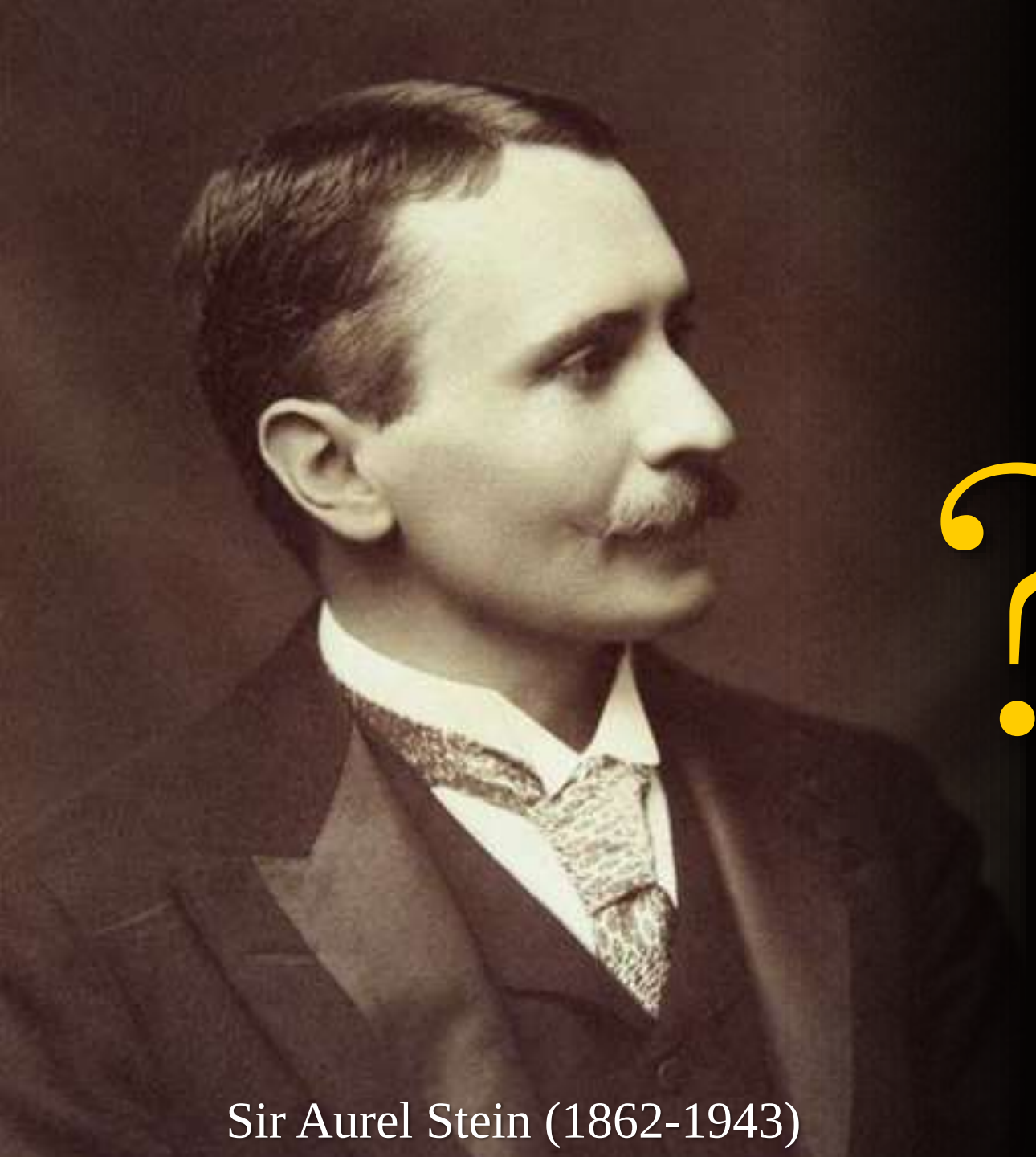
ペリオが唱えた「西夏侵攻」説にはいくつかの問題点があった。

① 西夏は仏教国であり、敦煌文書の大部分も仏教経典であった。なぜその西夏から仏教経典を守る必要があったのか

② 突然の侵攻であったのに、なぜ入口を塞ぎ、一面に壁画を描く時間があったのか

Paul Pelliot (1878-1945)

敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞



Sir Aurel Stein (1862-1943)

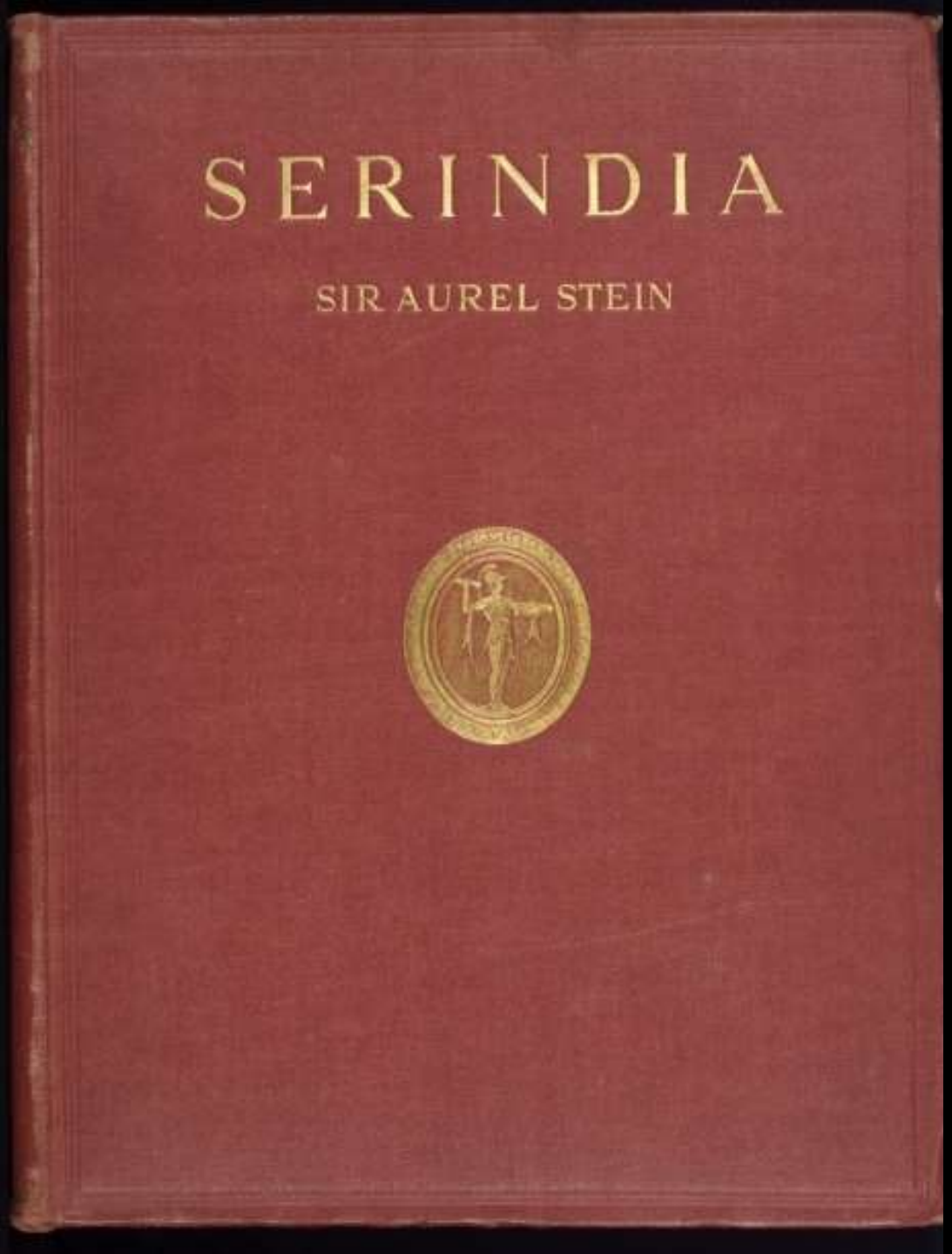
一方、イギリスの探検家スタインは、一九二一年に出版した調査報告書 Serindia の中で、ペリオとは異なる説を唱えている。その説とは？

①イスラム王国カラハン朝脅威説

②仏教末法説

③聖なるゴミ箱説

？



Serindia(セリンディア)

〔解説〕

スタインは一九二一年、第二次中央アジア探検(一九〇六～八年)に関する報告書 Serindia を出版している。本文三冊と写真集一冊、地図集一冊からなるこの報告書には、敦煌文書が発見された直後の莫高窟のようすが写真とともに詳細に紹介されている。

【参考】国立情報学研究所『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ

Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

……大量の文書の中からは、一〇三四年から三七年の間に敦煌を征服し、その後二百年近くこの地を支配した西夏(タングート)王朝の創始者が制定した、あの奇妙な文字(西夏文字を指す—引用者)はまったく見つかっていない。

Aurel Stein: Serindia vol.II, 八二〇頁、一九二一年

西夏文字で書かれた『法華経』25章(木版)

西夏文字

〔解説〕

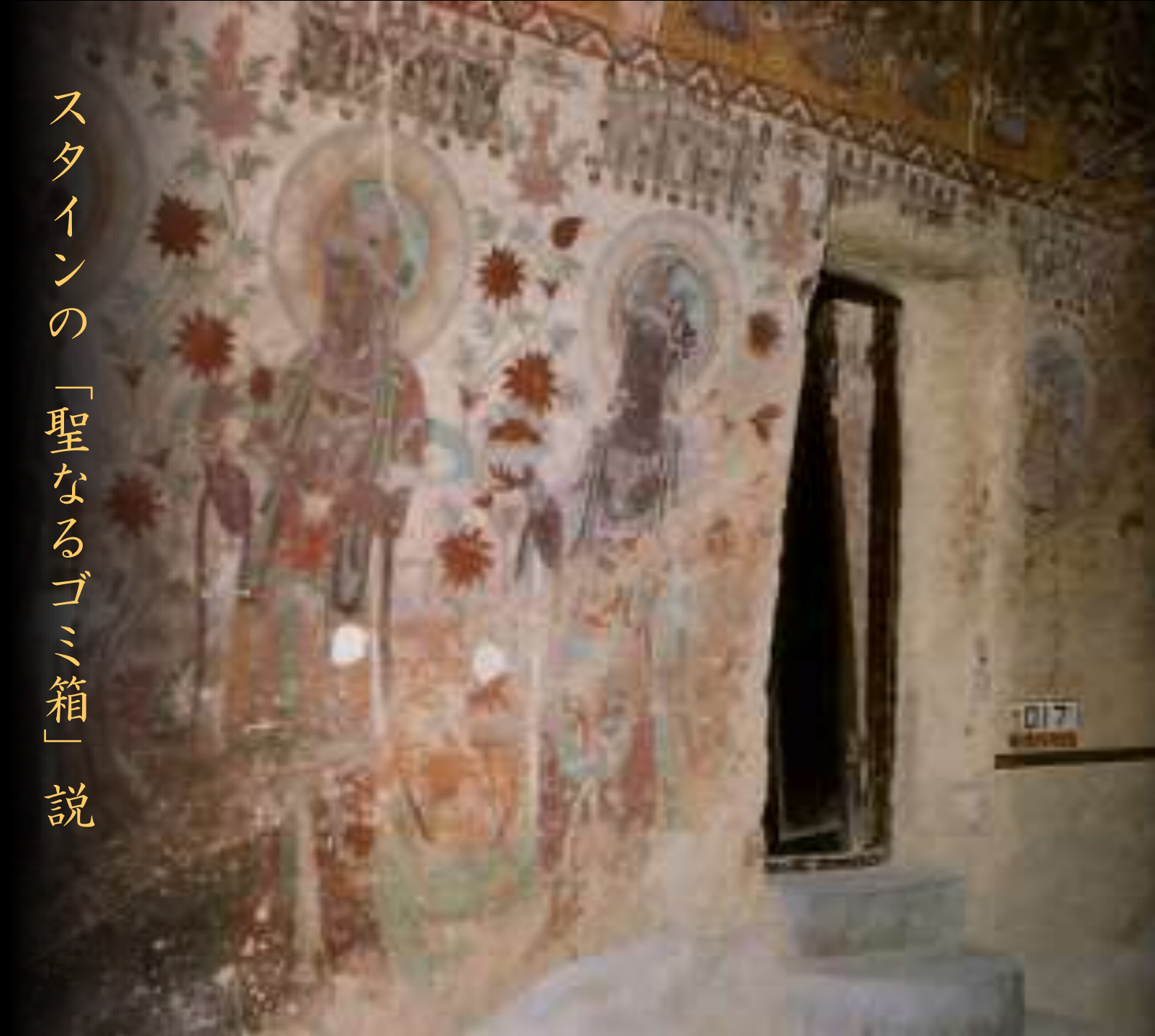
西夏王朝(一〇三二～一二二七)を建国した、タングート族の首長・李元昊が、一〇三六年に制定した文字。約六千種の文字があり、学校教育や公文書の作成、仏教経典の翻訳などに使われた。

謎の文字とされていたが、京都大学の西田龍雄氏らが解読に成功した。

スタインの「聖なるゴミ箱」説

ところが、洞窟の壁画の上には、数百の漢字以外に、チベット文字やモンゴル文字、ウィグル文字のほか、西夏文字が漆喰の上にズグラッフィート(二層に塗った塗料の上層を釘などで削り下層の色を出す技法―引用者)されているのが見えた。

Aurel Stein: Serindia vol.II,八二〇頁、一九二一年



Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

となると、自然考えられることは、この部屋は、たとえばタングート族などの破壊的な侵攻が原因で封印され、その後、保存したこと自体がすっかり忘れ去られてしまったのではないかということである。

Aurel Stein: Serindia vol.II,八二〇頁、一九二一年

Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

ところが、この小部屋ではまた、寺廟や僧院で使用され、不要となった聖なる不要品の貯蔵庫として使われていたことを示す証拠も見つかっている。

Aurel Stein: Serindia vol.II,八二〇頁、一九二一年

Sir Aurel Stein (1862-1943)

スタインの「聖なるゴミ箱」説

なかでも特筆すべきなのは、経典の端切れである漢字を記した紙切れを、丁寧に包んで縫い上げた小さな布袋である。

中国の人々は今でも文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って燃やす習慣があるが、これらは明らかにそれと同じ迷信から行われたものであろう。（完）

Aurel Stein: Serindia vol.III,ハ二〇頁、一九二一年

「敬惜字紙」の習慣

経典を重んじ、因果応報を唱える仏教思想の影響を受けた中国では、文字が書かれた紙を他のごみと分別収集し、惜字塔などと呼ばれる専用の炉で焼く、「敬惜字紙」の習慣が古くから行われていた。

写真は台湾に現存する清代の惜字塔「龍譚聖蹟亭」。

台湾の龍譚聖蹟亭(清光緒元年(1875年))

「敬惜字紙」の習慣

本島人（＝台湾人）は老幼婦女に至るまで一般に文字を尊重する慣習あることは、一度び台湾の地に足を入るれば直に知るを得べし。彼の本島到る処の街庄に於て人々が醵金して一区毎に一人の老翁を雇ひ、街巷に落ち散れる文字ある紙の一切即ち新聞紙、名刺乃至広告紙の破れ紙等、苟も文字あるもの一切を拾って籠に入れ、廟前又は街端、巷角にある所の「字紙炉」、即ち文字ある紙を焼く為め設けある小亭状の紙焼き炉に入れ焼き、其灰の積み溜まるに従て海中に投し、之れにて咸く清め尽したるものとなす風あり。之れ儒教崇拝より来るものなりと云ふ。

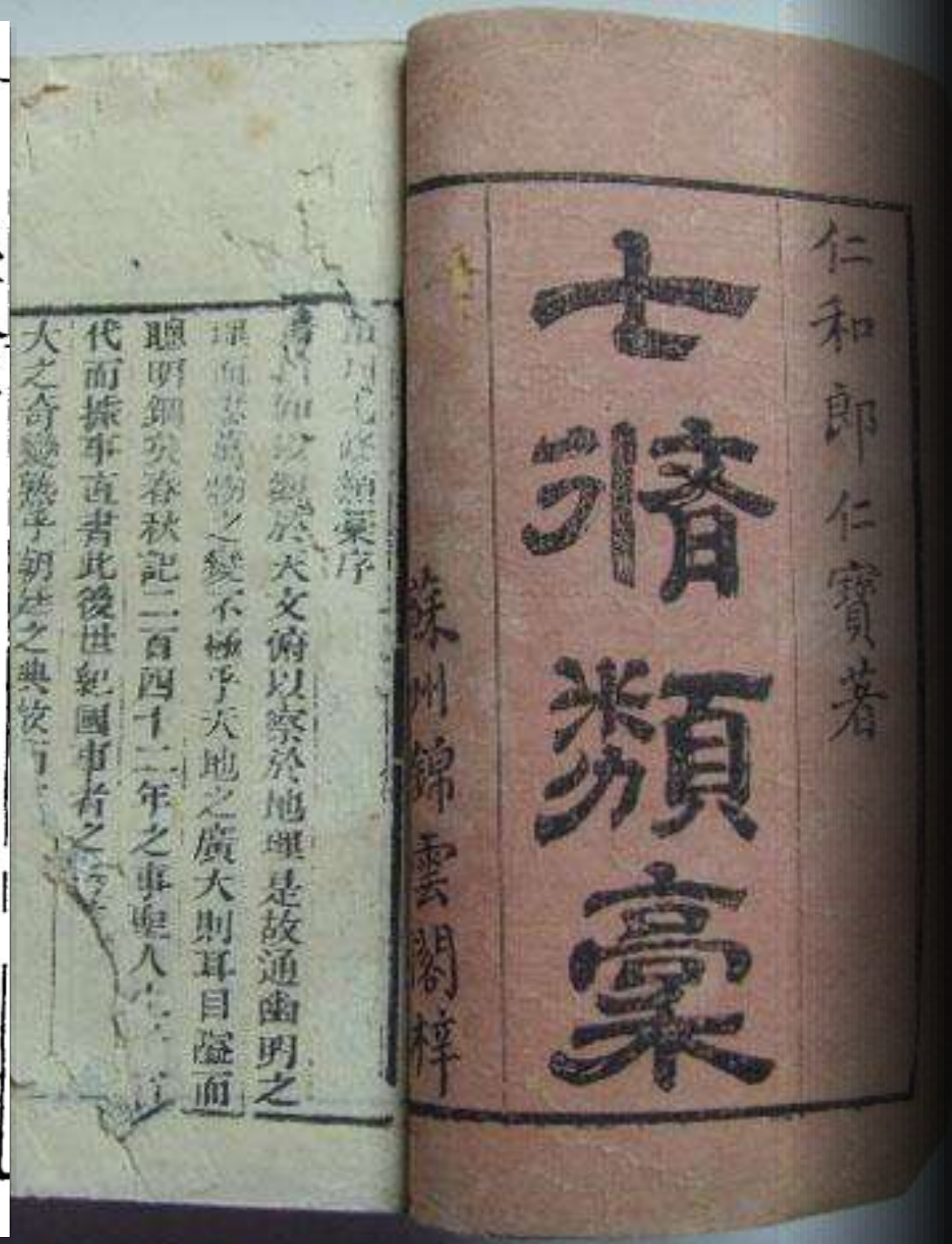
片岡巌『台湾風俗誌』台湾日日新報社
一九二一年一五八～九頁

台湾の龍譚聖蹟亭(清光緒元年(1875年))

儒教経典の恩返し

〔解説〕

明の郎瑛（一四八七～？）の随筆集『七修類稿』巻四十九には、儒教経典の恩返しにまつわる「王沂公生」という一文が収められている。



王沂公生

文昌化書後載梓童地府降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家而生顯大門户未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

（明）郎瑛『七修類稿』巻四十九

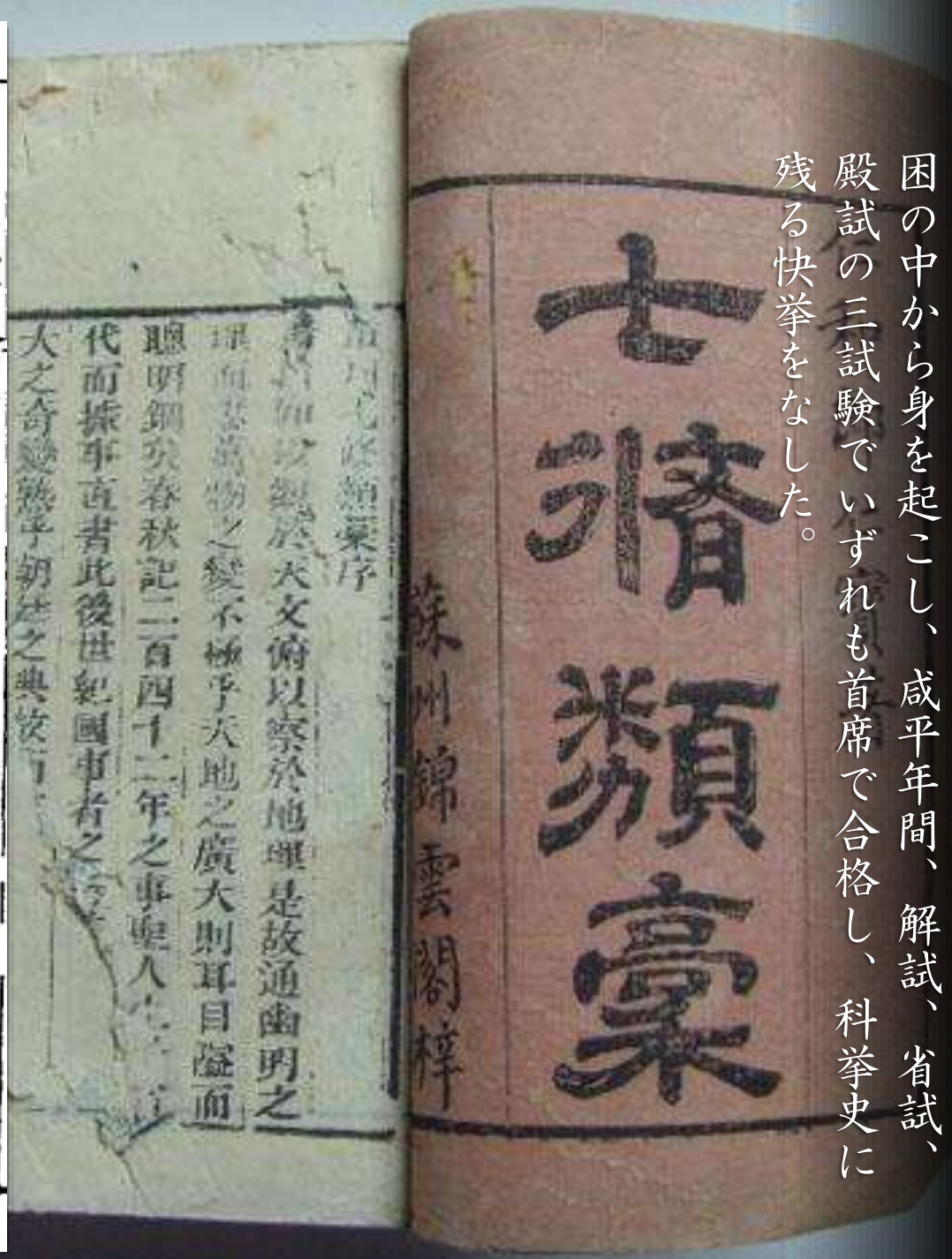
儒教経典の恩返し

宋の王沂(ぎ)公①の父は、文字が書かれた紙が落ちているのを見ると、必ず拾って、香りをつけたお湯で洗い、燃やしていた。

（明）郎瑛『七修類稿』巻四十九・王沂公生

【解説】

①王曽（九七八～一〇三八）、北宋時代の官僚。貧困の中から身を起こし、咸平年間、解試、省試、殿試の三試験でいずれも首席で合格し、科挙史に残る快挙をなした。



王沂公主

文昌化書後載梓童地府降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必拯拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家亟生顯大門户未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子鑿氏親抱送者非欺我也可發一笑

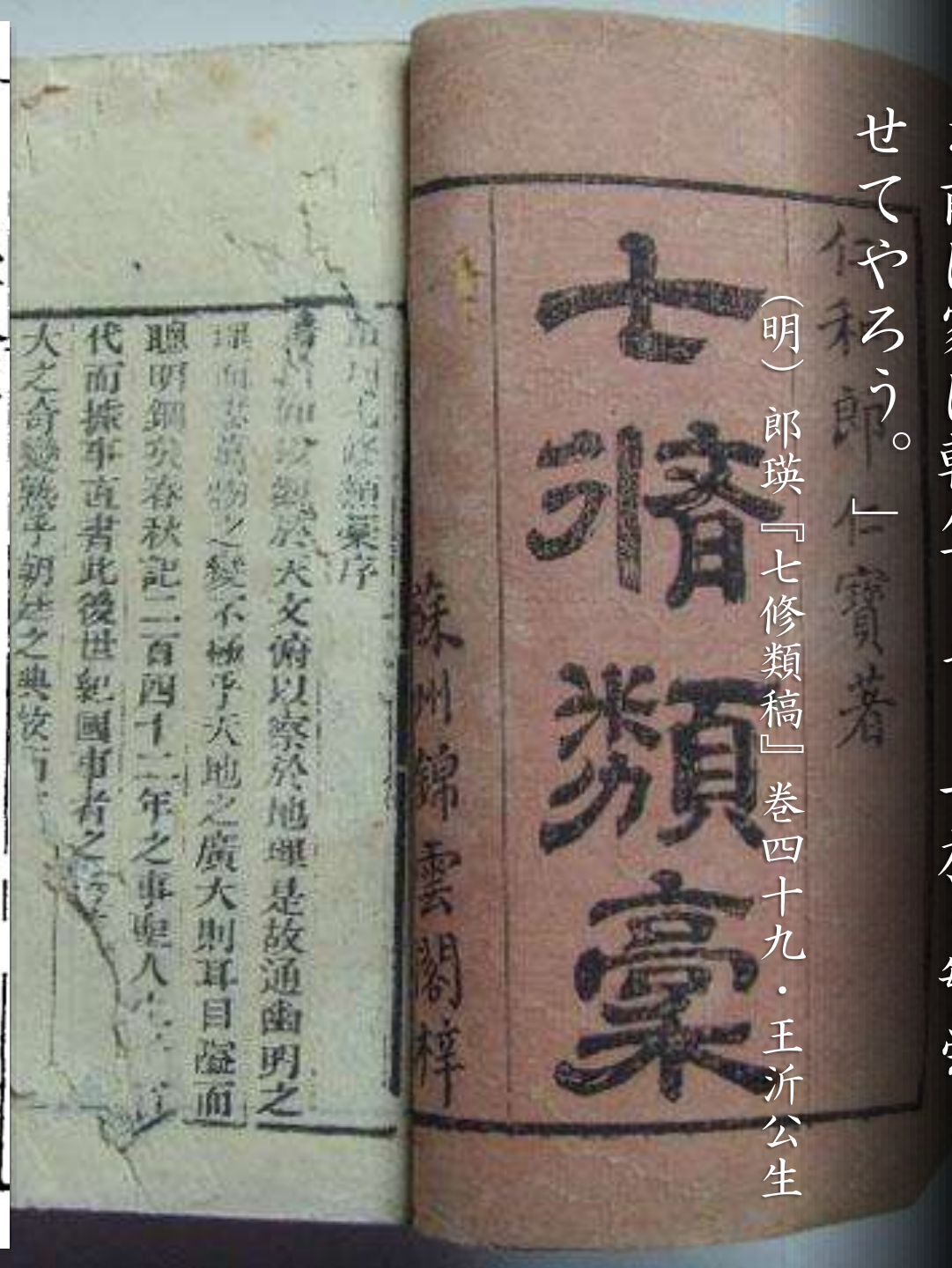
（明）郎瑛『七修類稿』巻四十九

儒教経典の恩返し

ある夜のこと、夢に孔子が現れ、彼の背を叩いてこう言った。

「お前は（儒教の）文字が書かれた紙をなぜそんなに大切にしてくるのか。お前は高齢で立身出世が望めぬのは残念だが、後日、（弟子の）曾参をお前に家に転生させ、一族を繁栄させてやろう。」

（明）郎瑛『七修類稿』巻四十九・王沂公生



王沂公生

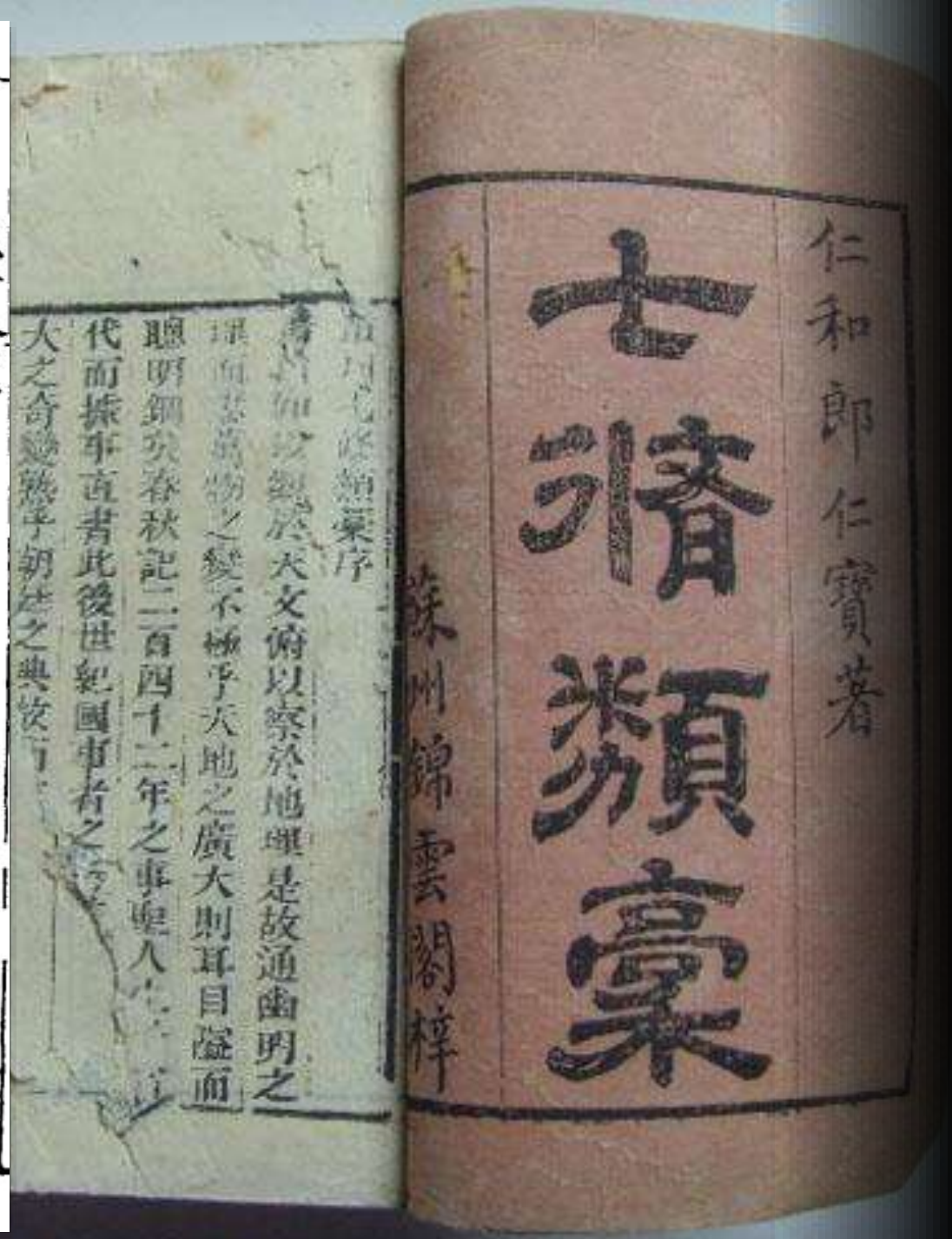
文昌化書後載梓童降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家亟生顯大門户未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

（明）郎瑛『七修類稿』巻四十九

儒教経典の恩返し

しばらくすると、夢のお告げのとおり男の子が生まれたので、(曾参にちなんで)曾と名づけた。すると、夢のお告げのとおり科挙に一番で合格した。

(明) 郎瑛『七修類稿』巻四十九・王沂公生



王沂公生

文昌化書後載梓童降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家亟生顯大門户未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子鑿氏親抱送者非欺我也可發一笑

(明) 郎瑛『七修類稿』巻四十九

儒教経典の恩返し

もしこれが本当なら、われらが孔子様も(仏教が説く)因果応報をやったことになり、杜甫の詩にいう「孔子と釋氏、親しく抱き送る①」も嘘ではないようだ。なんとも滑稽な話だ。

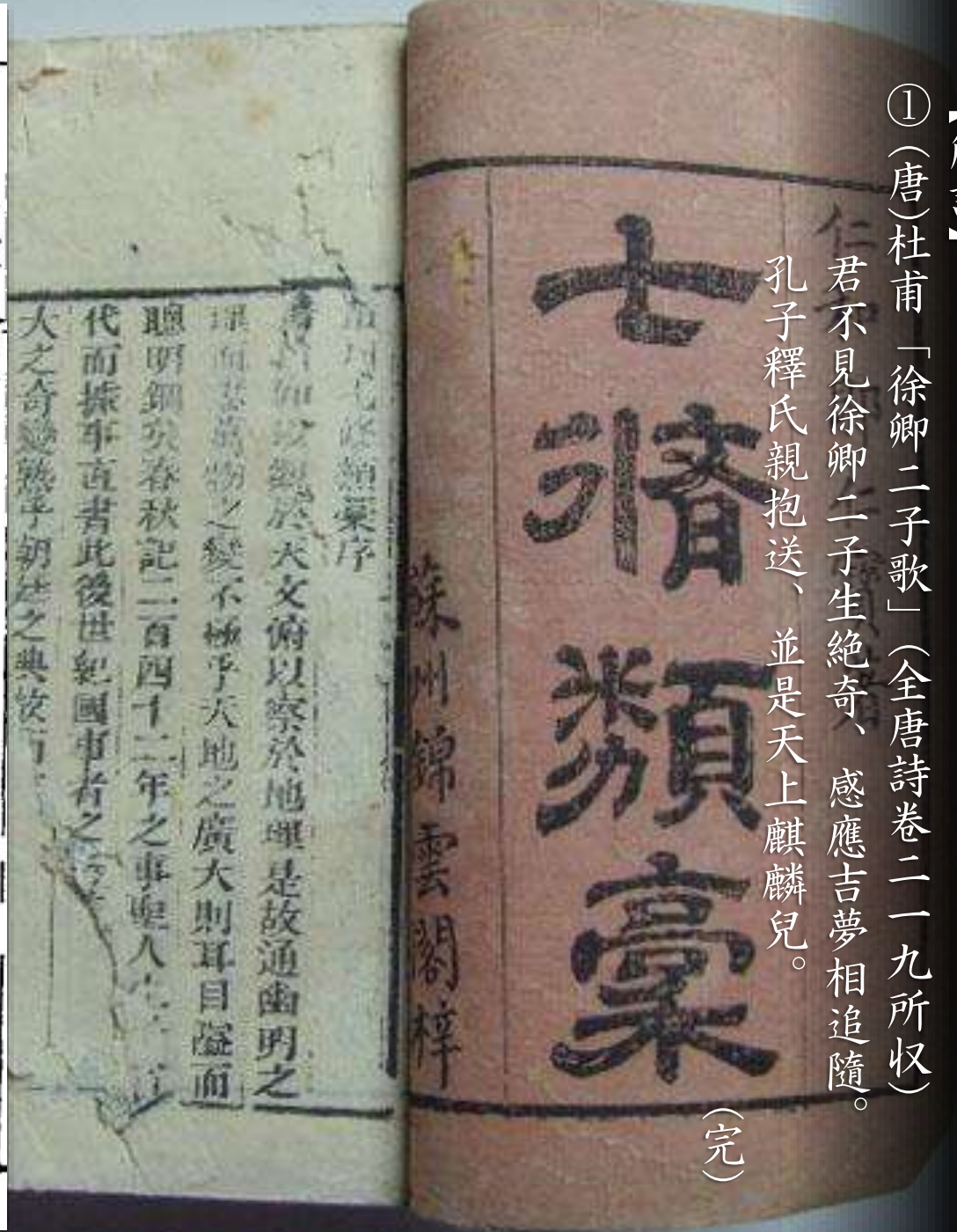
(明) 郎瑛『七修類稿』巻四十九・王沂公生

【解説】

①(唐)杜甫「徐卿二子歌」(全唐詩巻二一九所収)

君不見徐卿二子生絶奇、感應吉夢相追隨。孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒。

(完)



王沂公生

文昌化書後載梓童降筆勸敬字紙文又曰宋王沂公之父見字紙遺墜必拾以香湯洗燒之一夕夢宣聖拍其背曰汝何以重吾字紙之勤也恨汝老矣無可成就他日當令曾參來汝家為生顯大門户未幾果生一男遂命名曾後果狀元及第誠若是則吾夫子亦有輪迴果報之事乎老杜所謂孔子釋氏親抱送者非欺我也可發一笑

(明) 郎瑛『七修類稿』巻四十九

劉蛻「梓州兜率寺文塚銘」

〔解説〕

字紙の処分方法は火葬だけではなかった。唐の劉蛻は、大中元年（八四七年）、梓州の兜率寺に十五年に及ぶ受験勉強で溜まった廃紙二七八〇枚を土葬し、「文塚」を建立した。

梓州兜率寺文冢銘

文冢者長沙劉蛻復愚爲文不忍去其草聚而封之也蛻愚而不銳於用百工之技天不工蛻也而獨文蛻焉故飲食不忘於文晦冥不忘於文悲戚怨憤疾病嬉遊羣居行役未嘗不以文爲懷也適當無事而天下將以文爲號文明代生殖明晦皆效文用故日月星辰文乎旂常昆蟲鳥獸文乎彝器徐方之土文于侯社夏翟之羽文於旌旄登龍於章升玉於藻百工婦人雕鞏染練以供宗廟祭祀之文用豈獨蛻也生知效用不及時文哉然而意常獲助於天而不獲助於人故其窮雖窮無憾也當勤意之時不敢嘘不敢咳不敢唾不敢跛倚嗜慾躁競忘之於心其祇祇畏畏如臨上帝故有粲如星光如貝氣如蛟宮之水又有黯如屯雲如久陰如枯腐熬燥之色則有如春陽如華川逶逶迤迤則有如海運如震怒動盪怪異夫十爲文不得十如意少如意則豈非天助乎帝欲使天下聞之而必行

（唐）劉蛻「梓州兜率寺文塚銘」（『全唐文』巻七八九所収）

スタイン説を補強した中国の研究者

〔解説〕

敦煌文書の価値を重視する中国では、スタインの説を支持する研究者は少ない。その中で、原資料に対する綿密な調査と網羅的なデータ収集によってスタインの説を補強しているのが方広錩氏(一九四八-)である。

方広錩(1948-)

方広錩の「廃棄説」

①敦煌文書から発見された仏教経典はわずか四百種弱に過ぎず、当時の標準的な大蔵経（唐の智昇『開元釈教録』「現蔵入蔵目録」所収一〇七六種）の半数にも満たない。

『方広錩敦煌遺書散論』（上海古籍出版社、二〇一〇年）

方広錩(1948-)

方広錩の「廃棄説」

②敦煌文書はほとんどが使い古しの残巻であり、天竿(巻子本の巻首を保護するためにつけられた細い竹や木)と尾軸(巻子本の軸、左図参照)が揃ったものは、中国国家図書館蔵の一六五七八部の中ではわずか八部、大英図書館蔵の約一四〇〇〇部の中でも三〇部に過ぎない。

『方広錩敦煌遺書散論』
(上海古籍出版社、二〇一〇年)

方広錩の「廃棄説」

③敦煌文書は同じ経典の重複が多く、主要な八種の仏教経典の合計が、中国国家図書館所蔵のものでは全体の六六・三%、世界各地に散在する敦煌文書約六五〇〇〇部の中でも四四・二%を占めている。

『方広錩敦煌遺書散論』（上海古籍出版社、二〇一〇年）

方広錩(1948-)

方広錩の「廃棄説」

〔解説〕

さらに方広錩氏は、中国国家図書館蔵の敦煌文書の中から「この紙は故経処に安置されたし」と書かれた廃紙(『大般若波羅蜜多経』北敦〇七七一一号)を発見している。

氏によれば、この「故経処」とは敦煌の寺院の中にあった廃紙の保管場所を指すという。

『方広錩敦煌遺書散論』
(上海古籍出版社、二〇一〇年)

あなたはペリオの「西夏侵攻説」と、スタインの「聖なるゴミ箱説」や方広錩氏の「廃棄説」のどちらを支持しますか？

蔵経洞内で調査するペリオ(1908年)

まとめ

敦煌莫高窟第十七窟(蔵経洞)から発見された文書の中には、その後散逸した書籍も含まれていた。その一つである敦煌写本『啓顔録』は、日本の狂言「附子」や「鏡男」が、唐代に中国から伝わった笑話に題材を得ていることを明らかにした。

敦煌文書が封蔵された理由については、英国のスタインが唱えた「廃棄説」とフランスのペリオが唱えた「退避説」の二説があるが、中国社会科学院の方広錫氏の研究により、現在では「廃棄説」が有力視されている。

敦煌莫高窟第16窟と第17窟蔵経洞